

青森県埋蔵文化財調査報告書 第259集

野尻(1)遺跡Ⅱ

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会では、国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴い、浪岡町野尻（1）遺跡の発掘調査を実施しました。この遺跡は平成8年度に引き続き、当教育委員会が調査しているものです。

その結果、平安時代の遺構や遺物のほか、縄文時代では、後期の北海道南部の土器が出土するなど、当時の交流を知る上で貴重な資料が出土しました。

この発掘成果が、広く文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、平素より埋蔵文化財の保護に対し、御理解を賜っている建設省東北建設局青森工事事務所並びに浪岡町教育委員会、また、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成11年3月











青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成9年度に実施した、国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う野尻(1)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 野尻(1)遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した「青森県遺跡地図」に、遺跡番号29060として登録されている。
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集作成した。執筆者名は、依頼原稿については文頭に記し、その他は文末に付した。
- 4 資料の分析・鑑定については、次の方々に依頼した。(順不同、敬称略)

土器の胎土分析	奈良教育大学	三辻 利一 氏
黒曜石の産地同定・水と層分析	京都大学原子炉実験所	藁科 哲男 氏
石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸 氏
- 5 本報告書に掲載した地形図(遺跡位置図)は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複写して使用した。
- 6 挿図及び遺物写真の縮尺は、各図・写真ごとにスケール等を付した。
- 7 堆積土等の色調観察には、「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄 1993)を用いた。
- 8 挿図に付した北の方位は、すべて座標北である。
- 9 遺構内において、ビット等の脇に記されたマイナス値は、床面からの深さを示す。
- 10 挿図で使用したスクリーントーンの表示は、次のとおりである。

(遺構関係)					
地山		焼土の範囲		火熱を受けた部分	
還元部分		炭化物の範囲			
(土器・土製品関係)					
ススの付着		内面黒化処理		溶着物の付着	
(石器関係)					
すり(擦)痕		たたき痕			
- 11 観察表で使用した略称は以下のとおりである。

右回転	=	クロク右回転	菊花底	=	底面菊花状調整	回糸切	=	底面回転糸切り調整
-----	---	--------	-----	---	---------	-----	---	-----------
- 12 文中で引用した文献については、著者名、刊行年、書名等を文末に記した。
- 13 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 14 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た(敬称略、五十音順)。遠藤香澄、葛西勲、久保泰、越田賢一郎、佐藤智雄、佐野忠史、鈴木克彦、仙庭伸久、長谷部 弘、高橋潤、藤原弘明、古屋敷剛雄、三宅徹也

目 次

序

例言

目次

第I章 調査の概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	2
第II章 遺跡の概要	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 遺跡の基本土層	7
第III章 遺構と遺物	9
第1節 住居跡	9
第2節 溝跡	71
第3節 土坑	77
第4節 溝状土坑	97
第5節 屋外炉	100
第6節 焼土	101
第IV章 遺構外出土遺物	104
第1節 縄文時代の土器・土製品	104
第2節 弥生時代の土器	106
第3節 平安時代の土器・土製品	106
第4節 石器	116
第V章 自然科学的分析	122
第1節 野尻(1)遺跡出土土器の蛍光X線分析	122
第2節 野尻(1)遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析 および黒曜石遺物の非破壊分析による水和層の測定	129
第VI章 考 察	136
第VII章 まとめ	141
引用・参考文献	143
写真図版	145
報告書抄録	178

第I章 調査の概要

第1節 調査要項

1 調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する野尻（1）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存し、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

平成9年4月30日から同年10月29日まで

3 遺跡名及び所在地

野尻（1）遺跡（青森県遺跡台帳番号29060）

青森県南津軽郡浪岡町大字高屋数字野尻155-4、外

4 調査面積

11,000平方メートル

5 調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

浪岡町教育委員会、中南教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 青森大学教授（考古学）

調査協力員 蝦名 俊吉 浪岡町教育委員会教育長

調査員 山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

工藤 清泰 浪岡町町史編纂室主査（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課長 鈴木 克彦（現 青森県立郷土館学芸主幹）

主 幹 工藤 大（現 青森県教育庁文化課文化財保護主幹）

主 事 佐藤 智生（現 文化財保護主事）

調査補助員 葛西 収 野藤さおり 今 洋子 館岡 杏子

第2節 調査方法

1 グリッドの設定（図3）

平成9年度の発掘調査では、平成8年度の野尻（1）遺跡の調査で設定したグリッドを、そのまま延長して使用した。平成8年度の調査では、道路建設用の中心杭ENO.3とENO.7を結ぶ線をグリッド設定の基準線（CRライン、座標北から東に88度）とし、このライン（ほぼ東-西方向）に4m単位でアルファベット、これと直交するライン（ほぼ北-南方向）に算用数字を付け、その組合せ（北東隅の交点）で4×4mの各グリッド表示した。野尻（1）遺跡の調査対象面積が広いので、アルファベットは2文字の組合せとなっている。

2 遺構の調査

検出遺構は、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。セクションベルトは確認した遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的に4分割ないし2分割で設定した。ただし付属施設等を検出した場合には、必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、基本土層（ローマ数字）と区別した。遺構の実測図は、簡易遺り方測量によって、原則として縮尺20分の1で作成したが、付属施設等については、必要に応じて縮尺10分の1で作成した。測量用のレベル原点は、平成8年度調査時のレベル原点から移動して、調査区域内の適当な位置に設置した。

3 遺物の調査

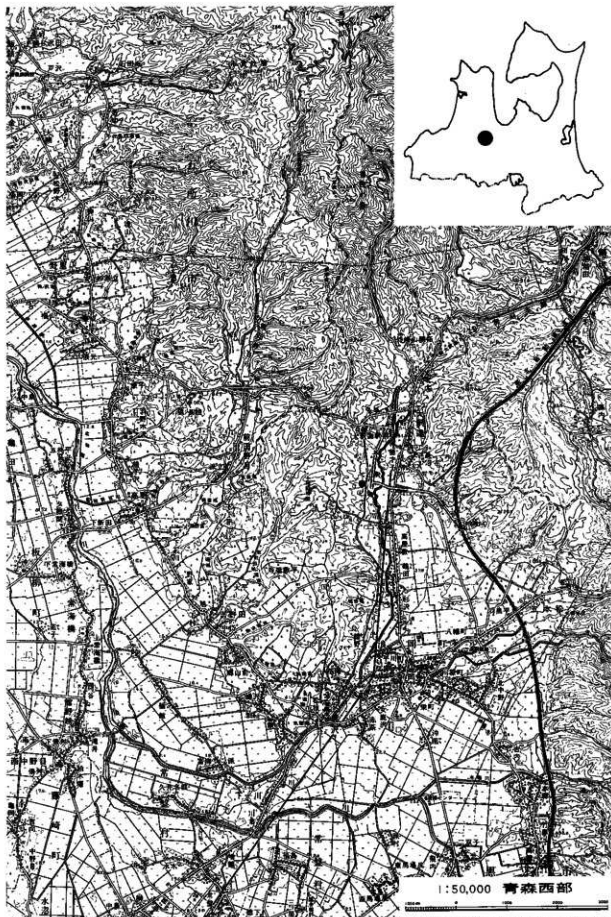
遺構内外の出土遺物については、必要に応じて縮尺20分の1ないし10分の1で実測図を作成したが、その他の遺物は、遺構又はグリッド単位で種類別に一括して取り上げた。

4 写真撮影

35ミリのモノクローム、リバーサル2種類のフィルムを使用し、作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況等について記録撮影した。

第3節 調査経過

4月30日、調査器材等を現地に搬入し、環境整備後発掘調査を開始した。粗掘り作業は、調査対象区域の東側（大体グリッドの42～54ライン）から進めたが、この区域には土捨て場がなかったので、排土移動のために重機を使用した。東側区域の遺構精査終了後、ここを土捨て場として西側（斜面上方）の粗掘りを進めた。斜面上方の北側（大体グリッドの55～65ライン、CK～COライン）は沢地形で、遺構や遺物はほとんど出上しないことが予想されたので、この区域の粗掘りには重機を利用した。斜面上方の遺構精査終了後、この区域の北側を土捨て場として、斜面最上部（グリッド72～90ライン、CH～CQライン）の粗掘りを進めた。最上部の南側はかなり急な斜面になっているので、ここでも粗掘りに重機を使用した。10月末にはこの区域の遺構精査を終了し、10月29日に調査器材、出土遺物等を搬出し、予定どおり発掘調査を終了した。（上藤 大）



(本図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「青森西部」を複製したものである)

図1 遺跡位置図

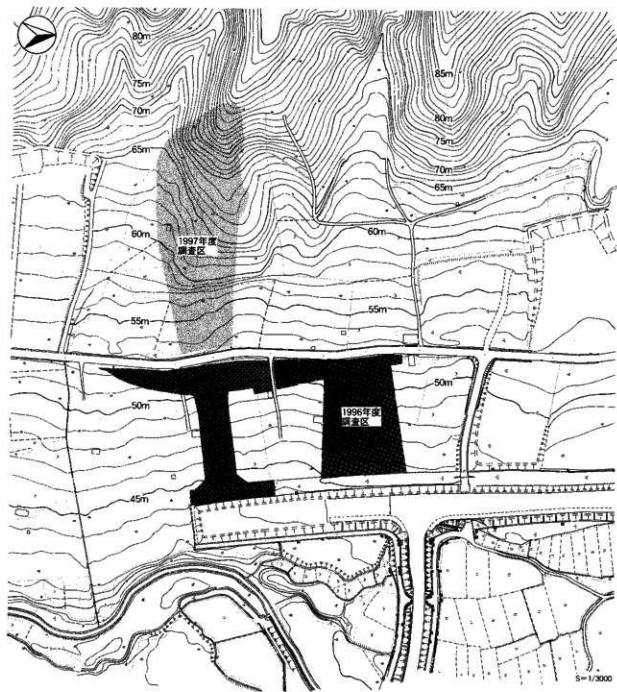


図2 野尻(1)遺跡調査区

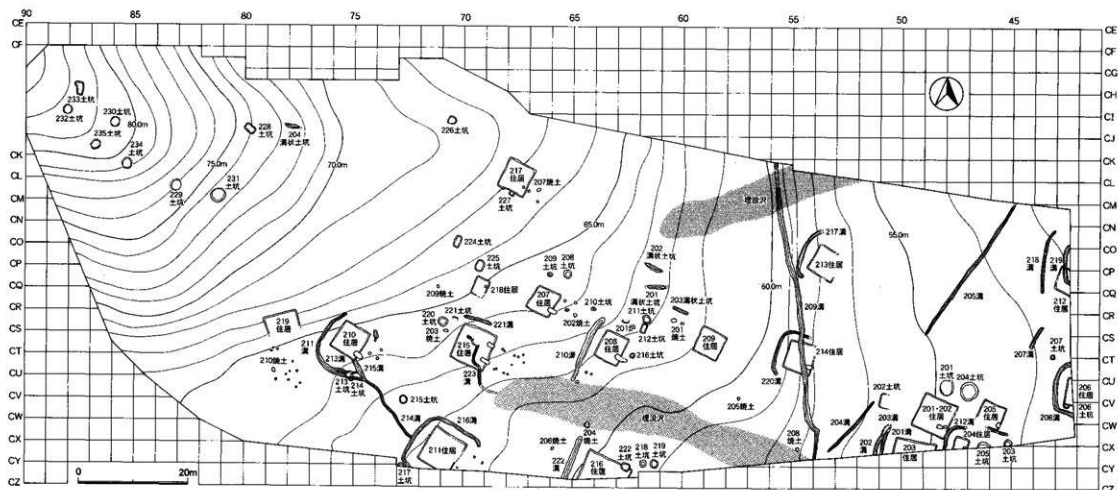


図3 グリッド・遺構配置図

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置(図1)

野尻(1)遺跡は、津軽半島南部の梵珠山から南に下る大釈迦川の右岸にあり、東に向かって傾斜する河岸段丘上に位置している。大釈迦川はさらに南下して、浪岡町の女鹿沢付近で浪岡川に合流する。野尻(1)遺跡は、総面積約5万平方メートルに及ぶ広大な遺跡であるが、今回の調査区域は遺跡の南西側にあたり、地形的には標高約60～55mの低位段丘面と、標高約75～60mの中位段丘面に分かれている。

第2節 遺跡の基本土層(図4)

野尻(1)遺跡及び周辺地域の基本土層は、調査員の山口義伸氏によって、次のように区分されている。

第I a層	黒褐色土	耕作土。非常にかたい。しまりに欠け、もろい。乾くとクラックが発達し、格子状に割れやすい。黒灰色に変色しやすい。
第I b層	黒色土	表土。粘性、湿性多少あり。非常にかたさはあるが、しまりに欠け、もろい感じ。
第II層	黒褐色土	粘性、湿性ややあり。しまりはあるが、全体的にソフトである。苫小牧火山灰(白頭山火山灰)がブロック状に混入する(やや上部に位置する)。全体的に細粒砂質。また、軽石粒の混入も多少みられる。
第III a層	黒色腐植質土	粘性、湿性あり。かたさ、しまりはあるが、全体的にソフトな感じ。乾くとクラックが発達し、格子状の割れが目立つ。全体的に粘土質で、低地に堆積する。
第III b層	黒色腐植質土	粘性、湿性あり。かたさ、しまりはあるが、全体的にソフトな感じ。クラックは発達しない。全体的に粘土質で、低地に堆積する。
第IV a層	黒褐色土	漸移層。腐植質で、軽石粒がより混入。かたさ、しまりややあり。粘性、湿性あり。全体的にソフトである。
第IV b層	暗褐色土	多少腐植質。軽石粒・ブロックの混入が多く、ややしまりに欠ける。
第V層	明黄褐色軽石	緻密堅固。千曳浮石に対比。軽石粒(径5～10mm)がより混入。
第VI a層	灰黄褐色凝灰質粘土	塊状無層理(浮石流堆積物の一部か?)。
第VI b層	黄灰色凝灰質粘土	多少縞模様をなす(浮石流堆積物の一部か?)。
第VI c層	灰褐色～灰黄褐色凝灰質粘土質砂層	不淘汰。縞模様をなす。
第VII層	黄灰色～灰白色粘土	最上部に酸化被膜(5～10mm)あり。酸化被膜は、時として厚さ5cmにもなる。

今回の調査区域では、埋没沢等の地山が深い区域を除いて、第I層が約25～10cm、第II層が約25～0cm、第III層が約15～0cm、第IV層が約40～10cm、第V層が約30～10cmの厚さとなっている。全体的に第II～III層が薄くなっており、第II層又は第III層が欠けるところも少なくない。また、

調査区域の東側（大体グリッドの54ラインから東）では、リンゴ畑造成のためにかなり削平され、所々に攪乱穴（抜根痕）や盛土がみられた。

なお、野尻（1）遺跡周辺の地形と地質については、「青森県埋蔵文化財調査報告書第234集 野尻（1）遺跡Ⅰ」をはじめとして、これまで青森県教育委員会から多数刊行されている、浪岡町北部及び五所川原市東部地域の発掘調査報告書に詳しく記載されているので、本報告書では省略した。

（工藤 大）

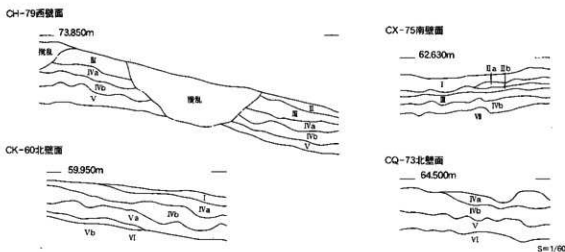


図4 基本土層

第Ⅲ章 遺構と遺物

野尻(1)遺跡の調査では、住居跡19軒、溝跡22本、土坑34基、屋外炉1基、焼土10基を検出、精査した。今回の調査は、平成8年度に続く第2年次の発掘調査となるので、検出遺構には種類別に各々第201号から順に番号を付けた。ただし土坑の第223号は、精査後住居跡(第218号)であることが分かったので、欠番になっている。また、第204号溝跡と第205号溝跡は同一の遺構とみられるが、別個に検出、精査したため各々別番号になっている(遺構数としては併せて1本の溝跡とした)。検出遺構は種類別・番号順に記載しているが、住居跡に伴う外周溝とみられる溝跡等については、各住居跡の項に続けて、図版とともに掲載した。

調査区域の地形は、西側が大沢迦川の中段段丘面、中央部から東側が低位段丘面になっており、中央部の低位段丘頂部から、北東及び南西方向に下る2本の埋没沢がある。検出遺構の分布区域は地形的にはっきり分かれ、西側の中段段丘面では主に縄文時代の土坑等、東側の低位段丘面では主に平安時代の住居跡や溝跡等を検出した。(工藤 大)

第1節 住居跡

第201号住居跡、第202号住居跡(図5・6、表1・2)

[概要] 削平及び攪乱を受けているため遺存状態は不良である。竪穴住居跡部分は、壁面を有し竪穴として捉えられる第201号住居跡と、ピットの配置(ピット1~7)から住居跡とされる第202号住居跡が存在する。両者の新旧関係は、第201号住居跡が古く、第202号住居跡が新しいものと思われる。

[位置・確認] CU-48、CV-47~49、CW-47~49グリッドに位置する。第V層上面で暗褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[重複関係] 第201号住居跡と第202号住居跡の新旧関係については、遺構の残存状況が悪くセクションでの確認はできなかったため、カマドの新旧関係から判断すると、カマドが通常壁際に設けられることを考えた場合、第201号住居跡は残存状態の悪い第2号カマドが、第202号住居跡には残存状態の良好な第1号カマドが伴うことから、第201号住居跡が古く、第202号住居跡は新しいものと判断される。

またこの他に、第201号住居跡が、第204号住居跡の外周溝である第212号溝跡によって切られていることから、第201号住居跡は第204号住居跡よりも古いものと思われる。

[形態・規模] 第201号住居跡の平面形は確認面、床面とも方形である。壁長は、東側が確認面で6.30m、床面で6.18m、西側が確認面で6.30m、床面で6.24m、南側が確認面で6.18m、床面で6.06m、北側が確認面で6.30m、床面で6.24mである。壁溝の深さは0.6~31.0cm。遺構は灰黄褐色粘土(第VI層)まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)及び灰黄褐色粘土(第VI層)を用いて貼床としている。確認面から床面までの壁高は0.4~27.2cmと浅く、とりわけ遺構東側の遺存状態が悪い。床面はほぼ平坦であるが、東側ほど厚く床を貼っており、掘り方は斜面の傾斜に合わせ東側に傾く。推定される床面積は38.39㎡。

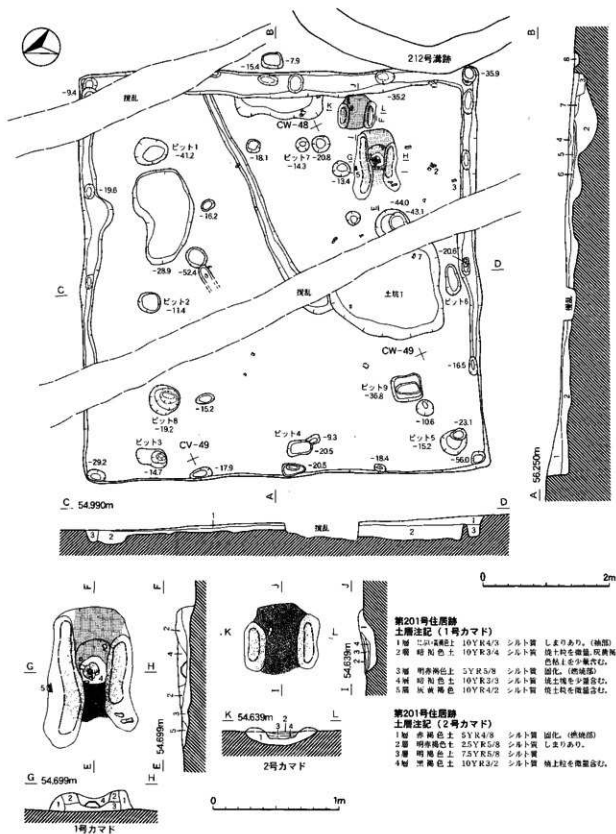


図5 第201号住居跡

一方、第202号住居跡の平面形は、ビットの配置から約5.76m×5.10m程の方形を呈するものと思われる。床面積は29.38㎡と推定される。

[柱穴・土坑] ビット及び土坑が検出されたが、第202号住居跡の柱穴を示すビット1～7を除いては、どちらの住居跡に伴うものかは不明である。よって柱穴の配置を主に記載すると、第201号住居跡は各コーナーに比較的大きく深いビットがあり、その間を埋めるように、各壁際に3基を基本とする隅丸方形の小ビットがほぼ等間隔に配される。内部には比較的大きなビット（ビット8・9）がみられるが、これに対応するカマド側壁面方向のビットは確認されなかった。

また、第202号住居跡については、比較的大きなビットを各壁際に3基配したものと思われる。

尚、これらのビットの中には隅丸方形を呈するものが比較的多くみられ、柱として板材が用いられた可能性が考えられる。

[付属施設] カマドが2基検出された。第202号住居跡に伴う第1号カマドは、比較的残存が良好であり、中程に支脚として上師器の坏（4）を転用し据えている。支脚周辺はくぼんでおり燃焼部とは高低差がみられる。くぼんだ部分は、火熱による固化や赤化現象が認められないことから、この部分

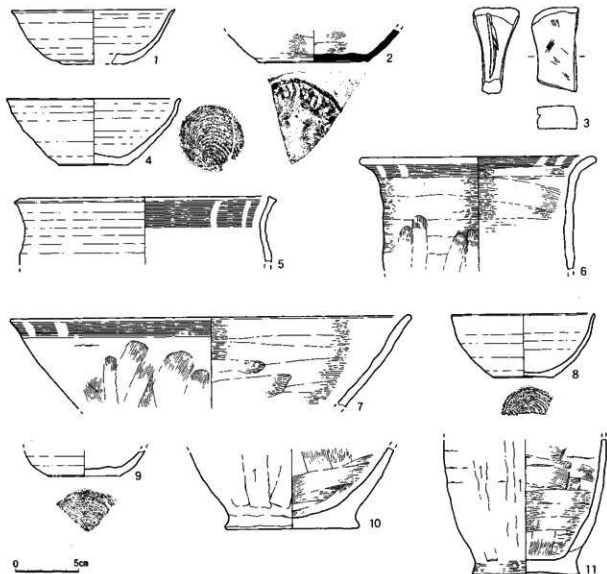


図6 第201号住居跡出土遺物

に対する火熱の影響が比較的少なかったことを窺わせる。また、芯材等が用いられた様子はなく、構築は粘土を主体的に用いたものと思われる。

これに対し、第201号住居跡に伴う第2号カマドは袖部が殆ど残存しておらず、ほぼ燃焼部のみといった状態である。出土遺物も乏しく図化し得ない。

[堆積土] 全体的には、暗褐色土の自然堆積と壁面の崩落とみられる明黄褐色軽石が主体となる。鍵層となる降下火山灰は見当たらない。

[出土遺物] 1～3・5・11は床面、4は第1号カマド、6・7は土坑1、8～10は覆土中からの出土である。床面からの出土遺物が乏しい上に、どちらの住居跡に伴うか明確にし難い。ただ、第202号住居跡が後出ならば、そのプラン内にある2・4・5は第202号住居跡床面の遺物として捉えられるかもしれない。遺物は、平安時代の土器が169片(1,880g)が、カマド周辺に偏るかたちで出土した。(佐藤 智生)

表1 第201号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図番番号	種別	種類	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	土器所
6-1	土師器	杯	(13.0)	4.3	(4.8)	BR	G	C	40	床 面	図未切	-
6-2	須恵器	壺	-	(2.5)	(8.6)	W計	J	B	30	床 面	菊花産	-
6-4	土師器	杯	13.8	5.3	5.5	WCS	E	B	90	1号カマド	支脚に転用	-
6-5	土師器	壺	(19.8)	(5.2)	-	CS	C	B	20	床 面	ロク口成形?	-
6-6	土師器	壺	(18.4)	(9.0)	-	RCS	G	B	30	土坑1		-
6-7	土師器	壺	(31.8)	(7.2)	-	WCS計	H	B	20	土坑1		-
6-8	土師器	杯	(11.4)	5.0	(4.6)	WS	H	A	40	覆 土	右面転、図未切	-
6-9	土師器	杯	-	(2.0)	(5.8)	WS	E	B	20	覆 土	図未切	-
6-10	土師器	壺	-	(6.3)	10.4	WCS	H	B	60	覆 土	砂底	-
6-11	土師器	壺	-	(10.7)	8.4	WBS	D	A	40	床 面		-

表2 第201号住居跡出土石群観察表

図番番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石質	備考
6-3	磁石	床 面	6.8×3.7×1.8	111.5	流紋岩	すり痕

第203号住居跡(図7・8、表3・4)

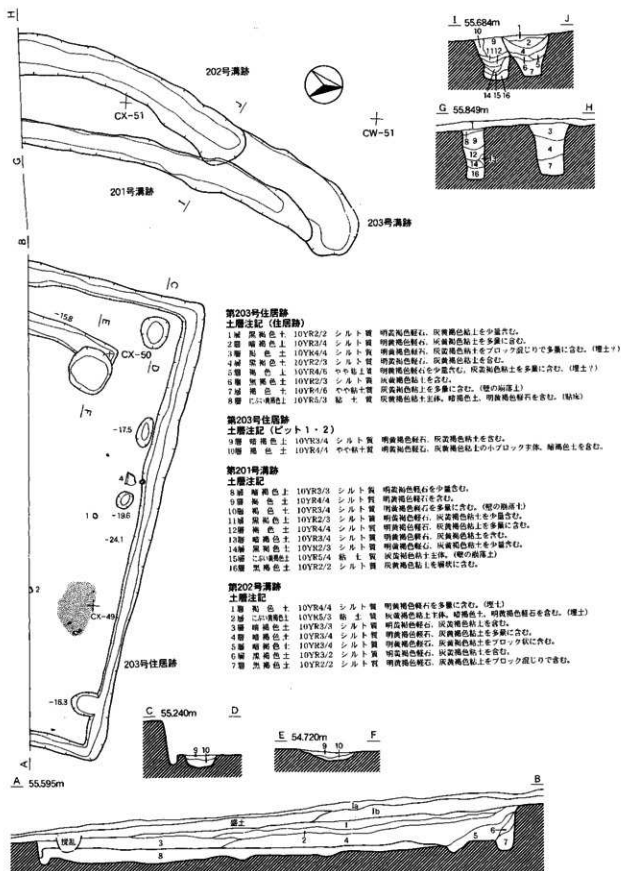
[位置・確認] CW-49・50、CX-48～50グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[形態・規模] 遺構の南側過半部は調査区域から外れているので、北側の一部を精査しただけであるが、平面形は確認面、床面とも方形となっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した北側の壁長は確認面で7.26m、床面で7.08mである。壁際には、深さ6.6～31.8cmの周溝が巡っている。遺構は基本土層の第V～VI層を掘り込んで作られ、灰黄褐色粘土(第VI層)を主体とした貼床がみられる。貼床は東側(斜面下方)が厚くなり、確認面から床面までの壁高は10～56cmである。床面はほぼ平坦になっているが、掘り方の底面は凹凸が著しい。

[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを北西側の床面で1個、柱穴状の小ピットを北壁寄りの床面で3個、貼床下で1個検出した。このなかの壁寄りに並ぶ3個が柱穴とみられる。

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 全体的には黒褐色土と暗褐色土を主体とする自然堆積とみられるが、東側の床面上に厚く堆積する明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を主体とする層(3層)は、人為的な要因による堆積土と考えられる。西壁寄りに多く混入している灰黄褐色粘土(第VI層)は、壁面の崩落



第203号住居跡

土層注記 (住居跡)

- | | | | |
|---------|---------|-------|--------------------------------|
| 1層 灰黄色土 | 10YR2/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 2層 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。 |
| 3層 褐色土 | 10YR4/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。(埋土?) |
| 4層 灰黄色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 5層 褐色土 | 10YR4/6 | やや粘り質 | 明黄褐色軽石を少量含む。灰黄褐色粘土を多量に含む。(埋土?) |
| 6層 灰黄色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 灰黄褐色粘土を含む。 |
| 7層 褐色土 | 10YR4/6 | やや粘り質 | 灰黄褐色粘土を多量に含む。(埋土?) |
| 8層 灰黄色土 | 10YR3/3 | 粘り質 | 灰黄褐色粘土、暗褐色土、明黄褐色軽石を含む。(埋土?) |

第203号住居跡

土層注記 (ピット1・2)

- | | | | |
|---------|---------|-------|---------------------|
| 9層 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 10層 褐色土 | 10YR4/4 | やや粘り質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |

第201号溝跡

土層注記

- | | | | |
|----------|---------|------|------------------------|
| 8層 暗褐色土 | 10YR3/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石を少量含む。 |
| 9層 褐色土 | 10YR4/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石を含む。(埋土?) |
| 10層 褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石を多量に含む。(埋土?) |
| 11層 暗褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 12層 褐色土 | 10YR4/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 13層 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 14層 暗褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 15層 暗褐色土 | 10YR5/4 | 粘り質 | 灰黄褐色粘土、灰黄褐色粘土を含む。(埋土?) |
| 16層 暗褐色土 | 10YR2/2 | シルト質 | 灰黄褐色粘土を多量に含む。 |

第202号溝跡

土層注記

- | | | | |
|---------|---------|------|-----------------------------|
| 1層 褐色土 | 10YR4/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石を多量に含む。(埋土?) |
| 2層 灰黄色土 | 10YR5/3 | 粘り質 | 灰黄褐色粘土、暗褐色土、明黄褐色軽石を含む。(埋土?) |
| 3層 暗褐色土 | 10YR3/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 4層 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。 |
| 5層 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。 |
| 6層 暗褐色土 | 10YR3/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。 |
| 7層 暗褐色土 | 10YR2/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を多量に含む。 |

図7 第203号住居跡、第201～203号溝跡

によるものとみられる。

[出土遺物] 床面(1~4)及び堆積土(5・6・8~10・11)から、平安時代の土師器(環・甕等)、須恵器(坏等)、縄文時代前期の土器(深鉢)が49片(1,880g)出土した。このほか、北壁寄りの床面から礫が1点出土し、北東側の床面上には、炭化物を含む不整形円形の薄片が88×54cmの範囲で拡がっていた。

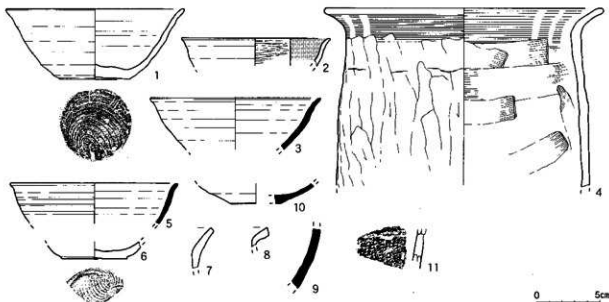


図8 第203号住居跡・第201号溝跡出土遺物

表3 第203号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	土質分析
8-1	土師器	坏	(14.2)	5.6	5.6	WCS	E	B	40	床面	右回転	-
8-2	土師器	坏	(11.8)	(2.2)	-	針	G	B	10	床面	-	-
8-3	須恵器	坏	(13.6)	(4.1)	-	W針	F	B	20	床面	火障	-
8-4	土師器	甕	(22.0)	(14.1)	-	WRCS針	H	B	30	床面	-	-
8-5	須恵器	坏	(13.2)	(3.2)	-	W	H	C	10	覆土	-	-
8-6	土師器	坏	-	(1.4)	(5.2)	WS	G	A	20	覆土	右回転、田糸切	-
8-8	土師器	甕	-	-	-	WRC	H	B	-	覆土	-	-
8-9	須恵器	壺	-	-	-	W針	J	B	-	覆土	-	-
8-10	須恵器	坏	-	(1.6)	(4.0)	W	C	B	10	覆土	-	-

表4 第203号住居跡出土土器観察表(縄文)

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	土質分析
8-11	Ⅱ-2 円筒下層d式	覆土	深鉢 胴部	早輪絶糸体第1類(L)	-	-

第201号溝跡(図7、表5)

[位置・確認] CW・CX-50グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土と褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第203号溝跡の南東側を切り、遺構の一部を第202号溝跡によって切られている。

[形態・規模] 北側の長さ約5mの部分を経査したが、遺構の南側は調査区域外に延びている。第203号住居跡の西側を弧状に巡る配置となっているが、全体形は分からない。溝の中は確認面で0.38

～0.60m、底面で0.25～0.38mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは47～68cmで、底面には凹凸があり、全体として南に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁面の崩落によるとみられる明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を層状に含む。堆積上は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積上から、平安時代の土師器が8片（190g）出土した。（工藤 大）

表5 第201号溝跡出土土器観察表（土師器）

図面番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土分析
8-7	土師器	壺	-	-	-	WR針	D	B	-	覆土		-

第202号溝跡（図7）

[位置・確認] CW-50・51、CX-51グリッドに位置する。第VI層上面で、褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第201号溝跡の一部と、第203号溝跡の南東側を切っている。

[形態・規模] 北東側の長さ約4mの部分を精査したが、遺構の南西側は調査区域外に延びている。第203号住居跡の西側を弧状に巡る配置となっているが、全体形は分からない。溝の巾は確認面で0.48～0.72m、底面で0.24～0.32mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは33.2～70.4cmで、底面には凹凸があり、全体として少し南に傾斜している。

[堆積土] 上部の明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を主体とする層（1・2層）は、人為的な起因による堆積土と考えられる。下部は黒褐色土と暗褐色土を主体とする。壁面の崩落による明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）をブロック混じりで含み、自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第203号溝跡（図7）

[位置・確認] CW-50グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 遺構の南東側大半を、第201号溝跡と第202号溝跡によって切られている。

[形態・規模] 北西側の残存部分約2mを精査したが、全体形は分からない。溝の巾は確認面で0.54～0.70m、底面で0.40～0.62mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは12.6～23.0cmで、底面には凹凸がある。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）が混入している。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第204号住居跡（図9、表6・7）

[位置・確認] CW・CX-47・48グリッドに位置する。第IV～V層上面で、黒褐色土と褐色土の落ち込み（方形）として確認した。

[形態・規模] 遺構南側は調査区域外にあるため、北側を精査しただけであるが、平面形は確認面、床面とも方形となっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した北側の壁長は確認面で2.40m、床面で2.34mである。壁際には、深さ7.6～27.1cmの周溝が巡っている。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)のブロックを主体とした貼床がみられる。貼床は壁寄りで厚くなり、床面中央部では薄くなっている。確認面から床面までの壁高は8.1～30.3cmである。床面はほぼ平坦になっているが、掘り方の底面には大きな凹凸がある。

[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを、北東隅寄りの床面で1個検出した。また柱穴状の小ピットを、北東隅、北西隅及び壁際の床面(周溝内)で5個、東側の遺構外で2個検出した。各隅と壁際に並ぶ小ピットは壁柱穴とみられる。

[付属施設] 東壁の南東隅寄りに、半地下式のカマドを設置しているが、過半部は調査区域から外れている。精査した片袖部は、主に灰黄褐色粘土(第VI層)で構築され、内側には火熱を受けた痕がある。燃焼部には最厚5cmほどの焼土が堆積し、上面は固化している。

[堆積上] 主に遺構の西側(斜面上方)から流入した状態で、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を多量に含む層(2層)がかなり厚く堆積している。したがって堆積土の大半は、人為

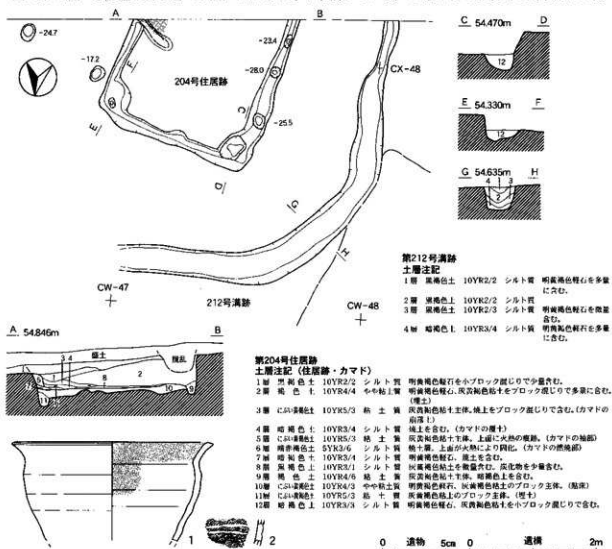


図9 第204号住居跡・出土物、第212号溝跡

的な起因によるものと思われる。床面上には、炭化物を含む薄い層がみられる。

[出土遺物] カマド内(1)及び堆積土(2)から、平安時代の土師器、縄文時代後期の土器(鉢)が30片(200g)出土した。

表6 第204号住居跡出土土器観察表(土師器)

図版番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土箇所
9-1	土師鉢	淺	(15.2)	(7.8)	-	WRCS	E	C	30	カマド		-

表7 第204号住居跡出土土器観察表(縄文)

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	出土箇所
9-2	IV-1 十椀内1式	覆土	深鉢?	胴部	磨消縄文(L)充填	-

第212号溝跡(図9)

[位置・確認] CW・CX-47・48グリッドに位置する。第V層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 第204号住居跡の北～西側を巡る長さ約8mの部分で精査したが、遺構の南側は調査区域外に延びている。全体形は分からないが、精査した部分からみて、第204号住居跡の東側を除く隅丸方形ないし楕円形に近い形態になるようである。溝の中は確認面で0.16～0.58m、底面で0.08～0.36mである。遺構は基本土層の第V～VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは1.6～45.5cmである。底面には凹凸があり、全体として北～東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

(T.藤 大)

第205号住居跡(図10、表8)

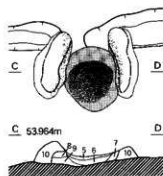
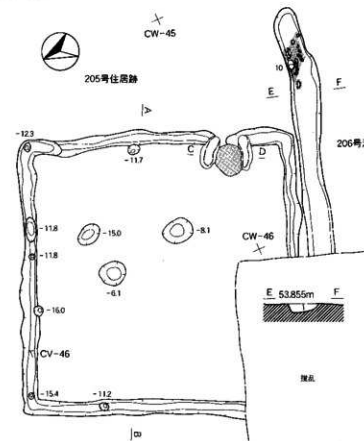
[位置・確認] CU・CV・CW-45・46グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形であるが、遺構の西隅側は後世の擾乱により残存していない。北東側の壁長は確認面で4.20m、床面で4.14m、南東側の壁長は確認面で4.26m、床面で4.20mである。壁際には深さ2.8～30.6cmの周溝が巡り、カマドの設置箇所を除いて全周するらしい。遺構は基本土層の第V～VI層を掘り込んで作られ、灰黄褐色粘土(第VI層)と黒褐色土を主体とした貼床がみられる。貼床は南東側(斜面下方)が厚くなり、確認面から床面までの壁高は0.3～34.6cmである。床面はほぼ平坦であるが、全体として少し東に傾斜している。掘り方の底面は凹凸が著しい。床面積は約15.504㎡である。

[柱穴等] 柱穴状の浅い小ピットを床面で2個、貼床下で9個、南東側の遺構外で2個検出した。壁際ないし壁寄りに並ぶ小ピットは、柱穴とみられる。

[付属施設] 南東壁の南隅寄りに、カマドが設置されている。カマドは半地下式とみられるが、煙道部はほとんど残存していない。残存する袖部は、主に灰黄褐色粘土(第VI層)で構築され、内側には火熱を受けた痕がある。燃焼部には最厚10cmほどの焼土が堆積し、上面は固化している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を混入する。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。



第205号住居跡

土層注記 (住居跡)

- 1層 灰褐色土 10YR2/3 シルト質 明黄褐色軽石を小ブロック状に少量含む。
- 2層 褐色土 10YR4/6 やや粘上質 明黄褐色軽石、灰褐色粘土を少量を含む。
- 3層 灰褐色土 10YR2/3 シルト質 明黄褐色軽石を含む。
- 4層 灰褐色土 10YR2/3 粘上質 灰褐色粘土の小ブロックを少量を含む。(軽石)

第205号住居跡

土層注記 (カマド)

- 5層 暗赤褐色土 5YR3/2 シルト質 粘土を小ブロック状じりりできむ。焼上層。土面が火熱により円化。(軽石)
- 6層 赤褐色土 2.5YR4/6 シルト質 同上層。
- 7層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石を含む。
- 8層 暗赤褐色土 5YR3/4 シルト質 地上の小ブロックを層状に含む。(軽石の層等)
- 9層 暗赤褐色土 5YR3/2 シルト質 明黄褐色軽石。粘上を含む。
- 10層 赤褐色土 10YR5/3 粘上質 灰褐色粘土主体。明黄褐色軽石を含む。内側に火熱の痕跡。(軽石)

第206号溝跡

土層注記

- 1層 灰褐色土 10YR2/2 シルト質 明黄褐色軽石を少量含む。



0 遺物 5cm

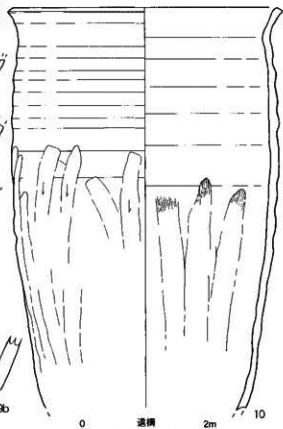


図10 第205号住居跡・第206号溝跡出土遺物

[出土遺物] カマド内(1)、堆積上(2~8)及び貼床下(9)から、平安時代の土師器(坏・甕等)が59片(710g)出土した。

表8 第205号住居跡出土土器観察表(土師器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
10-1	土師器	甕	-	-	-	RC	G	C	-	カマド	-	-
10-2	土師器	甕	(14.2)	(4.8)	-	WRCS針	H	B	20	覆土	-	-
10-3	土師器	甕	-	(2.8)	(7.0)	WCS針	A	C	30	覆土	砂底	-
10-4	土師器	坏	-	(1.9)	(8.0)	WS	D	B	20	覆土	静止糸切?	-
10-5	土師器	坏	(14.0)	(5.4)	-	WC針	C	A	20	覆土	-	-
10-6	土師器	坏	-	(3.5)	6.8	BRCS	H	C	60	覆土	右回転	-
10-7	土師器	坏	(13.0)	(3.1)	-	WRCS針	D	B	20	覆土	-	-
10-8	土師器	坏	-	(2.1)	(6.0)	WC針	H	B	30	覆土	跡糸切	-
10-9a	土師器	甕	-	-	-	S	H	B	-	床下	外面タタキメ、内面木口状工具によるナデ	-
10-9b	土師器	甕	-	-	-	S	H	B	-	床下	外面タタキメ、手底、97-112と同一個体	-

第206号溝跡(図10、表9)

[位置・確認] CW-45グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 第205号住居跡の南側に位置する長さ約3mの部分をを精査したが、遺構の西側は後世の攪乱により残存しないので、全体形は分からない。溝の中は確認面で0.32~0.48m、底面で0.22~0.34mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは7.9~19.9cmで、底面には凹凸があり、全体としてかなり東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)が混入している。全体的には自然堆積した状態とみられるが、東端に近い部分の堆積土上部には、まとまった土師器とともに焼土が廃棄されていた。

[出土遺物] 堆積土(10)から、平安時代の土師器(甕等)が58片(700g)出土した。(工藤 大)

表9 第206号溝跡出土土器観察表(土師器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
10-10	土師器	甕	(21.0)	(31.8)	-	WC針	H	A	60	覆土	-	-

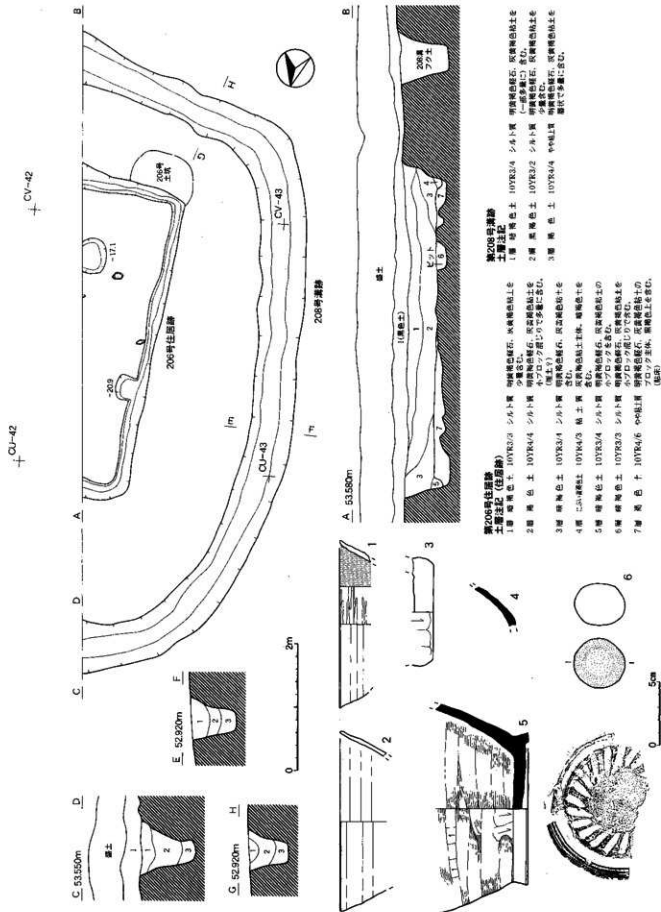
第206号住居跡(図11、表10・11)

[位置・確認] CT・CU・CV-42グリッドに位置する。第V層上面で暗褐色土の落ち込み(方形)として確認したが、掘り込み面は第IV層より上位にある。

[重複関係] 第206号土坑の北側を切っている。

[形態・規模] 遺構の東側過半部は調査区域から外れているので、西側の一部を精査しただけであるが、平面形は確認面、床面とも方形となっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した西側の壁長は確認面で4.62m、床面で4.50mである。壁際には、深さ9.2~20.4cmの周溝が巡っている。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)のブロックを主体とした貼床がみられる。貼床は壁寄りでは厚くなり、床面中央部では薄く、ほとんど認められない箇所もある。確認面から床面までの壁高は35.0~50.2cmである。床面はほぼ平坦になっているが、掘り方の底面には大きな凹凸がある。

[柱穴等] 浅い掘り込みの小ピットを西側の床面で2個検出したが、柱穴とその配置についてははっ



第208号溝跡

土層表記

- 1層 埴陶色土 10YR3.4 少土質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 2層 埴陶色土 10YR3.2 少土質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 3層 黒土 10YR4.4 中~粗土質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を量りて少量に含む。

第206号住居跡

土層表記 (住居跡)

- 1層 埴陶色土 10YR3.2 シルト質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 2層 埴陶色土 10YR4.4 シルト質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 3層 埴陶色土 10YR3.4 シルト質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 4層 2m~3m厚粘土 10YR4.3 粘土質 埴陶色粘土。
- 5層 埴陶色土 10YR3.4 シルト質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 6層 埴陶色土 10YR3.2 シルト質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。
- 7層 黒色土 10YR4.6 中~粗土質 明褐色砂粘土、灰褐色砂粘土を少量含む。

図11 第206号住居跡・出土遺物、第208号溝跡

きりしない。

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 全体的には暗褐色土を主体とする自然堆積とみられるが、壁寄りから床面中央部に厚く堆積する明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を主体とする層（2層）は、人為的な起因による堆積土と考えられる。

[出土遺物] 小ピット内（1）及び堆積土（2～5）から、平安時代の土師器（坏・甕等）、須恵器が39片（580g）出土した。5の須恵器は、第208号溝跡出土の同一個体と接合した。このほか、堆積土から球状の小罐（6）が1点出土した。

表10 第206号住居跡出土土器観察表（土師器、須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
11-1	土師器	坏	(13.2)	(2.5)	—	WRC針	D	B	10	ピット	—	—
11-2	土師器	坏	(14.0)	(3.7)	—	WC針	H	B	10	堆積土	—	—
11-3	土師器	甕	—	(1.7)	(7.4)	WRCS針	H	B	60	堆積土	砂底	—
11-4	須恵器	坏	—	—	—	WC	H	B	—	堆積土	火耀	—
11-5	須恵器	甕	—	(7.3)	(12.0)	WC針	K	B	60	堆積土	貼付高台、菊花底	—

表11 第206号住居跡出土石器観察表

図版番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	備考
11-6	球状石器	堆積土	4.1×3.9×4.1	49.2	流紋岩	—

第208号溝跡（図11～12、表12・13）

[位置・確認] CT・CU・CV-42・43グリッドに位置する。第V層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認したが、掘り込み面は第IV層より上位にある。

[形態・規模] 西側の長さ約13mの部分を精査したが、遺構の東側は調査区域外に延びている。全体形は分からないが、第206号住居跡の周囲を巡って、隅丸方形ないし楕円形の形態になるらしい。溝の中は確認面で0.50～0.80m、底面で0.22～0.38mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは57.0～81.0cmで、底面には凹凸がある。全体としては南西角の辺りが最も浅く、底面はその両側に傾斜している。

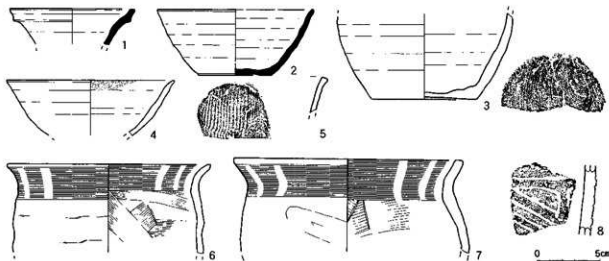


図12 第208号溝跡出土遺物

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を下層に多く含む。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土(1~8)から、平安時代の土師器(坏・甕等)、須恵器(壺・坏等)、縄文時代後期の土器(深鉢)が39片(875g)出土した。(工藤 大)

表12 第208号溝跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土分析
12-1	須恵器	長頸壺	(9.8)	(2.8)	—	W針	B B	10	覆土			—
12-2	須恵器	坏	(12.4)	5.2	(5.8)	W針	F B	50	覆土		静止未切、外面一帯の火焼	—
12-3	土師器	甕	—	(6.8)	(8.2)	WBC	D B	50	覆土		右回転、固未切	—
12-4	土師器	坏	(13.4)	(4.4)	—	WS針	H B	20	覆土		内面口縁スス付着	—
12-5	土師器	甕	—	—	—	CS	G B	—	覆土			—
12-6	土師器	甕	(16.0)	(7.0)	—	WRC針	G A	20	覆土			—
12-7	土師器	甕	(18.0)	(7.3)	—	WS針	H B	10	覆土			—

表13 第208号溝跡出土土器観察表(縄文)

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	出土分析
12-8	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	沈線文		—

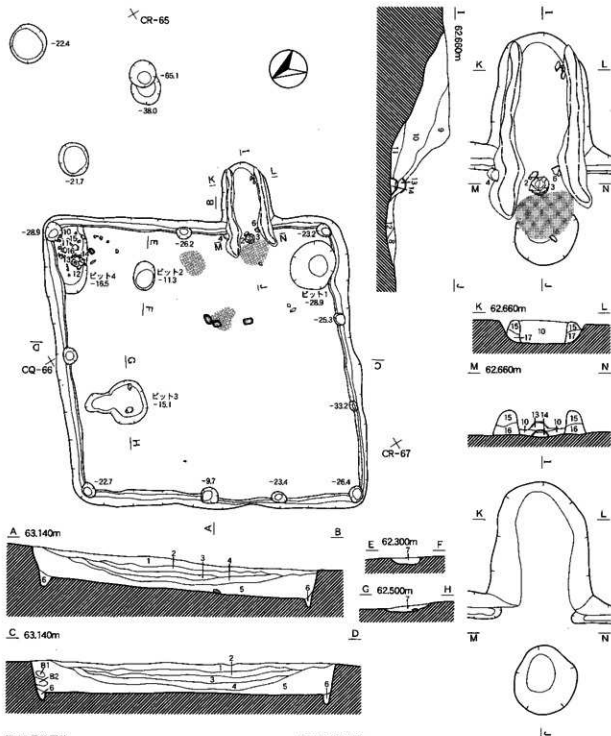
第207号住居跡(図13・14、表14・15)

[位置・確認] CP-66、CQ-65~67、CR-65・66グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形であるが、南北の隅が少し開いて、やや菱形気味の形態になっている。壁長は北東側が確認面で4.38m、床面で4.26m、北西側が確認面で4.38m、床面で4.32m、南東側が確認面で4.44m、床面で4.32m、南西側が確認面で4.38m、床面で4.32mである。壁際には深さ2.9~16.3cmの周溝が走り、カマドの設置個所を除いて全周する。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を直接床面としている。貼床等の痕跡は認められなかった。確認面から床面までの壁高は45.2~53.8cmで、全体に壁面の遺存状態は良好である。床面には緩い凹凸があり、全体としてかなり南東に傾斜している。床面積は約18.774㎡である。

[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを、東隅、南隅、北東壁寄り、南東壁寄りの床面ないし貼床下で各1個検出した。このうち3個(ピット2~4)の堆積土には、焼土や炭化物が含まれ、ピット1の底面は灰黄褐色粘土(第VI層)を貼り付けたようになっている。また柱穴状の小ピットを主に壁際の床面(周溝内)で10個、南東側の遺構外で4個検出した。壁際に並ぶ小ピットは壁柱穴とみられ、各壁に3~4個配置されている。

[付属施設] 南東壁の南隅寄りに、半地下式のカマドが設置されている。残存する煙道部と袖部は、主に灰黄褐色及び黄灰色粘土(第VI層)で構築され、内側には火熱を受けた痕がある。燃焼部には最厚15cmほどの焼土が堆積し、上面は固化している。燃焼部の煙出し側から伏せた状態で出土した2個の坏(2・3)は、重ね併せて支脚として使われたものである。また北東側の袖部にくい込んだ状態で出土した甕の底部(4)は、芯材として利用されたものとみられる。カマド周辺の床面では焼土2箇所のほか、焼けたレンガ状の礫も3個出土したが、この礫もカマドの芯材であったものと思われる。



第207号住居跡

土層注記 (住居跡)

- 1層 黒褐色土 10YR3/2 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
- 2層 黒褐色土 10YR2/2 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 3層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
- 4層 黒褐色土 10YR3/1 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 5層 褐色土 10YR4/4 中や粗土質 小ブロック状の明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土主体。(型土?)
- 6層 褐色土 10YR4/6 中や粗土質 ブロック状の明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土主体。

B1 明黄褐色軽石のブロック

B2 灰黄褐色粘土のブロック

第207号住居跡

土層注記 (ピット)

- 7層 暗赤褐色土 5YR3/4 シルト質 焼土、炭化物を含む、壁を築く。

第207号住居跡

土層注記 (カマド)

- 8層 褐色土 10YR4/4 シルト質 灰黄褐色粘土、焼土、炭化物を少量含む。
- 9層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土、焼土、炭化物を少量含む。
- 10層 暗褐色土 10YR2/2 シルト質 焼土、炭化物を含む。
- 11層 暗褐色土 10YR2/3 シルト質 焼土、炭化物を含む。
- 12層 暗褐色土 2.5YR4/6 シルト質 焼土、炭化物により層化。(煙垢層)
- 13層 暗赤褐色土 2.5YR3/3 シルト質 焼土を多量に含む。
- 14層 暗赤褐色土 2.5YR3/3 シルト質 焼土、炭化物を含む。
- 15層 暗赤褐色土 10YR5/3 粘土質 灰黄色粘土主体、灰黄褐色粘土を少量含む。内側に炭化物の層状。(カマド本体)
- 16層 暗赤褐色土 10YR4/3 粘土質 灰黄色粘土主体、内側に炭化物の層状。(カマド本体)
- 17層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。

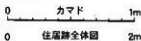


図13 第207号住居跡

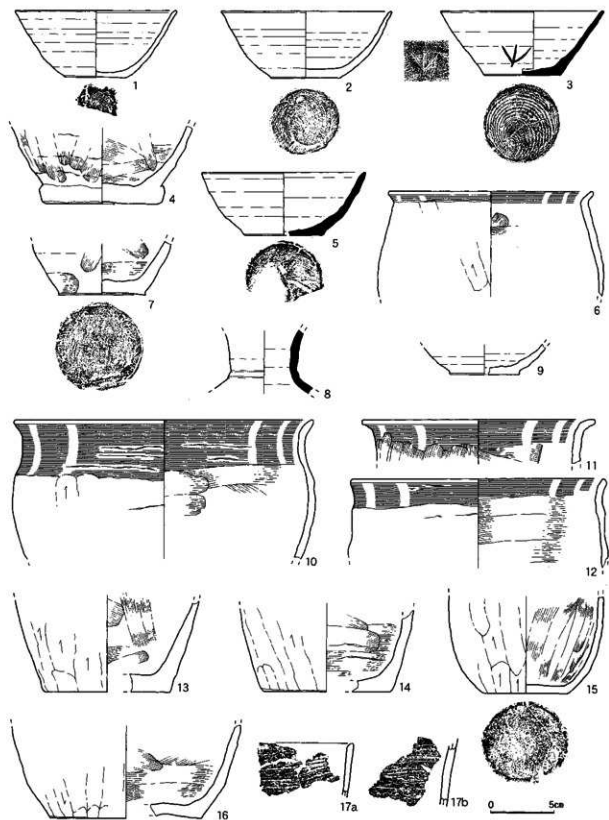


圖14 第207号住居跡出土遺物

[堆積土] 上部は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然堆積した状態とみられるが、壁寄りから下部には、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を主体とする層（5層）がかなり厚く堆積している。したがって人為的な起因で埋まり、すり鉢状の凹地となった後、自然埋没したようである。

[出土遺物] 床面（1）、カマド内（2～6）、ピット4内（10～16）及び堆積土（7～9・17）から、平安時代の土師器（坏・甕等）、須恵器（坏等）、縄文土器（深鉢）が247片（3,645g）出土した。（工藤 大）

表14 第207号住居跡出土土器観察表（土師器、須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	出土分析
14-1	土師器	坏	(12.8)	5.3	(4.8)	WC	G	B	40	床 蓋	図未切	-
14-2	土師器	坏	13.6	5.3	5.4	CS	H	B	90	カマド	右回転、支脚に転用	-
14-3	須恵器	坏	13.0	5.1	6.0	W	K	A	90	カマド	内面十字状火溝、右回転、割蓋、支脚	118
14-4	土師器	甕	-	(6.2)	9.0	WCS針	H	B	70	カマド	砂底	-
14-5	須恵器	坏	(13.0)	5.0	6.0	WR	G	C	50	カマド	外面十字状火溝、内面一葉の火溝	-
14-6	土師器	甕	(16.2)	(8.3)	-	WCS	H	B	20	カマド	-	-
14-7	土師器	甕	-	(4.2)	7.0	WC	H	B	60	覆 土	-	-
14-8	須恵器	長頸壺	-	-	-	W針	J	B	-	覆 土	-	-
14-9	土師器	坏	-	(2.4)	(5.4)	WR針	C	B	20	覆 土	右回転	-
14-10	土師器	甕	(23.8)	(11.0)	-	WRS	H	B	40	ピット4	-	-
14-11	土師器	甕	(18.4)	(3.5)	-	WC	H	A	20	ピット4	外面粘土付着	-
14-12	土師器	甕	(20.0)	(7.1)	-	WRS	H	B	20	ピット4	-	-
14-13	土師器	甕	-	(7.2)	(10.0)	WRS	H	B	50	ピット4	砂底、外面粘土付着	-
14-14	土師器	甕	-	(6.5)	(10.0)	WCS	H	B	30	ピット4	-	-
14-15	土師器	甕	-	(7.7)	6.1	WRCS	H	B	50	ピット4	-	-
14-16	土師器	甕	-	(7.3)	(12.0)	RC	G	B	40	ピット4	外面粘土付着	-

表15 第207号住居跡出土土器観察表（縄文）

図版番号	分類	層位	器 形	文 様	備 考	出土分析
14-17	IV-1?	覆 土	深鉢 口縁-胴部	条痕文	早期の可能性もある	-

第208号住居跡（図15～18、表16～19）

[概要] 竪穴住居跡部分（第208号住居跡）、外周溝部分（第210号溝部分）で構成される。掘立柱建物跡が付随した可能性があるが、ピット3基のみの検出であり明確でない。ただ、ピット3とピット4が住居跡の南壁に対して平行し規格性がみられる点、セクション図にみられるように柱根が明らかかな点、加えてピットを囲むように外周溝が伸びている点、これらを考え併せると掘立柱建物跡の存在を考えたよいものと思われる、一括して記載することとした。その他、第216号土坑が付随すると思われる。

[位置・確認] CR-62、CS-62・63、CT-62・63グリッドに位置する。第V層上面で黒褐色の落ち込み（不整形円形）として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともに方形となっている。壁長は、東側が確認面で5.28m、床面で5.10m、西側が確認面で5.16m、床面で4.86m、南側が確認面で4.32m、床面で4.20m、北側が確認面で4.38m、床面で4.20m。壁溝の深さは3.8～11.9cmであるが、東側と南側は掘り込みが細くて深く腰板を据えたように思われるが、北側及び西側は掘り込みが10cm未満と浅く、はつきりとしなない。その他、南壁寄りに深さ2.9～7.1cmの浅い溝が存在する。遺構は黄灰色粘土（第VII層）を深く掘り込んでおり、灰黄褐色粘土と黄灰色粘土を用いて床を貼るが、貼床は非常に薄く、部分的



第208号住居跡

土層表記 (住居跡)

- 1層 黒褐色土 10YR2.2 シルト質
- 2層 黒褐色土 10YR2.1 シルト質
- 3層 黒褐色土 10YR4.6 シルト質
- 4層 黒褐色土 10YR4.3 シルト質
- 5層 C20(黄緑土) 10YR3.3 シルト質
- 6層 黒色土 10YR2.0 シルト質
- 7層 C20(黄緑土) 10YR3.4 粘土質
- 8層 黒褐色土 10YR3.2 シルト質

厚1~4cmの黒褐色粘土及び黄褐色粘土を多数に含む。
(壁の地層土)

しまりあり。黒褐色粘土を多数に含む。(壁跡)

黒褐色粘土を多数に含む。(壁跡の地層土)

第209号住居跡

土層表記 (竪立柱遺跡跡柱穴)

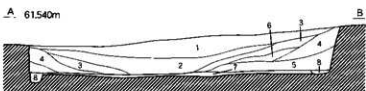
- 1層 C20(黄緑土) 10YR3.3 シルト質
- 2層 黒褐色土 10YR3.2 シルト質

黒褐色粘土。黄褐色粘土。黄褐色粘土を多数含む。
明褐色粘土を多数含む。

X CU-64

Y E77D3

N E77M4



216号土坑

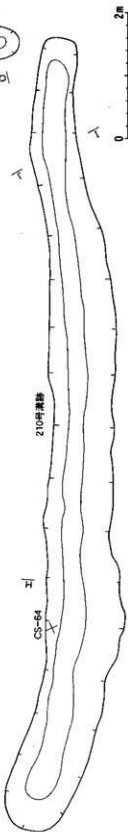
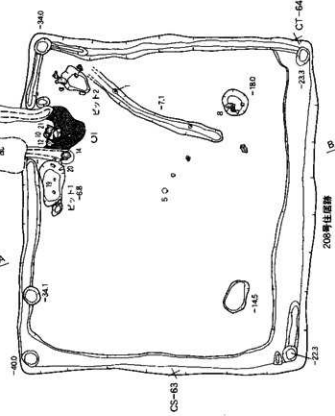
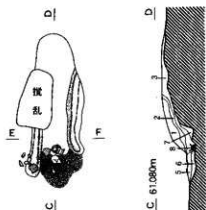
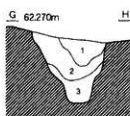
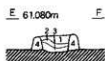


図15 第208号住居跡、第210号溝跡、第216号土坑



第208号住居跡
土層注記(カマド)

- 1層 黄褐色土 10Y R4/4 シルト質 径1~2cmの灰褐色結土を少量含む。
- 2層 黄褐色土 7.5Y R2/2 シルト質 径2~4cmの焼土を含む。
- 3層 黄褐色土 10Y R3/2 シルト質
- 4層 石灰凝結土 10Y R5/4 シルト質 しまりあり、径1~3cmの灰褐色結土を少量含む。(地層)
- 5層 黄褐色土 10Y R3/2 シルト質 径2~4cmの灰褐色結土を多量に含む。
- 6層 赤褐色土 2.5Y R4/6 シルト質 団化。(焼物部)
- 7層 石灰凝結土 10Y R7/2 シルト質 明黄褐色軽石と黄褐色結土を多量に含む。
- 8層 黄褐色土 10Y R3/2 シルト質 (支脚内部の充填土)



第210号遺

土層注記(外周溝北面)

- 1層 黄褐色土 10Y R2/3 シルト質 明黄褐色結土を少量含む。
- 2層 石灰凝結土 10Y R4/3 シルト質 焼褐色土を少量含む。
- 3層 石灰凝結土 10Y R4/3 灰褐色結土を少量含む。

第210号遺

土層注記(外周溝南側)

- 1層 黄褐色土 10Y R3/3 シルト質 白塚山火山灰部。
- 2層 黄褐色土 10Y R2/3 シルト質
- 3層 石灰凝結土 10Y R4/3 シルト質
- 4層 黄褐色土 10Y R3/2 シルト質
- 5層 黄褐色土 10Y R3/3 シルト質 径3~4cmの明黄褐色軽石、灰褐色結土、黄褐色結土を少量含む。
- 6層 黄褐色土 10Y R2/3 シルト質

0 カマド 1m

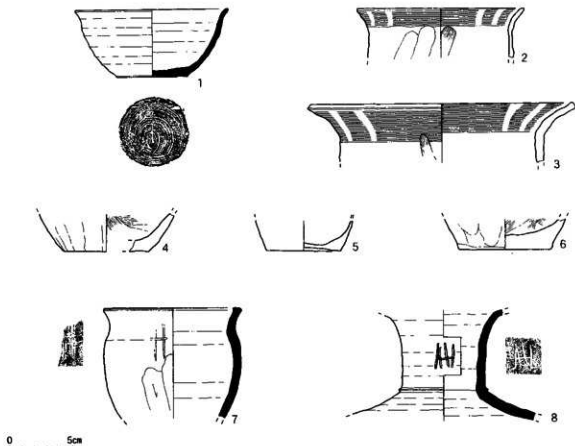


図16 第208号住居跡カマド・出土遺物(1)

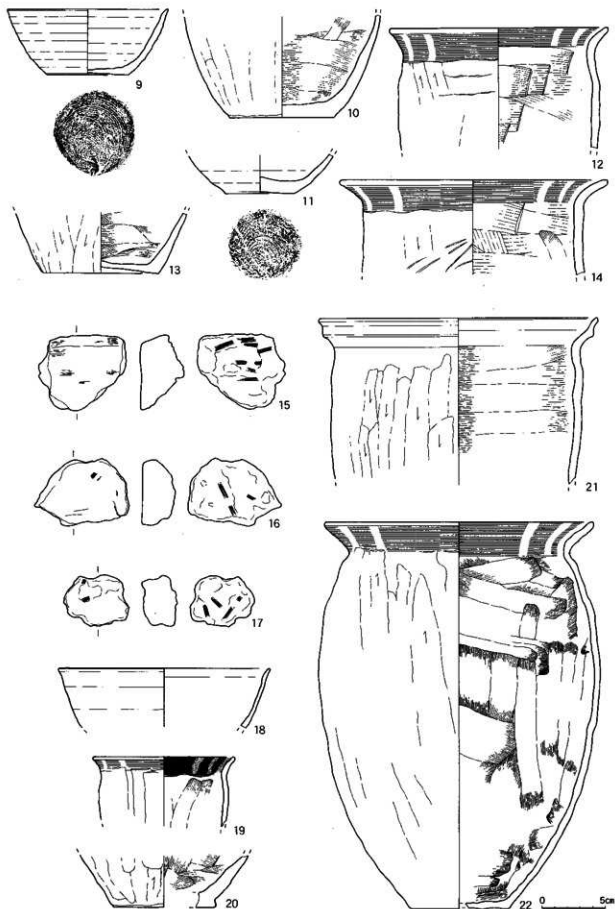


图17 第208号住居跡出土遺物(2)

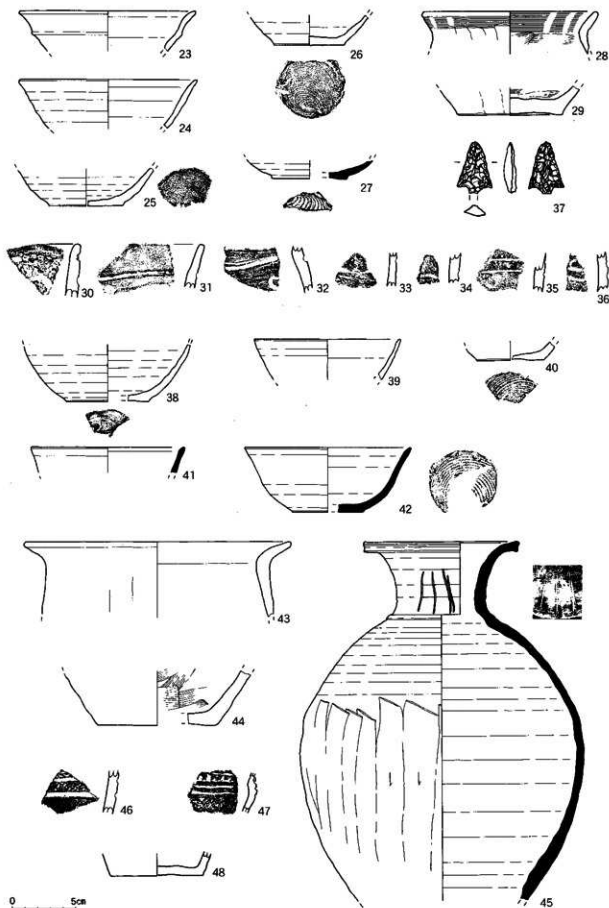
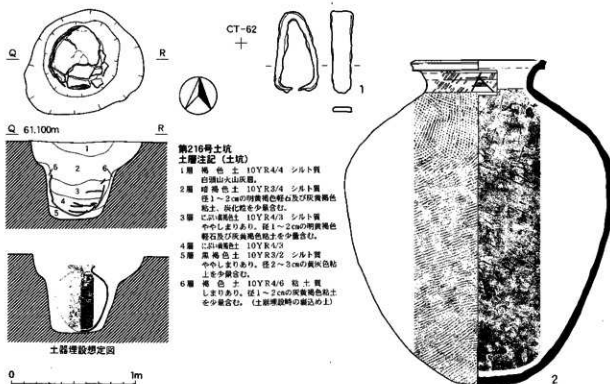


図18 第208号住居跡(3)・第210号溝跡出土遺物



第216号土坑

土層注記(土坑)

- 1層 褐色土 10YR4/4 シルト質
白頭山火山灰層。
- 2層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質
径1~2cmの明黄褐色軽石及び灰黄褐色
粘土、炭化粒を少量含む。
- 3層 白灰質粘土 10YR4/3 シルト質
ややしまりあり。径1~2cmの明黄褐色
軽石及び灰黄褐色粘土を少量含む。
- 4層 白灰質粘土 10YR4/3
同上。
- 5層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質
ややしまりあり。径2~3cmの黄灰色粘
土を少量含む。
- 6層 褐色土 10YR4/6 粘 土質
しまりあり。径1~2cmの灰黄褐色粘土
を少量含む。(土層説明時の編込の上)

図19 第216号土坑・出土遺物

1245N, 21210E

には黄灰色粘土層(第VII層)をそのまま床面とする。確認面から床面までの壁高は38.5~79.8cmと深く、床面及び掘り方はほぼ平坦である。

[柱穴等] ビットが11、溝1が確認された。主柱穴は、各コーナー及びカマド側の壁際とこれに対応する住居跡西側のものが該当する。カマドの左右に配された不整形のビット1・2は土器細片、焼土、焼土塊、炭化粒を多く含むことから、カマドを掃除した際の物原的なものかと思われる。特に左横のビット1からは実測図22の下半部の細片が多く出土したが、上半部は全くなかった。ちなみに、上半部は第215住居跡の第2号カマドを中心に検出している。

溝については、最も深いところで床面よりも7.1cmと浅く明確なではないものの、覆上にビット1・2のように焼土や炭化粒を多く含むことから、これらとの関連性についても考えられなくもない。[付属施設] 粘土主体による構築と思われる、比較的大きな半地下式のカマドが検出されたが、一部に攪乱を受けている。支脚は上下二段に分かれ、下段は土師器環(9)を伏せた上に、土師器甕の下半部(10)を被せて伏せ置き、この上に底部同土を接する形で、土師器環(11)を乗せる。支脚周辺は燃焼部と比較してくぼみ、ビット状を呈す。

[堆積土] 自然堆積の黒褐色土を主体としつつ、壁の崩落土と考えられる灰黄褐色粘土(第VI層)と黄灰色粘土(第VII層)を含む。鍵層となる降下火山灰は認められなかったが、付随する第210号溝や第216土坑において白頭山火山灰が検出されていることから、本遺構についてもその存在を考えると不可能ではない。

[出土遺物] 1~8は床面及び住居跡内部の溝、9~16・21はカマド、17~20・22がビット1、23~37が覆土中からの出土である。このうち、カマドの一部と考えられる15・16・17は、カマドとビット1から多く出土したが、残存が良好で特徴的な3点のみを図示した。これらは片面にナデ

が、もう片面には草の圧痕が観察され、特に15は角を成し、スス状物質の付着が認められることから、掛け口や焚き口などの一部であると思われる。遺物の出土量は430片(5,980g)を数え、全体的にカマド及び溝周辺からの出土が多い。

[時期] 平安時代の白頭山火山灰降下以前と思われる。

表16 第208号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土層
16-1	須恵器	杯	(12.2)	5.3	5.6	W針	K	B	40	床 面	右回転、外面火押多数	109
16-2	土師器	壺	(13.2)	(3.9)	--	WRS	E	B	20	床 面	--	--
16-3	土師器	壺	(20.8)	(4.7)	--	WR	G	B	10	床 面	--	--
16-4	土師器	壺	--	(3.0)	(6.6)	WRCS針	E	B	30	床 面	砂底	--
16-5	土師器	壺	--	(2.4)	5.8	WS	H	B	60	床 面	--	--
16-6	土師器	壺	--	(2.4)	7.2	WS	C	B	50	床 面	砂底	--
16-7	須恵器	壺	(10.8)	(8.7)	--	W針	J	A	40	床 面	割蓋	--
16-8	須恵器	長頸壺	--	--	--	W針	I	B	--	床 面	--	119
17-9	土師器	杯	12.8	5.2	6.4	WRS	H	B	90	カマド	右回転、支脚に転用	--
17-10	土師器	壺	--	(8.0)	8.2	S	E	B	80	カマド	砂底、マメツ、支脚に転用	--
17-11	土師器	杯	--	(3.1)	5.4	W針	C	B	60	カマド	右回転、二次加熱、支脚に転用	--
17-12	土師器	壺	(17.4)	(9.6)	--	WS	E	B	20	カマド	外面粘土付着	--
17-13	土師器	壺	--	(4.8)	9.2	WRS針	E	B	70	カマド	砂底	--
17-14	土師器	壺	(21.2)	(7.5)	--	WRCS針	E	B	30	カマド	外面スス付着	--
17-18	土師器	壺	(16.8)	(4.7)	--	W針	C	B	40	ビット1	マメツ、二次加熱	--
17-19	土師器	壺	(11.2)	(5.5)	--	WS	H	B	20	ビット1	内面口縁スス付着	--
17-20	土師器	壺	--	(4.1)	(8.0)	WRS	E	B	20	ビット1	砂底	--
17-21	土師器	壺	(22.0)	(13.2)	--	WRS	E	B	20	カマド	--	--
17-22	土師器	壺	(21.2)	30.6	(7.4)	WRS針	E	B	60	ビット1	--	--
18-23	土師器	杯	(14.0)	(3.2)	--	RC	H	B	20	覆 土	--	--
18-24	土師器	杯	(14.0)	(3.9)	--	WR	E	B	20	覆 土	--	--
18-25	土師器	杯	--	(3.0)	(5.8)	WC	H	B	20	覆 土	右回転	--
18-26	土師器	杯	--	(2.4)	5.4	WC	H	B	60	覆 土	右回転	--
18-27	須恵器	杯	--	(1.5)	(5.8)	WR	C	A	20	覆 土	右回転	--
18-28	土師器	壺	(13.6)	(3.4)	--	CS	H	B	20	覆 土	--	--
18-29	土師器	壺	--	(2.2)	8.2	W	H	B	70	覆 土	--	--

表17 第208号住居跡出土土器観察表(縄文)

図録番号	分類	層位	器 形	文 様	備考	出土層
18-30	IV-1 十層内1式	覆 土	深鉢 口縁部	磨消縄文(LR)・竹管状工具による刺突	--	--
18-31	IV-1 十層内1式	覆 土	深鉢 口縁部	沈線文	外面黒色物質付着	--
18-32	IV-1 十層内1式	覆 土	深鉢 胴部	櫛状工具による条線文	大津藩7群土器の可能性あり	--
18-33	IV-1? 十層内1式?	覆 土	深鉢 胴部	沈線文	--	--
18-34	IV-1? 十層内1式?	覆 土	深鉢 胴部	沈線文	--	--
18-35	IV-1 十層内1式	覆 土	深鉢 胴部	沈線文	--	--
18-36	IV-1 十層内1式	覆 土	深鉢 胴部	沈線文	--	--

表18 第208号住居跡出土土製品観察表

図録番号	分類	層位	文 様	備考
17-15	焼成粘土塊	カマド	無文	ヨコナデ・スス付着・草の圧痕
17-16	焼成粘土塊	カマド	無文	ヨコナデ・草の圧痕
17-17	焼成粘土塊	ビット1	無文	ヨコナデ・草の圧痕

表19 第208号住居跡出土石器観察表

図録番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石 質	備考
18-37	石 錐	覆 土	(1.9)×1.3×0.5	0.9	玉髓質珪質頁岩	凸基・欠損品

表20 第210号溝跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	土分析
18-38	土師器	坏	—	(4.5)	(6.4)	BRC	E B	20	覆土	—	返永切	—
18-39	土師器	坏	(11.6)	(3.2)	—	WR	G B	20	覆土	—	—	—
18-40	土師器	坏	—	(1.4)	(5.2)	WR	E B	20	覆土	—	右回転	—
18-41	須恵器	坏	(12.2)	(2.0)	—	W針	H C	10	覆土	—	内裏火傷	—
18-42	須恵器	坏	(13.2)	5.1	(5.6)	W針	I B	30	覆土	—	右回転、内外面十字状火傷	—
18-43	土師器	壺	(21.0)	(6.0)	—	RCS	G C	20	覆土	—	—	—
18-44	土師器	壺	—	(4.3)	(9.4)	RS	H B	20	覆土	—	外面スス付量	—
18-45	須恵器	長頸壺	(12.2)	(28.4)	—	W	J A	60	覆土	—	割書	115

表21 第210号溝跡出土土器観察表(縄文)

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	土分析
18-46	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢? 胴部	唐津縄文(R)	—	—
18-47	大淵C1式	覆土	鉢類 胴部	連続刻目・平行波線・縄文(R?)	—	—
18-48	IV-1? 十層内1式?	覆土	鉢類? 底部	無文	—	—

第210号溝(図15・16・18、表20・21)

[位置・確認] CR-63・64、CS-64、CT-64グリッドに位置する。第V層上面で黒褐色土と白頭山火山灰の落ち込みとして確認された。

[形態・規模] 第208号住居跡西側に延伸する長さ約12.6mを精査した。溝の幅は確認面で0.80m～1.28m、底面で0.28m～0.48mである。遺構は黄灰色粘土(第VII層)まで掘り込み、同層を底面としている。確認面からの深さは0.31～1.36cmであり、全体的に南に傾斜する。

[堆積土] 南側の一部に僅かながら白頭山火山灰を含む他は、黒褐色土やにぶい黄褐色土を主体とする。灰黄褐色粘土(第VI層)及び黄灰色粘土(第VII層)を若干含むが崩落土と思われる。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 白頭山火山灰の下層覆土中より218片(3,320g)が出土した。平安時代の土器のほか、縄文時代では後期と晩期の細片が検出された。

第216号土坑(図15・19、表22・23)

[位置・確認] CT-61・62グリッドに位置する。第V層上面で白頭山火山灰の落ち込み(円形)として確認した。

[形態・規模] 確認面、底面ともにほぼ円形を呈す。上層構造を示す柱穴は確認されなかった。規模は、確認面で0.85～0.98m、底面で0.60～0.67、確認面からの深さは52.3～65.7cm。

[堆積土] 確認面である1層には、白頭山火山灰が密に堆積する。6層は土器の裏込め土と思われる。灰黄褐色粘土(第VI層)を用いている。本遺構は灰黄褐色粘土(第VI層)を掘り抜き、黄灰色粘土層(第VII層)上面を底面としていることから、掘上げの際に粘性があり土器を固定させるために有効な灰黄褐色粘土を、裏込め土としてそのまま利用したものと思われる。

[出土遺物] 須恵器の甕が1個体、土圧で潰れたと思われる状態で出土した。接合の結果、口縁部を一部欠損する以外はほぼ復元し得たが、欠損部分は調査区内において見出すことができなかった。或いは意識的に口縁部を打ち欠いたのかもしれない。その他、綿金具?1点を2層中より検出した。

[時期] 平安時代の白頭山火山灰降下直前と思われる。

(佐藤 智生)

表22 第216号土坑出土土器観察表(須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	土分析
19-2	須恵器	壺	204	52.7	—	WS針	J	B	90	覆土	刻書	113

表23 第216号土坑出土鉄製品観察表

図版番号	種別	層位	備 考
19-1	神金具?	2 層	

第209号住居跡(図20、表24~26)

[位置・確認] CR-58・59、CS-57~59、CT-58グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土と褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形である。壁長は北東側が確認面で4.86m、床面で4.74m、北西側が確認面で4.62m、床面で4.56m、南東側が確認面で4.56m、床面で4.50m、南西側が確認面で4.50m、床面で4.32mである。遺構は基本土層の第V~VI層を掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を多量に含む層(5~7層)が貼床とみられる。貼床は南東側(斜面下方)が厚くなり、確認面から床面までの壁高は4.9~40.9cmである。貼床面、掘り方の底面ともに凹凸が著しく、全体としてかなり南東に傾斜している。床面積は約21.708㎡である。[柱穴等] 検出されなかった。

[付属施設] カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 上部は黒褐色土、壁寄りから下部は明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を主体とする層(2層)が堆積している。したがって人為的な起因で埋まった後、自然埋没した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 床面(1・7)、堆積土(2~4)及び貼床下(5・6・8・9・10)から、平安時代の土師器(坏・甕等)、須恵器(坏等)、縄文後期土器が121片(1,270g)出土した。このほか、床面から砥石(7)が1点出土した。(工藤 大)

表24 第209号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	土分析
20-1	土師器	坏	(13.2)	5.1	(7.0)	WR	G	B	40	床 面		-
20-2	土師器	甕	-	-	-	C	E	B	-	覆土		-
20-3	土師器	坏	(13.2)	(2.8)	-	WS	H	B	10	覆土		-
20-4	土師器	甕	(16.0)	(6.6)	-	BC	E	B	30	覆土		-
20-5	須恵器	坏	(12.6)	5.7	(4.2)	W針	F	B	60	床 下	右回転、内外面二面の十字状火焼	-
20-6	土師器	甕	-	(3.0)	5.4	WC	G	B	80	床 下		-

表25 第209号住居跡出土土器観察表(縄文)

図版番号	分 類	層位	器 形	文 様	備 考	土分析
20-8	Ⅱ-1? 十層内1式?	床 下	ミニチュア? 口縁部	沈線文		-
20-9	Ⅱ-1? 十層内1式?	床 下	ミニチュア 胴部	沈線文		-
20-10	Ⅱ-1? 十層内1式?	床 下	ミニチュア 底面	沈線文		-

表26 第209号住居跡出土土器観察表

図版番号	分 類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石 質	備 考
20-7	砥 石	床 面	7.3×4.8×1.2	61.5	流紋岩	すり痕

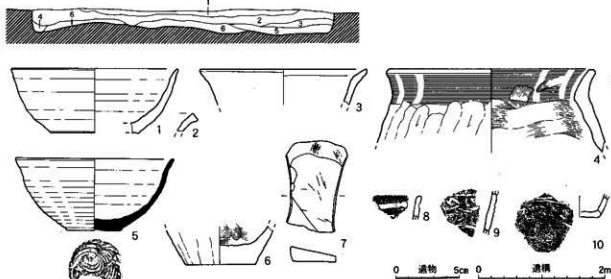
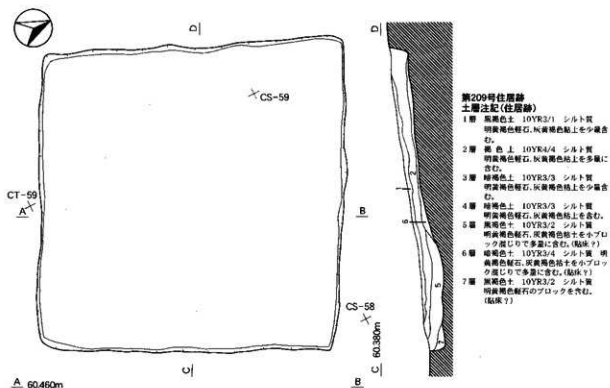


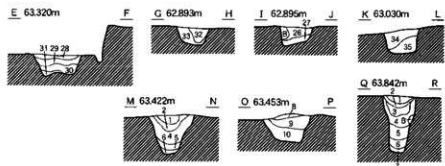
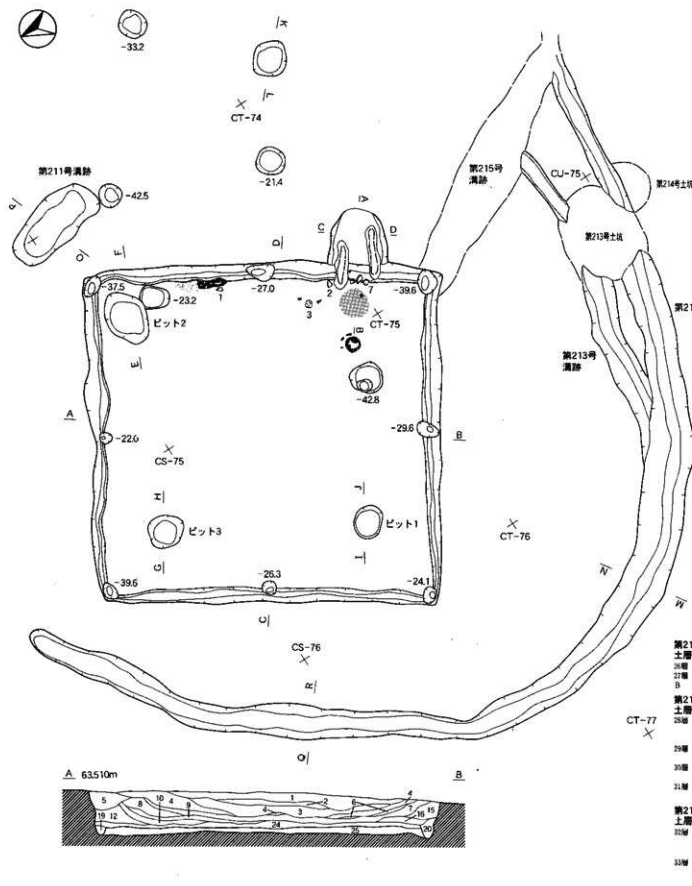
図20 第209号住居跡・出土遺物

第210号住居跡 (図21~23、表27・28)

[位置・確認] CR-74・75、CS-74~76、CT-74・75グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込み(不整形円形)として確認した。

[重複関係] 第215号溝跡の北西側を切っている。

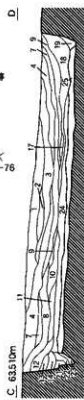
[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形である。壁長は北東側が確認面で5.10m、床面で4.98m、北西側が確認面で5.22m、床面で5.16m、南東側が確認面で5.64m、床面で5.46m、南西側



第210号住居跡

土層注記 (住居跡)

- 1層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 灰黄色粘土を少量含む。
- 2層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。
- 3層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 灰黄褐色土を少量含む。
- 4層 二色成層土 10YR4/3 粘 土質 灰黄褐色粘土主体、暗褐色土を含む。明確な層状構造を少量含む。
- 5層 二色成層土 10YR4/3 粘 土質 暗褐色粘土を主体とし、下部に暗褐色粘土をブロック状で多量に含む。(埋土層)
- 6層 黄褐色土 10YR3/4 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。
- 7層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。
- 8層 二色成層土 10YR4/3 粘 土質 灰黄褐色粘土主体、暗褐色土、明褐色粘石を含む。
- 9層 二色成層土 10YR4/3 新 土質 灰黄褐色粘土主体、白濁山山水泥をブロック状で含む。
- 10層 二色成層土 10YR4/3 粘 土質 明褐色粘石を含む。
- 11層 黄褐色土 10YR4/6 シルト質 明褐色粘石を含む。
- 12層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質 明褐色粘石を少量含む。
- 13層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 明褐色粘石を少量含む。
- 14層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質 明褐色粘石を少量含む。
- 15層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土、黄褐色土を多量に含む。
- 16層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 明褐色粘石、黄褐色土を含む。
- 17層 暗褐色土 5YR3/3 シルト質 粘土を多量に含む。灰化物を少量含む。
- 18層 黄褐色土 10YR3/3 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土、粘土、灰化物を含む。
- 19層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土を含む。
- 20層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 明褐色粘土を少量含む。
- 21層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色土を少量含む。
- 22層 黄褐色土 10YR2/4 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色土を多量に含む。
- 23層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色土を少量含む。
- 24層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土、黄褐色土を含む。下部に層状構造を含む。
- 25層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土、黄褐色土を多量に含む。(埋土)



第210号住居跡

土層注記 (ピット 1)

- 26層 黄褐色土 10YR3/1 シルト質 黄褐色粘土を少量含む。
- 27層 黄褐色土 10YR3/3 シルト質 黄褐色粘土を多量に含む。
- 28層 二色成層土のブロック 粘黄褐色土を含む。

第210号住居跡

土層注記 (ピット 2)

- 29層 二色成層土 10YR1/3 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土の小ブロックを含む。
- 30層 暗褐色土 10YR4/4 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 31層 黄褐色土 10YR4/4 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土を含む。
- 32層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土を少量含む。

第210号住居跡

土層注記 (ピット 3)

- 33層 黄褐色土 10YR3/3 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土の小ブロックを含む。
- 34層 黄褐色土 10YR4/6 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土の小ブロック主体。

第210号住居跡

土層注記

- 34層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。
- 35層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 灰黄褐色粘土を多量に含む。

第211号溝跡

土層注記

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 白濁山山水泥を含む。
- 2層 二色成層土 10YR6/4 や粘 土質 白濁山山水泥、暗褐色土を含む。
- 3層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 白濁山山水泥を少量含む。
- 4層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明褐色粘石を少量含む。
- 5層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 明褐色粘石を多量に含む。砂状を含む。
- 6層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 明褐色粘石、暗褐色土を少量含む。
- 7層 暗褐色土 10YR2/4 シルト質 灰黄褐色粘石、暗褐色土、下部に層状構造を含む。
- 8層 黄褐色土 10YR3/6 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土を少量含む。(埋土)
- 9層 黄褐色土 10YR4/6 や粘 土質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土主体、暗褐色土を少量含む。
- 10層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 明褐色粘石、灰黄褐色粘土の小ブロックを含む。

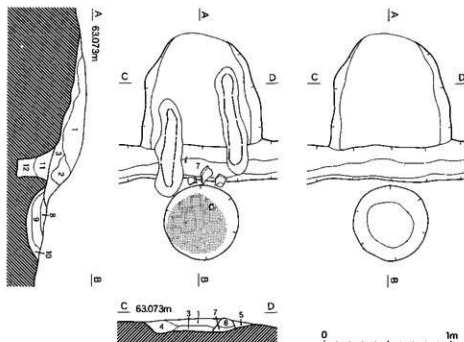
図21 第210号住居跡、第211・213号溝跡

が確認面で5.22m、床面で5.10mである。壁際には深さ1.1～17.0cmの周溝が掘られ、住居跡全体を巡っている。遺構は基本土層の第VI～VII層まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石（第V層）、灰黄褐色粘土（第VI層）、黄灰色粘土（第VII層）を多量に含む暗褐色土の貼床がみられる。確認面から床面までの壁高は28.7～75.8cmで、遺構の北東側を除いて壁面の遺存状態は良好である。床面、掘り方の底面ともに緩い凹凸があり、全体として少し南東に傾斜している。床面積は約26.83㎡である。

〔柱穴等〕 浅い掘り込みのピットを、東隅寄りの床面で1個検出した。また柱穴状の小ピットを、隅・壁寄り及び壁際の床面（周溝内）と貼床下で13個、南東側の遺構外で4個検出した。西隅、北隅、南隅寄りのピット（ピット1～3）は主柱穴、各壁際に3～4並ぶ小ピットは壁柱穴とみられる。

〔付属施設〕 南東壁の南隅寄りに、半地下式のカマドが設置されている。残存する煙道部と袖部は、主に灰黄褐色粘土（第VI層）で構築され、内側には火熱を受けた痕がある。燃燒部には最厚16cmほどの焼土が堆積し、上面は固化している。また燃燒部の北西側床面には、空洞状の炭化材が円形（直径約25cm）に残っていた。

〔堆積土〕 全体的には黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然堆積した状態とみられるが、主に遺構の北東～北西側（斜面上方）から流入した状態で、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を多量に含む層（4・8・10・11層）が相当量入っている。南東壁寄りから床面上に堆積する層（18・24層）には、炭化材の小片及び炭化物が多量に含まれ、本遺構は焼失した住居跡とみなされる。また堆積土中には、埋没過程で降下した白頭山火山灰を含む層（9層）もみられる。



第210号住居跡

土層法記(カマド)

- | | | | | |
|-----|-------|----------|------|---------------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 5YR3/2 | シルト質 | 粘土を小ブロック状に多量に含む、炭化物を少量含む。 |
| 2層 | 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 粘土質 | 暗褐色土、粘土を少量含む。(カマド天井部の焼覆土) |
| 3層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石を含む。 |
| 4層 | 暗褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、粘土、炭化物を含む。 |
| 5層 | 暗褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | |
| 6層 | 灰黄褐色土 | 10YR5/4 | 粘土質 | 灰黄褐色粘土主体、明黄褐色軽石を少量含む。(カマド本体) |
| 7層 | 灰黄褐色土 | 10YR4/3 | 粘土質 | 灰黄褐色粘土主体、暗褐色土、明黄褐色軽石を含む。(カマド本体) |
| 8層 | 灰黄褐色土 | 5YR4/3 | シルト質 | 焼土層、固化した焼土ブロックを含む。(カマド壁脚部) |
| 9層 | 赤褐色土 | 2.5YR4/5 | シルト質 | 焼土層、火熱により顕化。(カマド壁脚部) |
| 10層 | 暗褐色土 | 7.5YR2/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石、粘土を含む。 |
| 11層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石を含む。(壁溝の底土) |
| 12層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 明黄褐色軽石を多量に含む。(壁溝の壁土) |

図22 第210号住居跡カマド

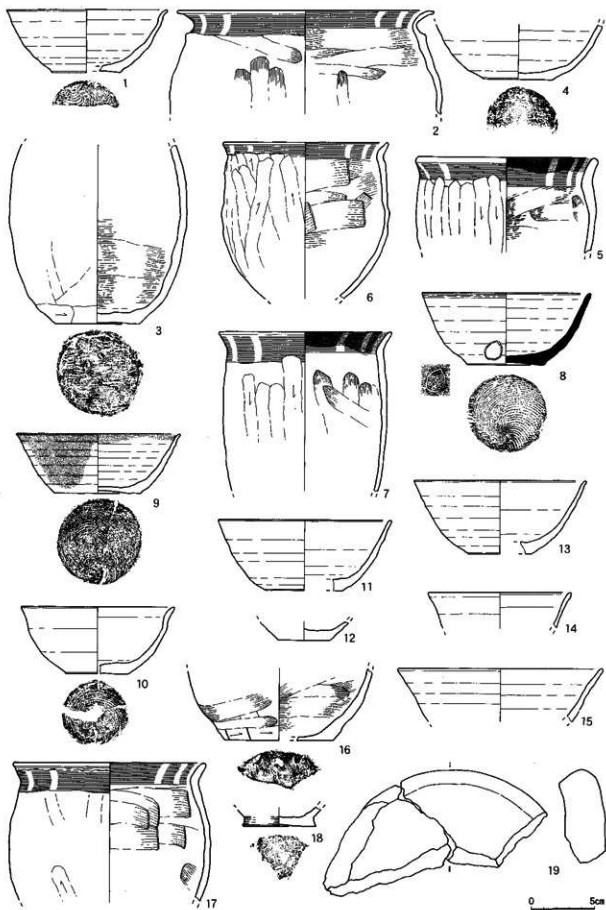


图23 第210号住居跡出土遺物

[出土遺物] 床面(1~3)、カマド内(6・7)、ピット2内(4・5)及び堆積土(8~18)から、平安時代の土師器(坏・甕等)、須恵器(坏等)が200片(2,610g)出土した。このほか、堆積土から石皿(19)が1点出土した。

表27 第210号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土箇所
23-1	土師器	坏	(12.8)	5.0	(5.4)	W針	H B	30	床 面	右廻転		-
23-2	土師器	甕	(20.4)	(8.2)	-	WRS	H B	30	床 面			-
23-3	土師器	甕	-	(14.2)	6.6	WRS	E B	60	床 面	底面に板状?圧痕		-
23-4	土師器	坏	-	(4.4)	(5.4)	RC	G C	50	ピット2			-
23-5	土師器	甕	(14.0)	(7.5)	-	WRS	H B	30	ピット2			-
23-6	土師器	甕	(13.0)	(12.4)	-	WRS	G B	30	カマド			-
23-7	土師器	甕	13.6	(12.6)	-	RCS	H B	80	カマド			-
23-8	須恵器	坏	13.4	5.7	6.2	WC針	D B	70	覆土	右廻転、内外面十字状火傷、刻書		110
23-9	土師器	坏	13.0	4.7	5.8	RCS	E B	90	覆土	右廻転		-
23-10	土師器	坏	12.2	5.3	4.8	WC	H B	80	覆土	右廻転、外蓋風模		-
23-11	土師器	坏	13.6	5.6	6.0	WC	H B	70	覆土	図糸切		-
23-12	土師器	坏	-	(1.5)	(4.0)	WCS	C B	20	覆土	ロク口成形		-
23-13	土師器	坏	13.6	5.6	6.0	WC	H B	70	覆土	図糸切、23-11と同一個体?		-
23-14	土師器	坏	(11.4)	(2.8)	-	C	H B	20	覆土			-
23-15	土師器	坏	(15.9)	(4.2)	-	WC	H B	20	覆土			-
23-16	土師器	甕	-	(5.7)	(8.6)	WCS	H B	20	覆土			-
23-17	土師器	甕	(15.2)	(10.9)	-	WR	G B	40	覆土			-
23-18	土師器	甕	-	(1.5)	(5.8)	WRS	H B	10	覆土	底面にモミ?や草の圧痕		-

表28 第210号住居跡出土石器観察表

図版番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	備考
23-19	石 皿	覆 土	10.0×17.7×3.6	597.4	安山岩	

第211号溝跡(図24、表29)

[位置・確認] CR-73~76、CS-76、CT-75・76、CU-75グリッドに位置する。第Ⅲ~Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第213号溝跡の西側を切り、遺構の東端部を第213号土坑によって切られている。

[形態・規模] 第210号住居跡の西側を巡る長さ約17mの部分を経査したが、第210号住居跡の東側にも、この遺構の延長部分とみられる溝がある。平面形は、第210号住居跡のカマド側を除く円形ないし半円形になっている。溝の中は確認面で0.26~0.56m、底面で0.18~0.32mである。遺構は基本土層の第Ⅵ層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは11.8~67.7cmである。底面には凹凸があり、全体としてかなり南に傾斜している。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、壁面の崩落による明黄褐色軽石(第Ⅴ層)を下部に多く含む。堆積

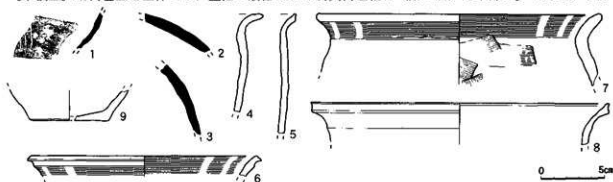


図24 第211号溝跡出土遺物

土は自然堆積した状態を示すとみられるが、最下部の土層(6・7層)には砂が含まれ、壁、底面の一部には酸化鉄が付着している。また堆積土上部には、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層(2層)もみられる。

[出土遺物] 堆積土(1~9)から、平安時代の土師器(坏・甕等)、須恵器が78片(1,100g)出土した。土師器(9)は、第219号住居跡ピット2出土の同一個体と接合した。

表29 第211号溝跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図記番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
24-1	須恵器	坏	-	-	-	W計	J	A	-	覆土	剥書	-
24-2	須恵器	壺	-	-	-	W計	F	A	-	覆土		-
24-3	須恵器	壺	-	-	-	W計	K	A	-	覆土		-
24-4	土師器	壺	-	(7.8)	-	WC	H	A	-	覆土		-
24-5	土師器	壺	-	(9.4)	-	WR計	G	B	-	覆土	マメツ	-
24-6	土師器	壺	(18.0)	(1.6)	-	WR	H	B	10	覆土	外蓋スス付着	-
24-7	土師器	壺	(22.6)	(5.6)	-	WR計	H	B	20	覆土		-
24-8	土師器	壺	(23.6)	(3.2)	-	WR計	E	B	40	覆土		-
24-9	土師器	壺	-	(2.4)	(6.0)	WR計	G	B	20	覆土	マメツ	-

第213号溝跡(図21)

[位置・確認] CT-74~76グリッドに位置する。第IV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。
[重複関係] 遺構の一部を、第213号土坑と第211号溝跡及び第215号溝跡によって切られている。
[形態・規模] 残存する長さ約4mの部分を精査したが、全体形は不明である。溝の中は確認面で0.22~0.50m、底面で0.12~0.24mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは5.0~37.8cmである。底面には凹凸があり、全体として少し東に傾斜している。

[堆積土] 土層断面図を作成しなかったが、暗褐色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第211号住居跡(図25~27、表30・31)

[位置・確認] CW-69~71、CX-69~72、CY-70・71グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[形態・規模] 遺構の南隅は調査区域から外れているが、平面形は確認面、床面とも方形である。壁長は北東側が確認面で6.48m、床面で6.36m、北西側が確認面で6.60m、床面で6.54mである。壁際には深さ4.5~30.9cmの周溝が掘られ、ほぼ住居跡全体を巡っている。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、灰黄褐色粘土(第VI層)、黄灰色粘土(第VII層)のブロックを含む黒褐色土の貼床がみられる。貼床は壁寄り厚くなり、床面中央部では薄く、ほとんど認められない箇所もある。確認面から床面までの壁高は0.2~33.3cmで、既に削平された部分もあるため、壁等の遺存状態は良くない。床面には緩い凹凸があり、全体として南に傾斜している。掘り方の底面は凹凸が著しい。床面積は約40.74㎡である。

[柱穴等] 柱穴状の小ピットを、隅・壁寄り及び壁際の床面(周溝内)ないし貼床下で20個、南東側の遺構外で3個検出した。隅ないし壁寄りのピット(ピット1~4)は主柱穴、各壁際に5~6並ぶ

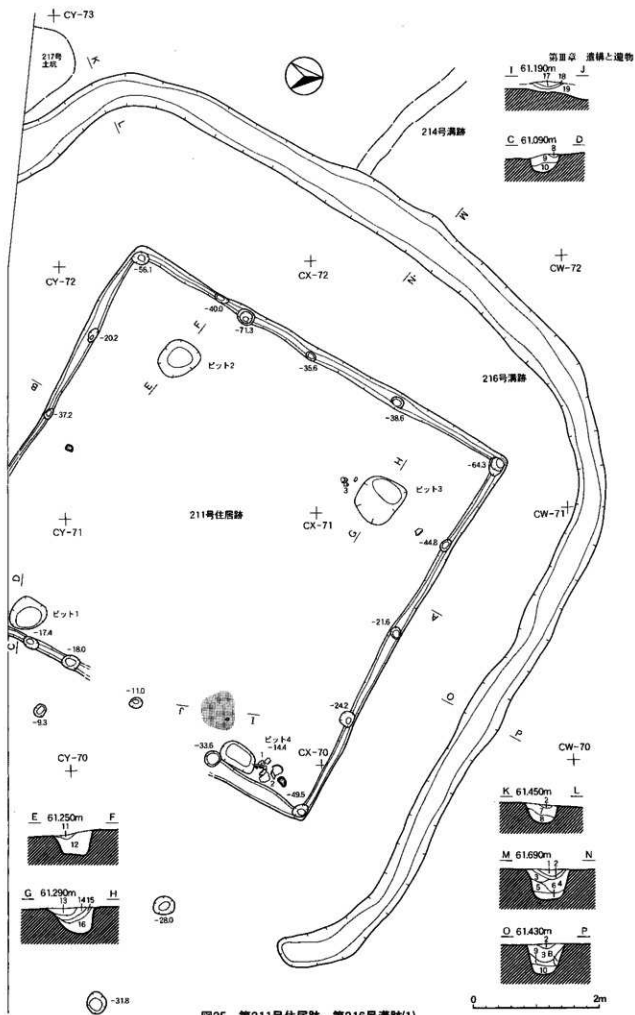


図25 第211号住居跡、第216号溝跡(1)



第211号住居跡

土層注記(住居跡)

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。白頭山火山灰を部分的に含む。
 2層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。白頭山火山灰を部分的に含む。
 3層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。
 4層 灰褐色土 10YR3/2 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。
 5層 灰褐色土 10YR3/2 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。
 6層 暗褐色土 10YR3/2 シルト質 灰黄褐色粘土を小ブロック状に含む。
 7層 灰褐色土 10YR2/2 シルト質 灰黄褐色粘土。黄灰色粘土をブロック状に含む。(埋戻)

第211号住居跡

土層注記(ピット1)

- 8層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。白頭山火山灰を少量含む。
 9層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。灰化物を少量含む。
 10層 灰褐色土 10YR2/2 やや粘土質 灰黄褐色粘土を少量含む。

第211号住居跡

土層注記(ピット2)

- 11層 灰褐色土 10YR2/2 やや粘土質 白頭山火山灰層。
 12層 灰褐色土 10YR2/2 シルト質 灰黄褐色粘土を小ブロック状で多量に含む。

第211号住居跡

土層注記(ピット3)

- 13層 灰褐色土 10YR2/2 シルト質 暗褐色土を含む。
 14層 暗褐色土 10YR3/4 やや粘土質 白頭山火山灰を多量に含む。
 15層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土。
 16層 暗褐色土 10YR2/2 シルト質 灰黄褐色粘土。黄灰色粘土を小ブロック状で多量に含む。

第211号住居跡

土層注記(カマド?)

- 17層 赤褐色土 2.5YR4/6 シルト質 焼土層。火熱により酸化。(カマド焼土層)
 18層 紅褐色土 2.5YR4/4 シルト質 焼土層。火熱により酸化。
 19層 灰褐色土 10YR3/1 シルト質 焼土層。暗褐色土を含む。

第216号溝跡

土層注記

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を含む。焼土を少量含む。
 2層 暗褐色土 10YR3/4 やや粘土質 白頭山火山灰を多量に含む。
 3層 灰褐色土 10YR3/2 シルト質 焼土。灰化物を含む。
 4層 灰褐色土 10YR3/1 シルト質 灰黄褐色粘土を少量含む。
 5層 灰褐色土 10YR3/1 シルト質 灰黄褐色粘土を小ブロック状に含む。
 6層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土。黄灰色粘土を小ブロック状で多量に含む。
 7層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 灰黄褐色粘土を小ブロック状で少量含む。
 8層 灰褐色土 10YR2/1 シルト質 灰黄褐色土を少量含む。
 9層 灰褐色土 10YR3/2 シルト質 酸化した灰黄褐色粘土を少量含む。
 10層 灰褐色土 10YR2/2 やや粘土質 酸化した灰黄褐色粘土。黄灰色粘土の小ブロックを多量に含む。

B 酸化した灰黄褐色粘土の小ブロックを多量に含む。

図26 第211号住居跡、第216号溝跡(2)

小ピットは壁柱穴とみられる。

〔付属施設〕はつきりしたカマドの跡は検出できなかった。しかし南東壁寄りの床面には、最厚15cmほどの焼土が不整形円形(径約60cm)に残っており、これがカマドの焼土層と思われる。

〔堆積土〕黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)と黄灰色粘土(第VII層)を含む。堆積土は自然堆積した状態とみられるが、壁寄りには埋没過程で降下した白頭山火山灰を含む層(2層)が堆積している。このほか白頭山火山灰は、主柱穴とみられる各ピット(ピット1~3)の堆積土上部にも含まれている。

〔出土遺物〕床面(1~3)、堆積土(4~7)及び貼床下(8・9)から、平安時代の上師器(坏・甕等)、須恵器(壺・坏等)が66片(1,710g)出土した。須恵器(3)は、第214号住居跡床面出土の同一個体と接合した。このほか、床面から台石(10)が1点、堆積土から石炭(11)が1点出土した。

表30 第211号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土分析
27-1	土師器	壺 (222)	(25.4)	-	-	WRCS	E	C	30	床 産	マメツ	-
27-2	須恵器	長頸壺	-	-	-	W計	J	B	-	床 産	別書	117
27-3	須恵器	長頸壺	-	(18.1)	8.0	W計	J	A	60	床 産	右図板、別書	116
27-4	土師器	壺 (146)	(5.7)	-	-	WRS針	E	B	40	覆 土	-	-
27-5	土師器	坏 (142)	(2.6)	-	-	CS	G	B	20	覆 土	-	-
27-6	須恵器	壺	-	-	-	W計	J	B	-	覆 土	-	-
27-7	須恵器	壺	-	-	-	W	J	B	-	覆 土	-	-
27-8	須恵器	坏 (118)	(2.7)	-	-	W計	F	A	10	床 下	-	-
27-9	土師器	壺	-	(2.3)	(10.0)	CS	H	B	10	床 下	砂底?	-

表31 第211号住居跡出土石器観察表

図版番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	備考
27-10	台石床面	Ⅱ	130×15.4×6.8	2375.7	安山岩	すり面
27-11	石盤・土	Ⅱ	1.9×1.9×0.3	1.1	珪質頁岩	凹基・欠損品

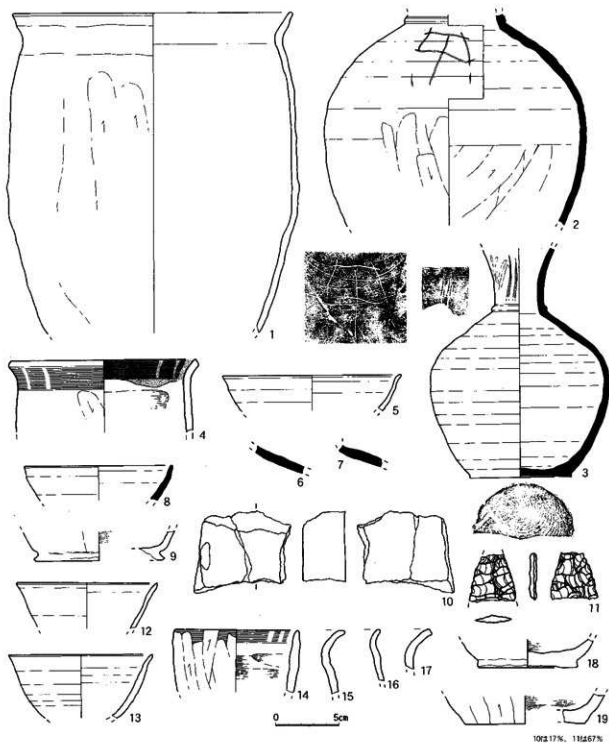


図27 第211号住居跡・第216号溝跡出土遺物

第216号溝跡(図25～27、表32)

[位置・確認] CV-70・71、CW-69～72、CX-69・72、CY-72グリッドに位置する。主に第IV～VI層上面で、暗褐色土ないし黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第214号溝跡の南東端部を切っている。

[形態・規模] 第211号住居跡の北東から南西側を巡る、長さ約21mの部分を精査したが、遺構の南側は調査区域外に延びている。平面形は第211号住居跡の南東側を除く隅丸方形に近い形態なるようである。溝の中は確認面で0.40～0.90m、底面で0.12～0.70mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは19.3～55.5cmで、底面には凹凸がある。全体としては北隅の辺りが最も浅く、底面はその両側に傾斜している。

[堆積土] 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、壁面の崩落による灰黄褐色粘土(第VI層)と黄灰色粘土(第VII層)を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられるが、下部の土層(9・10層)に第VI・VII層の酸化したブロックが含まれる箇所もある。また堆積土上部には、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層(2層)がみられる。

[出土遺物] 堆積土(12～19)から、平安時代の土師器(坏・甕等)が72片(930g)出土した。

(工藤 大)

表32 第216号溝跡出土土器観察表(土師器)

品目番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	土分析
27-12	土師器	坏	(11.0)	(3.6)	—	W針	E	B	10	覆土		—
27-13	土師器	坏	(11.4)	(5.0)	—	W針	H	B	30	覆土		—
27-14	土師器	甕	(9.8)	(4.9)	—	RS	H	B	30	覆土		—
27-15	土師器	甕	—	—	—	RS	H	B	—	覆土		—
27-16	土師器	甕	—	(4.1)	—	WR	H	B	—	覆土		—
27-17	土師器	甕	—	—	—	W	H	B	—	覆土		—
27-18	土師器	甕	—	(2.2)	(7.6)	WRCS	H	B	60	覆土	砂底	—
27-19	土師器	甕	—	(2.3)	(9.4)	WS	E	B	20	覆土	砂底	—

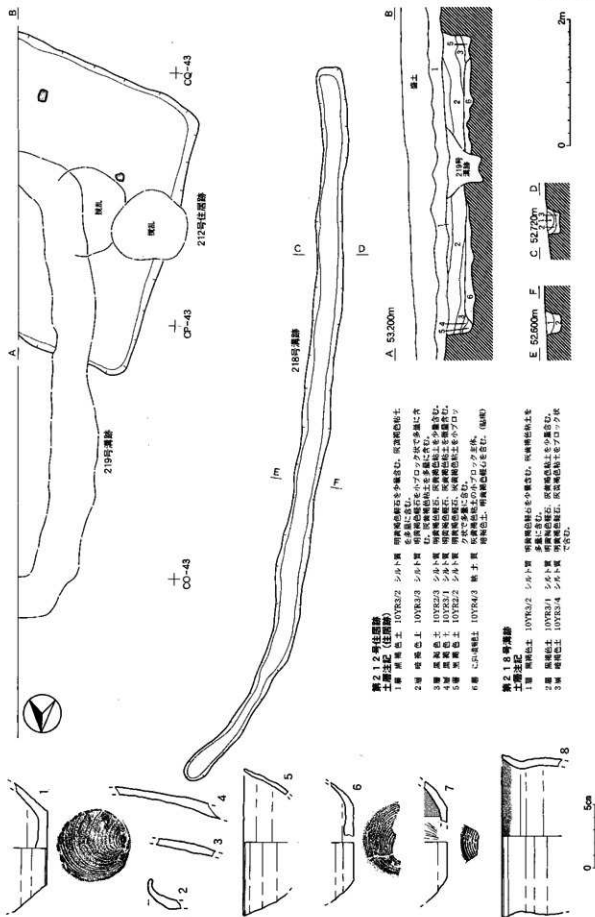
第212号住居跡(図28、表33)

[位置・確認] CO-42、CP-42・43、CQ-42グリッドに位置する。第IV層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込み(方形)として確認したが、掘り込み面は第IV層より上位にある。

[重複関係] 遺構の中央部～北側を、第219号溝跡によって切られている。また西壁の中央部には、抜根跡のような掘乱穴がある。

[形態・規模] 遺構の東側は調査区域から外れているので、西側を精査しただけである。平面形は確認面、床面とも方形とみられるが、南西隅が少し開いて、やや菱形気味の形態になっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した西側の壁長は確認面で4.20m、床面で4.08mである。土層断面図から判断して、壁際には周溝が巡っていたと思われるが、はっきりした掘り方は把握できなかった。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、灰黄褐色粘土(第VI層)の小ブロックを主体とした貼床がみられる。貼床は壁寄り厚くなり、床面中央部では薄くなるようである。確認面から床面までの壁高は10.3～29.2cmである。床面はほぼ平坦になっているが、掘り方の底面は凹凸が著しい。床面積は約9.936㎡である。

[柱穴等] 柱穴ないしこれに類する小ピット等は、検出できなかった。



第219号住居跡
土層注記(住居跡)
1層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質 明褐色磁石を多量含む。灰褐色粘土を多量に含む。
2層 黄褐色土 10YR3/3 シルト質 明褐色磁石を小フロック状で多量に含む。灰褐色粘土を多量に含む。
3層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 明褐色磁石を多量に含む。
4層 黄褐色土 10YR2/3 シルト質 明褐色磁石を多量に含む。
5層 黄褐色土 10YR2/2 シルト質 明褐色磁石を多量に含む。
6層 C.P.埋戻土 黄褐色土。明褐色磁石を多量含む。(M.M.)

第218号住居跡
土層注記
1層 黄褐色土 10YR3/2 シルト質 明褐色磁石を少量含む。灰褐色粘土を多量に含む。
2層 黄褐色土 10YR3/3 シルト質 明褐色磁石を少量含む。
3層 黄褐色土 10YR3/4 シルト質 明褐色磁石を少量含む。

図28 第219号住居跡、第218号溝跡出土遺物

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器（坏・甕等）が52片（560g）出土した。

表33 第212号住居跡出土土器観察表（土師器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	残存	層位	備考	土分析
28-2	土師器	甕	-	-	-	CS	E	B	-	覆土	-	-
28-3	土師器	甕	-	-	-	W針	H	B	-	覆土	-	-
28-4	土師器	甕	-	-	-	CS	H	B	-	覆土	-	-
28-5	土師器	坏	(116)	(35)	-	WRC	G	B	20	覆土	-	-
28-6	土師器	坏	-	(18)	(5.8)	WC	H	B	40	覆土	右回転	-
28-7	土師器	坏	-	(18)	(5.4)	WR針	H	B	20	覆土	回転切	-
28-8	土師器	甕	(126)	(48)	-	W針	D	B	10	覆土	-	-

第218号溝跡（図28、表34）

[位置・確認] CN～CQ-43グリッドに位置する。第Ⅴ～Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 第212号住居跡の西側を巡るような配置になっているが、平面形はかなり直線的である。全長は約12m、溝の中は確認面で0.40～0.48m、底面で0.20～0.30mである。遺構は基本土層の第Ⅵ層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは6.5～30.1cmである。底面には凹凸があり、全体として北（斜面下方）に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を下部に多く含む。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器（坏等）が4片（140g）出土した。

表34 第218号溝跡出土土器観察表（土師器）

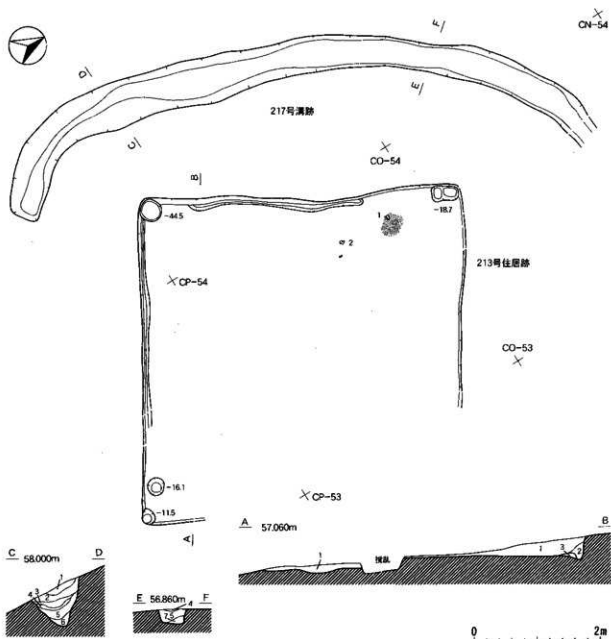
図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	残存	層位	備考	土分析
28-1	土師器	坏	-	(27)	(5.8)	WC針	E	B	70	覆土	右回転	-

第213号住居跡（図29、表35）

[位置・確認] CN-53、CO・CP-53・54グリッドに位置する。第Ⅶ層上面で暗褐色土の落ち込み（方形）として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形であるが、遺構の東側は既に削平され、掘り方の一部が残るだけである。比較的遺存状態の良い西側の壁長は、北西壁が確認面で5.04m、床面で4.98m、南西壁が確認面で4.92m、床面で4.86mである。北西及び南西壁際では、部分的に周溝を検出したが、遺構全体を巡っていたかはっきりしない。遺構は基本土層の第Ⅶ層まで掘り込んで作られているが、残存部分では貼床等の痕跡は認められなかった。確認面から床面までの壁高は2.7～35.4cmである。西側の床面はほぼ平坦になっているが、東側の底面（掘り方）は凹凸が著しい。床面積は約24.33m²である。

[柱穴等] 柱穴状の小ピットを、北隅、西隅、南隅及び各隅寄りで5個検出した。各隅に位置する小



第213号住居跡
土層注記 (住居跡)

- 1層 黒褐色土 10YR3/3 シルト質 明鉄褐色礫石、灰褐色粘土を含む、黄灰色粘土の大ブロックを含む。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 シルト質 明鉄褐色礫石、灰褐色粘土、黄灰色粘土を少量含む。
- 3層 灰褐色土 10YR4/3 粘土質 灰褐色粘土、黄灰色粘土主体、礫褐色土、明鉄褐色礫石を含む。(結果)

第217号溝跡
土層注記

- 1層 黒色土 10YR2/1 シルト質
- 2層 黒褐色土 10YR3/1 シルト質 灰褐色粘土を含む。
- 3層 黒褐色土 10YR3/2 シルト質 灰褐色粘土を少量含む。
- 4層 灰褐色土 10YR5/2 中粘土層 白濁山水山灰層。
- 5層 黒褐色土 10YR3/2 シルト質 灰褐色粘土を少量含む。
- 6層 黒褐色土 10YR3/1 シルト質 灰褐色粘土を含む。
- 7層 黒褐色土 10YR3/2 シルト質 灰褐色粘土をブロック状を含む。



図29 第213号住居跡・出土遺物、第217号溝跡

ビットは柱穴とみられる。

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）と黄灰色粘土（第Ⅶ層）を含む。

[出土遺物] 床面から、平安時代の須恵器（壺・坏）が13片（240g）出土した。須恵器壺（1）は刻書が認められるほか、須恵器坏（2）は、第217号溝跡及びC0-53グリッド出土の同一個体と接合関係にある。

表35 第213号住居跡出土土器観察表（須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	土分析
29-1	須恵器	長頸壺	10.4	(4.6)	—	W針	I	A	70	床 面	刻書	—
29-2	須恵器	坏	(13.2)	5.6	4.4	W	E	C	60	床 面	内外面火傷、底面跡止未切	—

第217号溝跡（図29）

[位置・確認] CN-53・54、CO・CP-54グリッドに位置する。第Ⅵ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 第213号住居跡の西側を巡るような配置になっているが、東側が削平されているので、残存部分は約10mほどである。全体形は分からないが、遺存する部分からみて、第213号住居跡の東側を除く隅丸方形ないし楕円形に近い形態になるらしい。溝の巾は確認面で0.42～0.74m、底面で0.08～0.46mである。遺構は基本土層の第Ⅵ～Ⅶ層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは18.0～63.5cmである。底面には凹凸があり、全体としてかなり北東（斜面下方）に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を下部に多く含む。全体的には自然堆積した状態を示すと考えられるが、堆積土中には、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層（4層）がみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器等が5片（40g）出土した。（工藤 大）

第214号住居跡（図30・31、表36～39）

[概要] 竪穴住居跡（第214号住居跡）及び外周溝（第220号溝跡）によって構成される。削平のため遺構東側ほど残りが悪く、特に北東隅は完全に失われている。

[位置・確認] CS-54・55、CT-54・55グリッドに位置する。第Ⅴ層上面でぶい黄褐色土と黒褐色土、白頭山火山灰の落ち込み（方形）として確認した。

[重複関係] 遺構の南北を横断する第209号溝によって切られる。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともに方形となっている。残存している部分の壁長は、西側が確認面で5.04m、床面で4.92m、南側が確認面で5.10m、床面で4.86m。周溝は、東壁際で深さ9.4～15.8cmである。また、壁際ではないが、北壁よりも深さ30cm前後の溝が存在する。遺構は灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を掘り込んで作られ、明黄褐色軽石（第Ⅴ層）と灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を用いて床を貼る。貼床は斜面の傾斜に関係して、東側ほど厚い傾向を示すが、西側の一部では灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）をそのまま床面としている。床面はほぼ平坦であるが、掘り方には凹凸が認められ

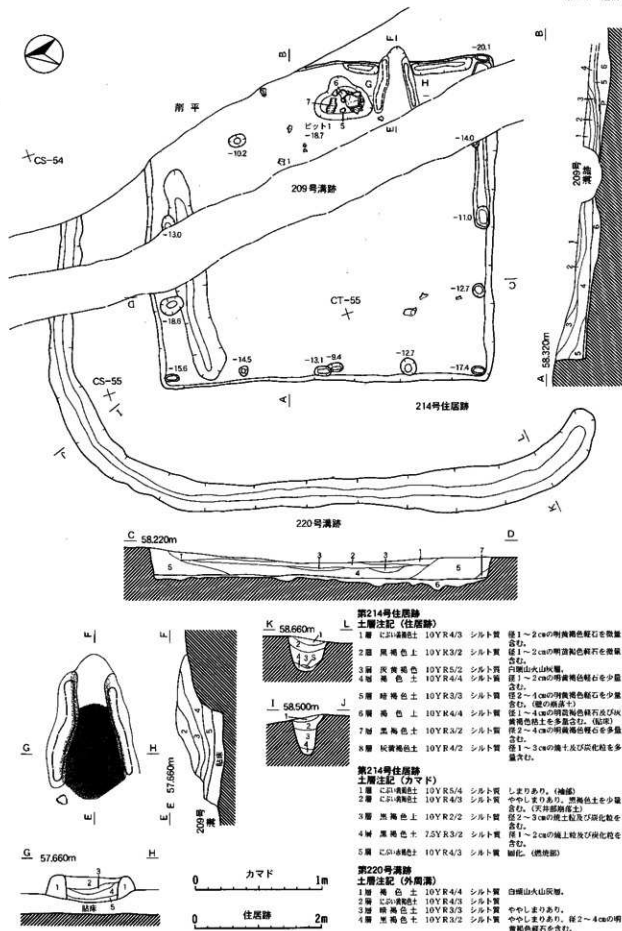


図30 第214号住居跡、第220号溝跡

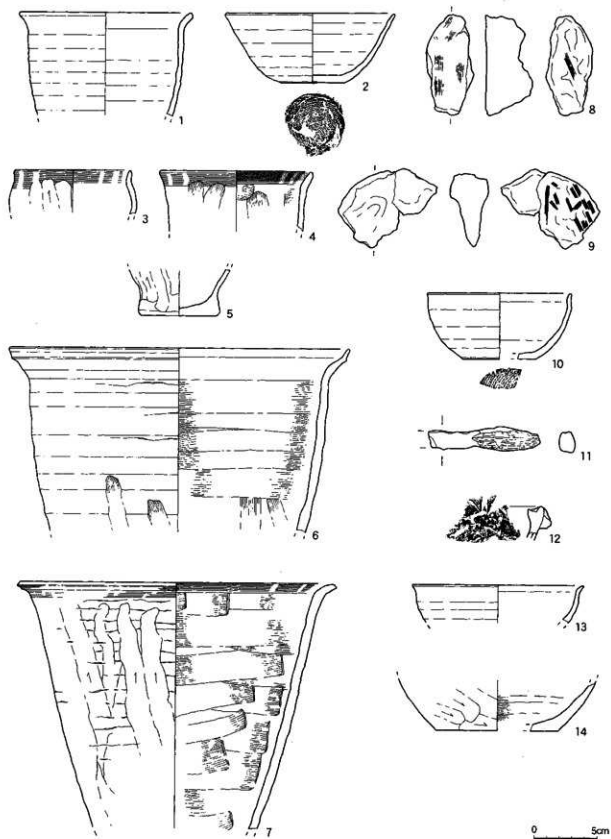


图31 第214号住居跡・第220号溝跡出土遺物

る。確認面から床面までの壁高は16.4～59.9cmである。

[柱穴・土坑] ビットが12基検出された。主柱穴は壁際のみを巡るもので、各コーナー間は基本的に3個のビットをもってほぼ等間隔に埋める。その殆どは隅丸方形を呈していることから、板材の使用が想定される。カマドの左隣に配された不整形のビット1は覆土中に土器の細片、焼土、焼土塊、炭化粒を多く含むことから、カマドを掃除した際の物原的なものかと思われる。この中からは火熱を受け赤く変色した板状のシルト塊も出土している。

[付属施設] 半地下式のカマドが1基検出された。遺物で図化可能なものは、覆土第2層上面より出土した、完形に近い土師器の坏(2)のみである。支脚は存在しない。

[堆積土] 黒褐色土と褐色土を主体とし、埋没過程で流れ込んだ明黄褐色軽石(第V層)を含む。このほか、第3層には白頭山火山灰が弧状に認められるが、部分的にまばらである。遺構東側では白頭山火山灰が床面近くに堆積していることから、住居跡廃絶後、比較的短期間のうちに火山灰が降下したと思われる。

[出土遺物] カマドの周辺を中心に、155片(2,420g)の遺物が出土した。このうち1は床面、2はカマド上面、3はカマド燃焼部上面、4～9はビット1、10～12は覆土中からの出土である。このうち、8・9は第208号住居跡で出土したものと同様にカマドの一部と思われ、片面にはナデの痕跡が、もう片面には草の圧痕がみられる。11は、木質部が残存している。

第220号溝跡(図30、表40)

[位置・確認] CR-54・55、CS-54・55、CT-55グリッドに位置する。第V層上面で白頭山火山灰とにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 住居跡の北側及び西側を囲む様に弧状に伸びる約12.0mを精査した。幅は確認面で0.28～0.74m、底面で0.1～0.28mで、確認面からの深さは32.5～69.1cmである。遺構は黄灰色粘土(第VII層)上面まで掘り込み、底面としている。底面は凹凸があり、全体的に北東方向に傾斜する。

[堆積土] 暗褐色土を主体とするが、壁面の崩落と思われる明黄褐色軽石の流入も多くみられる。また、最上層である第1層には白頭山火山灰を密に含むが、住居跡において床面近くにみられたのに対し、底面からの位置は明らかに高い。このことは、溝がほぼ埋没状態にある時に、住居跡は殆ど埋没していないことを示すに他ならず、住居跡と外周溝における埋没速度の違いに大きな差があることを如実に物語っているといえよう。

[出土遺物] 図示した13・14を含め、4片(90g)の遺物が白頭山火山灰より下層の覆土中から出土している。

(佐藤 智生)

表36 第214号住居跡出土土器観察表(土師器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	土器分析
31-1	土師器	壺	(13.6)	(8.2)	-	WR針	E	B	30	床 面		-
31-2	土師器	坏	13.4	5.5	(5.0)	WR	H	B	90	カマド	右回転、マメツ	-
31-3	土師器	壺	(9.2)	(3.4)	-	CS	H	B	30	カマド		-
31-4	土師器	壺	(12.0)	(4.8)	-	WRS	G	B	20	ビット1		-
31-5	土師器	壺	-	(3.7)	(6.0)	WC針	H	B	40	ビット1	砂塵	-
31-6	土師器	壺	(27.0)	(14.5)	-	RC	H	B	30	ビット1	外周粘土付着	-
31-7	土師器	壺	(25.0)	(19.4)	-	WS針	H	B	30	ビット1		-
31-10	土師器	坏	(11.4)	5.2	(5.8)	RCS	G	B	30	覆 土	右回転	-

表37 第214号住居跡出土土器観察表(縄文)

図録番号	分類	層位	器形	文様	備考	出土箇所
31-8	段成粘土甕	ピット1	深鉢	波状口縁		-

表38 第214号住居跡出土土器製品観察表

図録番号	分類	層位	無文	文様	備考
31-8	段成粘土甕	ピット1	無文		ナデ・草の圧痕
31-9	段成粘土甕	ピット1	無文		ナデ・指環圧痕・草の圧痕

表39 第214号住居跡出土土器製品観察表

図録番号	層位	種別	備考
31-11	覆土	刀子	木質部残存

表40 第220号溝跡出土土器観察表(土師器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土箇所
31-13	土師器	杯	(13.6)	(3.0)	-	W	H	B	20	覆土		-
31-14	土師器	甕	-	(4.0)	(9.6)	W針	H	A	20	覆土		-

第215号住居跡(図32~35、表41~44)

〔概要〕 竪穴住居跡(第215号住居跡)、掘立柱建物跡、外周溝(第221号溝跡)及び竪穴住居跡内から外部に延びる溝(第223号溝跡)によって構成される。竪穴住居跡、カマドに新旧2時期認められることから、住居跡の拡張が行われたものと思われる。

〔位置・確認〕 CR-68~70・CS-68~70・CT-68~70グリッドに位置する。第IV層上面で黒褐色土と白頭山火山灰の落ち込み(方形)として確認した。

〔形態・規模〕 新しい時期のものは、平面形は確認面、床面ともに方形を呈す。壁長は、東側が確認面で6.78m、床面で6.72m、西側が確認面で6.24m、床面で6.18m、南側が確認面で6.42m、床面で6.30m、北側が確認面で6.24m、床面で5.82mである。また古い時期のものに関しては、南壁寄りに隅丸方形のピット1~3がほぼ等間隔に並ぶことから、これらが南壁際のピット、即ち、南壁を示すと思われる。ただ、他の壁については、積極的に古い時期の壁際を示すピットが認められないことから、南壁のみを拡張した可能性もある。

〔柱穴等〕 ピットが29基検出されたが、隅丸方形を呈するものが多い。主柱穴に関しては、壁際は小形、中ほどは大形のもので構成されるようである。ピット4と5は他の住居跡でも確認された物的なものである。尚、ピット6は土器や刀子(27~30)が埋納されたような状態で出土した。

〔付属施設〕 カマドが2基検出された。第1号カマドは残存状態が比較的良好。左袖部からは、転用されたと考えられる羽巾(25)が、直立したまま出土した。これに対し南側の第2号カマドは、ほぼ燃焼部が残存するにすぎない。両者とも、粘土を主体とした構築と思われる。

〔堆積土〕 黒褐色土と暗褐色土を主体とするが、第4層に白頭山火山灰が床面を広範囲に覆う形で弧状に認められる。住居跡廃絶後短期間のうちに降下したものと思われる。

〔出土遺物〕 1~18は床面、19~23は第2号カマド、24~26は第1号カマド、27~30はピット6、31~36は覆土からの出土である。本遺構では、カマド付近の床面を中心に遺物が多く出土したが、とりわけピット6の遺物は一括埋納された可能性がある。中でも、小壺(29)は非常に丁寧なミガキが施され、肩部と底部の2箇所刻書を有す。また、口縁部の2箇所刻書が認められる他は、

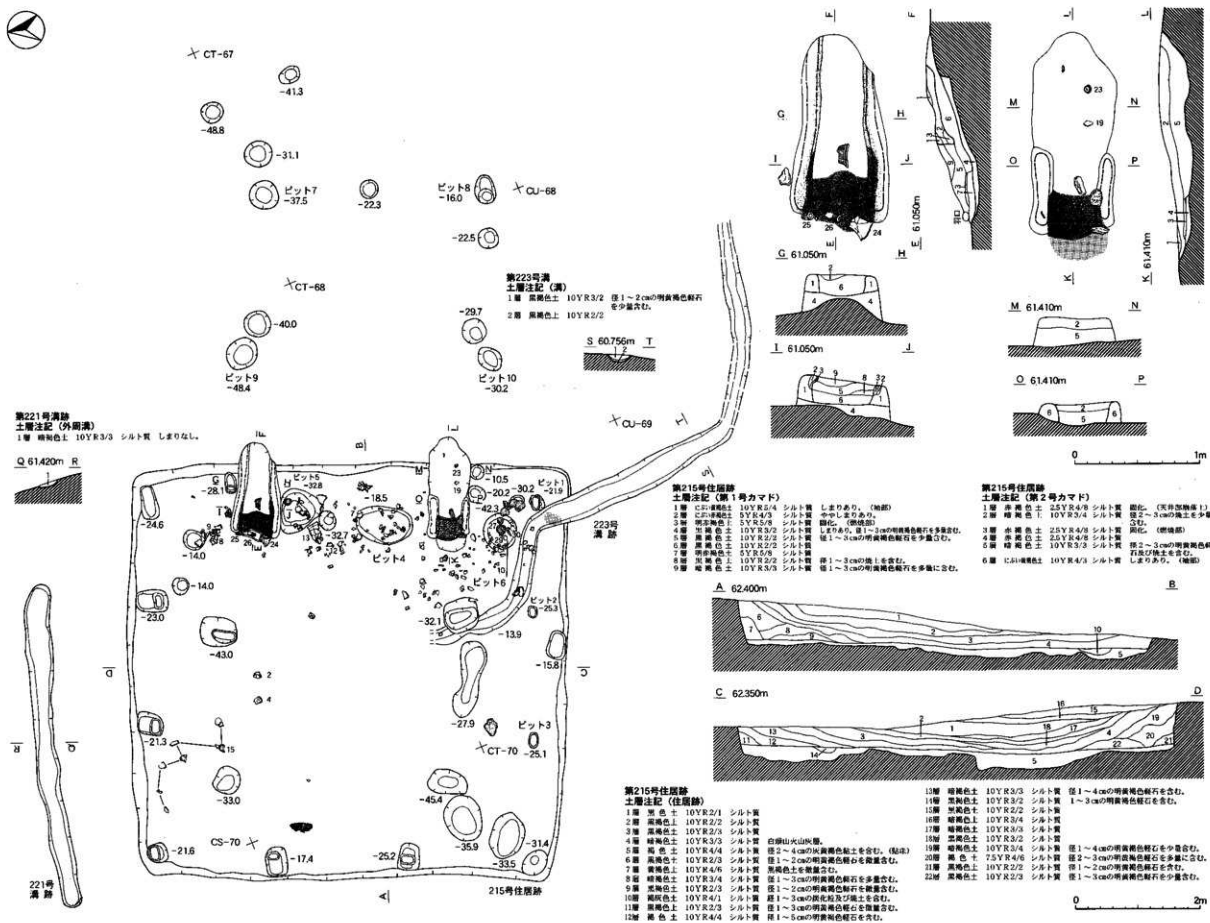


図32 第215号住居跡、第221・223号溝跡

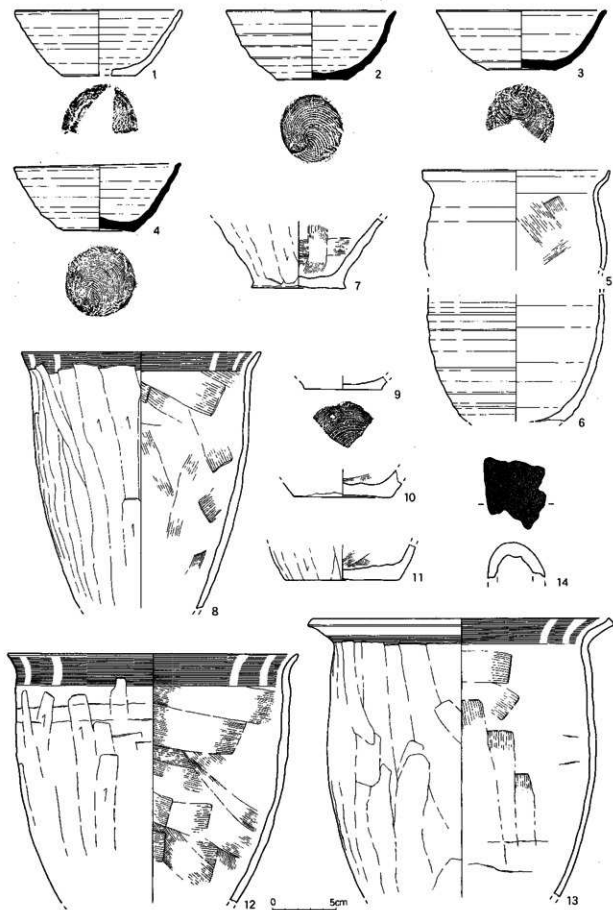


図33 第215号住居跡出土遺物(1)

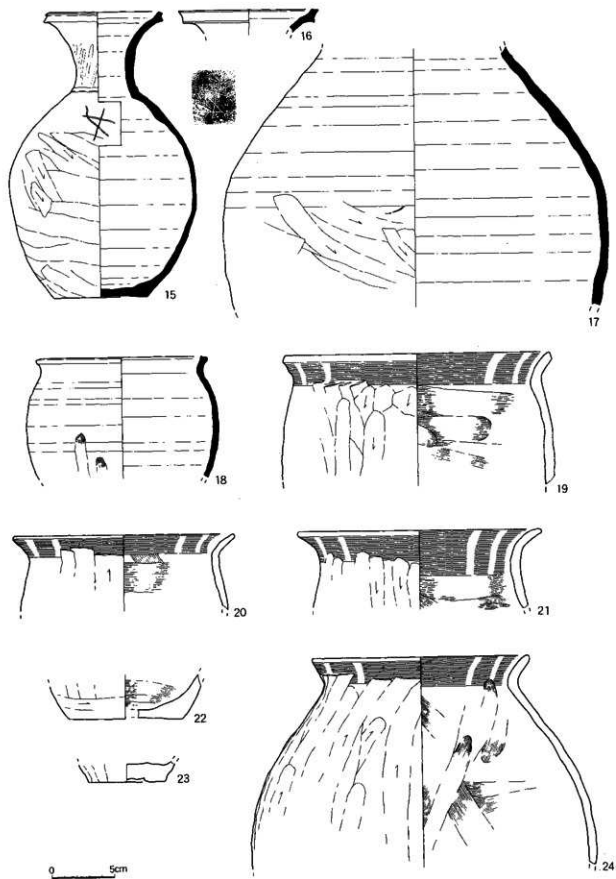


图34 第215号住居跡出土遺物(2)

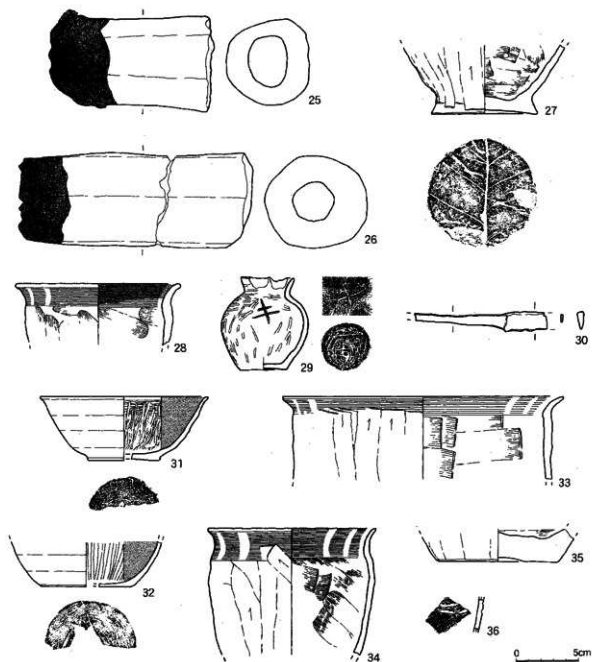


図35 第215号住居跡出土遺物(3)

ヒビーつ見当たらず故意に打ち欠いたものかも知れない。出土状況や土器の特徴を考えると特殊なものといえよう。この他、北側床面で出土した須恵器（2・4・15）についても、口縁部の欠けや半截されたような状況が認められ、調査区内にはその欠損部分が見当たらなかった。

独立柱建物跡部分

住居跡の拡張に関係してかピット数が多いものの、プランは明確にし難い。ピット7～10のほか、更にもう1棟分認められそうでもある。

表41 第215号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	群像	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
33-1	土師器	坏	(13.2)	5.2	(5.6)	RC	E	B	50	床 面	踏込切	-
33-2	須恵器	坏	13.4	5.5	5.4	W	K	B	60	床 面	右回転、内外面十字状火傷	108
33-3	須恵器	坏	(13.4)	4.7	5.4	W針	C	B	60	床 面	右回転、内外面十字状火傷	106
33-4	須恵器	坏	13.1	5.4	5.6	W針	J	B	60	床 面	右回転、内外面十字状火傷	107
33-5	土師器	壺	(14.8)	(7.9)	-	RC	H	B	20	床 面	33-6と同一個体	-
33-6	土師器	壺	-	-	-	RC	H	B	-	床 面	33-5と同一個体	-
33-7	土師器	壺	-	(5.6)	(7.4)	RS	E	B	20	床 面	砂底	-
33-8	土師器	壺	(19.0)	(20.2)	-	WRS針	E	B	40	床 面	-	-
33-9	土師器	坏	-	(1.0)	(6.0)	W	H	B	30	床 面	右回転	-
33-10	土師器	壺	-	(2.2)	(7.6)	RCS	H	B	30	床 面	-	-
33-11	土師器	壺	-	(2.8)	9.0	WS針	H	B	-	床 面	砂底	-
33-12	土師器	壺	(23.0)	(19.7)	-	WRS針	C	B	40	床 面	-	-
33-13	土師器	壺	(23.4)	(22.0)	-	WRS針	C	B	40	床 面	-	-
34-15	須恵器	長頸壺	8.8	22.6	7.4	W針	B	B	90	床 面	-	105
34-16	須恵器	長頸壺	(11.0)	(1.8)	-	W	J	B	10	床 面	-	-
34-17	須恵器	長頸壺	-	-	-	W針	J	A	-	床 面	外面自然輪付着	112
34-18	須恵器	壺	(12.8)	(9.6)	-	W針	J	B	40	床 面	-	-
34-19	土師器	壺	(21.0)	(10.4)	-	WCS	H	B	20	1号カマド	黒斑	-
34-20	土師器	壺	(17.4)	(6.0)	-	CS	H	B	20	1号カマド	外面粘土付着	-
34-21	土師器	壺	(19.2)	(6.2)	-	WR針	E	B	30	1号カマド	-	-
34-22	土師器	壺	-	(3.5)	(9.0)	WRS	E	B	30	1号カマド	-	-
34-23	土師器	壺	-	(1.6)	(6.0)	WRS	H	B	60	1号カマド	砂底	-
34-24	土師器	壺	(17.0)	(16.5)	-	WRS針	G	B	40	1号カマド	外面粘土付着	-
35-27	土師器	壺	-	(5.5)	8.4	WRS	A	B	80	ビット6	底部木曜痕	-
35-28	土師器	壺	(13.0)	(4.9)	-	S	C	B	20	ビット6	-	-
35-29	土師器	小壺	4.1	7.4	3.8	W針	L	B	90	ビット6	踏込切、剥着、黒化処理?	-
35-31	土師器	坏	(13.4)	5.1	(5.6)	W針	H	B	40	覆土	-	-
35-32	土師器	坏	-	(3.6)	(7.2)	W針	E	B	40	覆土	-	-
35-33	土師器	壺	(22.4)	(6.6)	-	WS	E	B	20	覆土	-	-
35-34	土師器	壺	(13.4)	(10.1)	-	WC針	D	B	40	覆土	-	-
35-35	土師器	壺	-	(2.6)	9.6	WRCS	G	B	60	覆土	砂底	-

表42 第215号住居跡出土土器観察表(編文)

図版番号	分類	層位	群 像	文 様	備 考	出土所
35-36	IV-1 十層内1式?	覆土	深鉢 胴部	沈線文	-	-

表43 第215号住居跡出土土製品観察表

図版番号	分類	層位	文 様	備 考
33-14	羽 口 床 面	無文	-	溶着物が付着
35-25	羽 口 1号カマド	編文	-	溶着物が付着、部分的に赤染、芯材に転用
35-26	羽 口 1号カマド	無文	-	溶着物が付着、部分的に赤染

表44 第215号住居跡出土鉄製品観察表

図版番号	層位	種別	備 考
35-30	ビット6	刀 子	木質部残存

第221号溝跡(図32)

[位置・確認] CR-68・69グリッドに位置する。第V層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。
 [形態・規模] 住居跡の北側に位置し、直線的に延伸する約5.2mを精査した。遺構の幅は確認面で28~44cm、底面で16~34cmである。遺構は確認面である明黄褐色軽石(第V層)まで掘り込んでおり、底面となす。確認面からの深さは2.8~15.9cmである。底面の凹凸は少なく、全体的に東側

に傾斜する。

[堆積土] 暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

第223号溝跡 (図32)

[位置・確認] CT-69、CU-68・69グリッドに位置する。第IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認。

[形態・規模] 住居跡内部から外部にかけて、蛇行気味に展開する約11.2mを精査した。遺構の幅は確認面で24～34cm、底面で10～20cmである。遺構は確認面である黒色腐食質土（第Ⅲ層）と明黄褐色軽石（第Ⅴ層）への漸移層（第Ⅳ層）まで掘り込み底面となす。確認面からの深さは0.9～23.9cmである。底面の凹凸は少なく、全体的に東側に傾斜する。

[堆積土] 黒褐色土を主体とするが、住居跡内部の覆土中には、部分的に焼土や炭化粒が認められた。

[出土遺物] 土師器の胴部片が6片（80g）出土したが、いずれも図化し得ない。（佐藤 智生）

第216号住居跡 (図36・37、表45・46)

[位置・確認] CX・CY-62～64グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（方形）として確認した。

[重複関係] 北東壁の一部を、第222号土坑によって切られている。また北東壁側では、周溝と小ピット（壁柱穴）が2重に並んでいるので、本遺構は建て替えられた住居跡と考えられる。

[形態・規模] 遺構の南側は調査区域から外れているので、北側を精査しただけであるが、平面形は確認面、床面とも方形となっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した北東側の壁長は確認面で8.40m、床面で8.22mである。壁際には、深さ2.2～16.6cmの周溝が巡っており、北東壁側の内側貼床下では、より古い周溝をもう1本検出した。遺構は基本土層の第Ⅵ～Ⅶ層を掘り込んで作られ、壁寄りでは灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を主体とした貼床がみられる。遺構の中央部では、地山（第Ⅵ～Ⅶ層）を直接床面としている。確認面から床面までの壁高は21.0～74.1cmである。床面には緩い凹凸があり、全体として東に傾斜している。床面積は約29.4㎡である。

[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを、北東壁寄りの床面ないし貼床下で2個検出した。また柱穴状のピットや小ピットを隅・壁寄り及び壁際の床面（周溝内）ないし貼床下で14個検出した。北隅と東隅寄りのピット（ピット1・2）は主柱穴とみられ、いずれもピットの北西側に浅い掘り込みを伴っている。各壁際に5個ほど並ぶ小ピットは、壁柱穴とみられる。

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第Ⅵ層）を壁寄りに多く含む。全体的には自然堆積した状態を示すとみられるが、堆積土中（2層下部）には、埋没過程で降下した白頭山火山灰が含まれている。

[出土遺物] ピット1・2内（1・2）及び堆積土（3～8・11）から、平安時代の土師器（坏・甕等）、須恵器（壺・坏等）が90片（860g）出土した。図37（9）の須恵器は、第222号溝跡及びCX-60・CW-64・CV-65グリッド出土の同一個体と接合した。このほか、堆積土から鉄製品（7）が1点出土した。

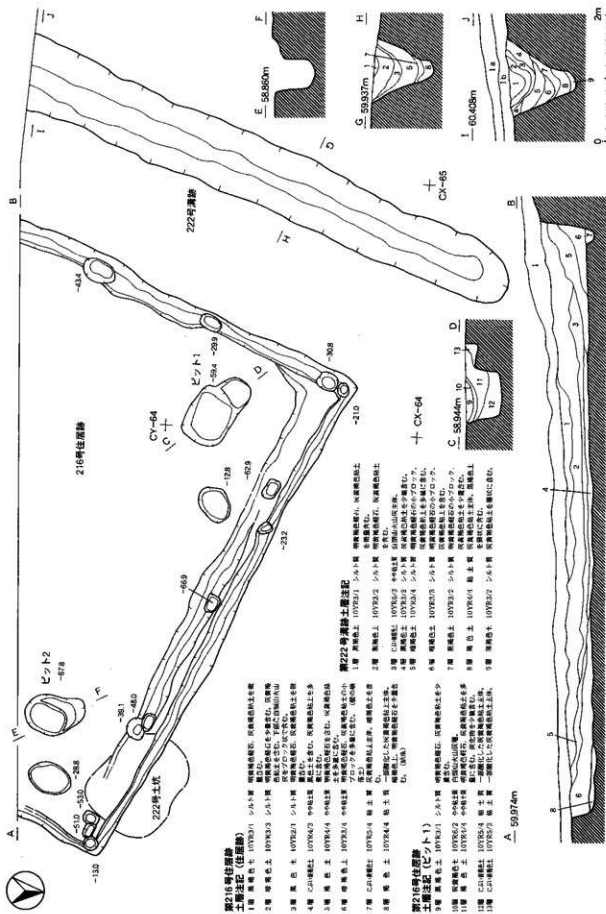


図36 第216号住居跡、第222号溝跡

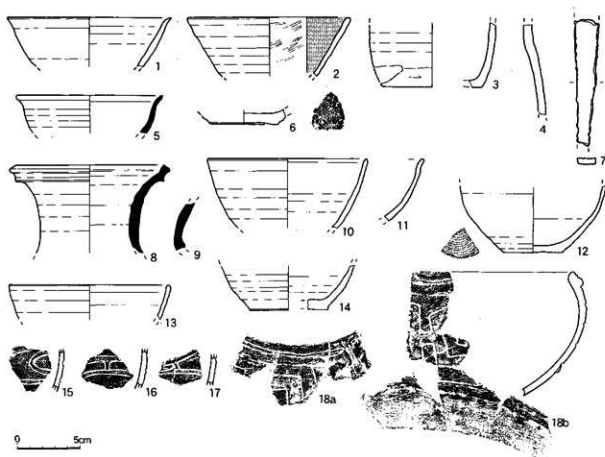


図37 第216号住居跡・第222号溝跡出土遺物

表45 第216号住居跡出土土器観察表（土師器、須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色痕	焼成	残存	層位	備考	出土所
37-1	土師器	環	(13.0)	(3.9)	-	W	E	B	20	ビット	-	-
37-2	土師器	環	(12.8)	(4.7)	-	WR	E	B	30	ビット	-	-
37-3	土師器	環	-	-	-	WR	G	B	20	覆土	磁糸切、外面粘土付着	-
37-4	土師器	罐	-	(5.1)	(7.8)	RC	E	B	-	覆土	-	-
37-5	須恵器	環	(11.6)	(3.0)	-	W針	K	B	20	覆土	内外面火焼	-
37-6	土師器	環	-	(1.2)	(5.4)	WC	H	B	20	覆土	磁糸切	-
37-8	須恵器	長楕圓	(11.8)	(7.0)	-	WC針	J	B	30	覆土	-	-
37-11	土師器	環	-	(5.0)	-	W針	L	B	-	覆土	内外面黒化処理。67-1と同一遺体	-

表46 第216号住居跡出土鉄製品観察表

図版番号	層位	種別	備考
37-7	覆土	クサビ状鉄製品	

第222号溝跡（図36・37、表47・48）

〔位置・確認〕 CW-64、CX-64・65、CY-65グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕 北東側の長さ約8mの部分を経査したが、遺構の南西側は調査区域外に延びている。第216号住居跡の西側を巡る配置となっているが、精査した部分の平面形は直線的である。溝の中は確認面で0.80～1.14m、底面で0.16～0.44mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで

作られ、同層を底面としているが、遺構下部の第VI層は(水の影響で)かなり酸化している。確認面からの深さは60.8~107.2cmである。底面には凹凸があり、全体として南西に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、壁面の崩落によるとみられる明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を含む。灰黄褐色粘土(第VI層)は互層的に混入し、自然堆積した状態を示しているが、堆積土上部には、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層(3層)がみられる。

[出土遺物] 堆積土(9・10・12~18)から、平安時代の上師器(坏・甕等)、須恵器、縄文時代後期の土器(鉢等)が34片(470g)出土した。縄文土器(18)は、CW-64・65グリッド出土の同一個体と接合した。(工藤 大)

表47 第222号溝跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図面番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	土分析
37-9	須恵器	長頸壺	-	-	-	W針	J	B	-	覆土		-
37-10	土師器	坏	(12.6)	(5.5)	-	W針	C	B	10	覆土		-
37-12	土師器	坏	-	(5.3)	(4.8)	W針	H	A	20	覆土	回糸切、内外面スス付着	-
37-13	土師器	坏	(12.6)	(2.7)	-	W	G	B	20	覆土		-
37-14	土師器	坏	-	(3.5)	(6.2)	WR針	E	B	20	覆土	回糸切	-

表48 第222号溝跡出土土器観察表(縄文)

図面番号	分類	層位	器 形	文 様	備 考	土分析
37-15	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	磨治縄文?		-
37-16	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	磨治縄文(LR)		-
37-17	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	磨治縄文(LR)		-
37-18	IV-1 十層内1式	覆土	鉢類 胴部	磨治縄文(LR)・陶帯		18

第217号住居跡(図38~40、表49・50)

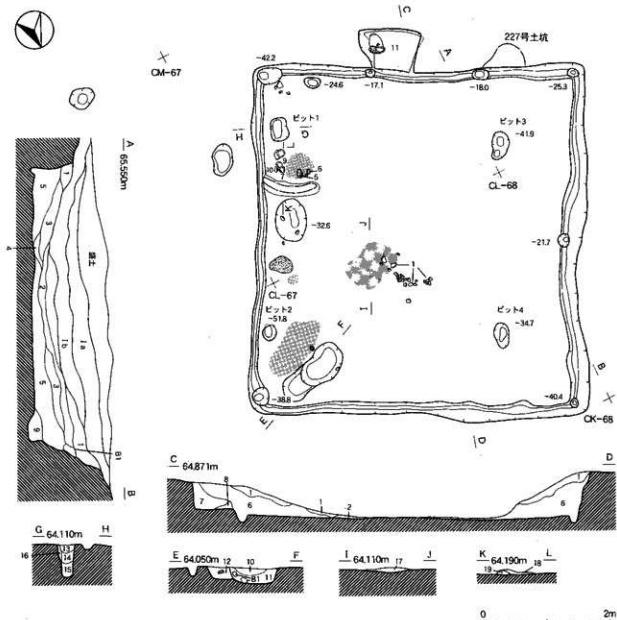
[位置・確認] CK・CL-66~68グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[重複関係] 第227号土坑の北東側を切っている。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形である。壁長は北東側が確認面で5.22m、床面で4.98m、北西側が確認面で5.40m、床面で5.28m、南東側が確認面で5.28m床面で5.22m、南西側が確認面で5.10m、床面で4.98mである。壁際には深さ2.9~25.1cmの周溝が掘られ、住居跡全体を巡っている。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を直接床面としている。貼床等の痕跡は認められなかった。確認面から床面までの壁高は6.2~90.9cmである。北~西側(斜面上方)の壁面はかなり崩れ、南東側の壁はほとんど残っていない。床面はほぼ平坦で、床面積は約25.86㎡である。

[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを、南西壁寄りの床面で2個検出した。また柱穴状の小ピットを、隅・壁寄り及び壁際の床面(周溝内)で14個、南東側の遺構外で2個検出した。北隅、西隅及び南東壁寄りの小ピット(ピット1~4)は主柱穴、各壁際に並ぶ小ピットは壁柱穴とみられる。

[付属施設] 南東壁の南隅寄りに、カマドが設置されている。煙道部等は残っていないが、遺存する片袖部は主に灰黄褐色粘土(第VI層)で構築され、内側には火熱を受けた痕がある。燃焼部には最厚6cmほどの焼土が堆積し、上面は固化している。焼土はこのほか、東隅寄りと中央部寄りの床面で検出した。



**第217号住居跡
土層注記 (住居跡)**

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
 - 2層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石を少量含む。灰黄褐色粘土を多量に含む。
 - 3層 にお漬焼土 10YR4/3 粘土質 明黄褐色軽石のブロックを含む。(壁の跡残す?)
 - 4層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。炭化物を含む。
 - 5層 にお漬焼土 10YR5/4 粘土質 灰黄褐色粘土上土塊、明黄褐色軽石をブロック状にして少量含む。(壁の跡残す?)
 - 6層 暗褐色土 10YR4/4 やが粘土質 明黄褐色軽石を小ブロック状に含む。灰黄褐色粘土を多量に含む。
 - 7層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
 - 8層 にお漬焼土 10YR5/4 粘土質 灰黄褐色粘土上土塊、明黄褐色軽石のブロックを含む。(壁の跡残す?)
 - 9層 にお漬焼土 10YR4/3 粘土質 灰黄褐色粘土上土塊、明黄褐色軽石のブロックを含む。
- B 灰黄褐色粘土のブロック

**第217号住居跡
土層注記 (ピット1)**

- 10層 暗褐色土 10YR4/4 粘土質 灰黄褐色粘土下土層、暗褐色土、明黄褐色軽石。炭化物を少量含む。
 - 11層 暗褐色土 10YR3/4 やが粘土質 明黄褐色粘土を含む。灰黄褐色粘土を多量に含む。炭化物を少量含む。
 - 12層 暗褐色土 10YR4/6 粘土質 灰黄褐色粘土下土層、暗褐色土を少量含む。明黄褐色軽石をブロック状にして含む。
- B1 明黄褐色軽石のブロック

**第217号住居跡
土層注記 (ピット2)**

- 13層 暗褐色土 10YR4/4 やが粘土質 灰黄褐色粘土を多量に含む。焼土、炭化物を少量含む。
- 14層 暗褐色土 10YR3/4 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 15層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 16層 にお漬焼土 10YR5/4 粘土質 灰黄褐色粘土下土層、暗褐色土を少量含む。

**第217号住居跡
土層注記 (焼土)**

- 17層 暗赤褐色土 5YR3/6 シルト質 焼土層。上面が硬く締まる。

**第217号住居跡
土層注記 (カマド)**

- 18層 暗褐色土 10YR4/4 シルト質 灰黄褐色粘土の小ブロックを含む。焼土を小ブロック状にして含む。
- 19層 にお漬焼土 10YR5/3 粘土質 灰黄褐色粘土下土層。内側に火熱の痕跡。

図38 第217号住居跡

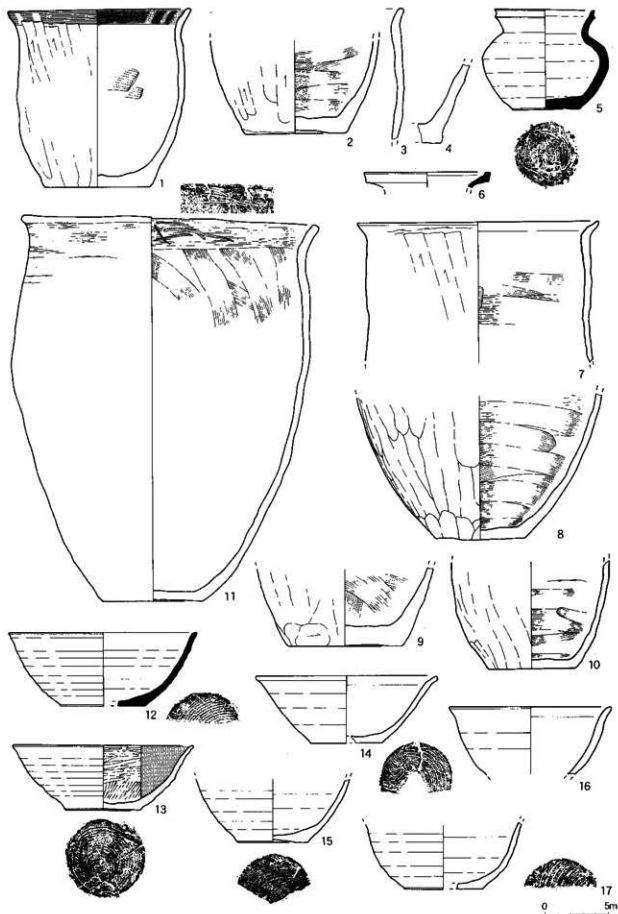


图39 第217号住居跡出土遺物(1)

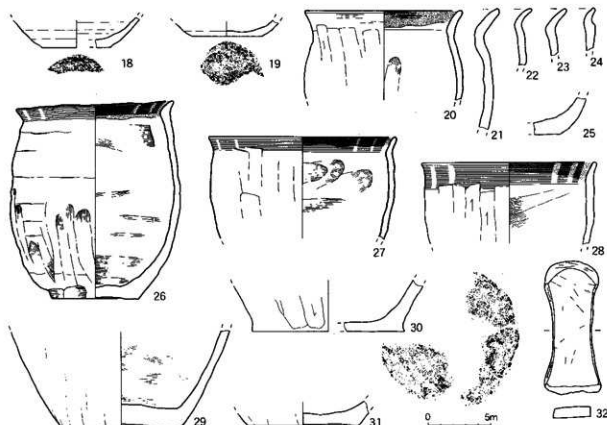


図40 第217号住居跡出土遺物(2)

南西壁の中央からやや南隅寄りには、張出部が設けられている。間口が狭く奥の広い形態で、灰黄褐色粘土（第VI層）を使った間仕切りのような盛土がみられた。底面は、床面より一段高い作りになっている。張出部からは、かなり傾いた状態で、土師器の甕が1個体出土した。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りから下部に、明黄褐色軽石（第V層）のブロックと多量の灰黄褐色粘土（第VI層）を含む層（3・5・6層）が、かなり厚く堆積している。したがって人為的な起因で埋まり、すり鉢状の凹地となった後、自然埋没したようである。

[出土遺物] 床面（1～3・14・28）、カマド内（5～10・15）、ビット2内（4）、張出部床面（11）及び堆積土（12・13・16～27・29～31）から、平安時代の土師器（坏・甕等）、須恵器（壺・坏等）、縄文時代前期の土器（深鉢）が483片（6,950g）出土した。このほか、堆積土から砥石（32）が1点出土した。（工藤 大）

表49 第217号住居跡出土土器観察表（土師器、須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土箇所
39-1	土師器	甕	14.5	14.1	8.4	WRS針	E B	70	床面	砂底	—	—
39-2	土師器	甕	—	(7.4)	7.8	RCS	H B	60	床面	—	—	—
39-3	土師器	甕	—	(10.4)	—	WRS	H B	—	床面	40-27と同一個体?	—	—
39-4	土師器	甕	—	(6.3)	—	CS	D B	—	ビット2	砂底	—	—
39-5	須恵器	小壺	7.8	8.0	5.2	W針	J B	80	カマド	右面転	—	114
39-6	須恵器	長頸壺	(10.0)	(11.2)	—	W針	J B	20	カマド	—	—	—
39-7	土師器	甕	(19.2)	(11.1)	—	RCS	G B	30	カマド	—	—	—
39-8	土師器	甕	—	(11.3)	7.0	WRS	H B	70	カマド	砂底	—	—
39-9	土師器	甕	—	(6.2)	9.0	W針	H B	60	カマド	外面粘土付着	—	—
39-10	土師器	甕	—	(8.5)	6.8	WS	H C	70	カマド	—	—	—

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土状況
39-11	土師器	甕	232	30.6	8.0	RS	H	B	90	床面	刻書、砂底、外面粘土付着、内面マメツ	-
39-12	須臾器	坏	(15.0)	5.8	(6.8)	W針	E	C	50	覆土	内外面火焼	-
39-13	土師器	坏	14.4	5.1	6.0	W針	H	B	100	覆土	蓋部外面タール付着	-
39-14	土師器	坏	(14.2)	(5.3)	(5.6)	WC針	H	B	40	床面	右回転	-
39-15	土師器	坏	-	(5.0)	(5.6)	WC	H	B	40	カマド	右回転	-
39-16	土師器	坏	(12.8)	(5.3)	-	WS	E	B	20	覆土	-	-
39-17	土師器	坏	-	(5.2)	(6.2)	W針	E	B	40	覆土	右回転	-
40-18	土師器	坏	-	(2.3)	(5.4)	CS	H	B	20	覆土	-	-
40-19	土師器	坏	-	(1.2)	(5.6)	RC	G	C	30	覆土	-	-
40-20	土師器	甕	(12.4)	(7.1)	-	WS	H	C	40	覆土	-	-
40-21	土師器	甕	-	-	-	WS	E	B	-	覆土	-	-
40-22	土師器	甕	-	(4.5)	-	WR*	G	B	-	覆土	-	-
40-23	土師器	甕	-	-	-	S	H	B	-	覆土	-	-
40-24	土師器	甕	-	-	-	WRS	H	B	-	覆土	-	-
40-25	土師器	甕	-	(2.9)	-	WRS	E	B	-	覆土	砂底	-
40-26	土師器	甕	(12.4)	15.7	6.8	WRS	H	B	90	覆土	砂底	-
40-27	土師器	甕	(14.8)	(8.1)	-	WRS	H	B	30	覆土	39-3と同一器体?	-
40-28	土師器	甕	(13.8)	(6.5)	-	WCS針	H	B	40	床面	-	-
40-29	土師器	甕	-	(7.6)	(9.4)	CS	H	B	50	覆土	砂底	-
40-30	土師器	甕	-	(4.1)	(12.0)	WRCS	E	B	60	覆土	表面にモミ?や草の圧痕、外面粘土付着	-
40-31	土師器	甕	-	(1.9)	(6.6)	WC	G	A	30	覆土	-	-

表50 第217号住居跡出土石器観察表

図録番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	備考
40-32	砥石	覆土	10.6×4.5×0.9	110.4	流紋岩	すり痕

第218号住居跡(図41、表51)

[位置・確認] CP・CQ-68・69グリッドに位置する。第V～VI層上面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

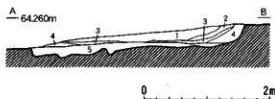
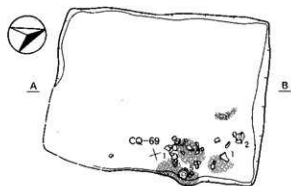
[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも長方形であるが、南東～南西側(斜面下方)の壁はほとんど残っていない。壁長は北東側が確認面で2.58m、床面で2.52m、北西側が確認面で3.18m、床面で3.00m、南東側が床面で2.52m、南西側が床面で1.14mである。周溝は検出されなかった。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を主体とした貼床がみられる。貼床は南側(斜面下方)がかなり厚くなっている。確認面から床面までの壁高は1.8～29.7cmである。床面はほぼ平坦であるが、掘り方の底面は凹凸が著しい。床面積は約7.656㎡である。

[柱穴等] 柱穴ないしこれに類する柱穴状の小ピット等は、検出できなかった。

[付属施設] 南東壁の東隅寄りに、カマドが設置されているが、袖部や煙道部等は残っていない。遺存する燃焼部には最厚10cmほどの焼土が堆積し、中央部から支脚として使われた土師器の底部が伏せた状態で出土した。

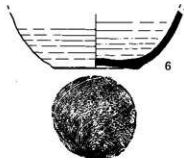
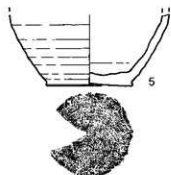
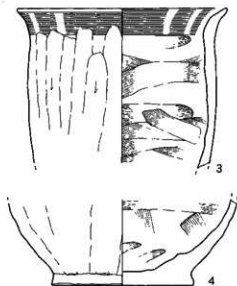
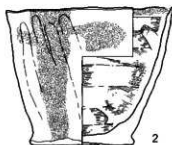
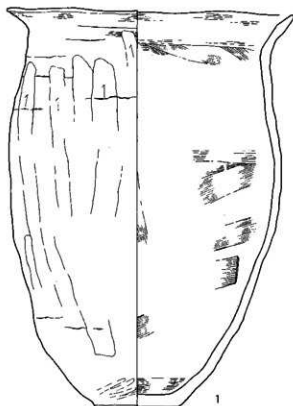
[堆積土] 暗褐色土を主体とし、壁寄りに明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を含む。全体的には自然堆積した状態とみられるが、壁寄りから床面直上にかけて、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層(3層)がみられる。

[出土遺物] 床面(1・2・3)、カマド(5)、堆積土(4・6)から、平安時代の土師器(甕等)、須臾器(坏等)が154片(4,120g)出土した。(工藤 大)



第218号住居跡
土層注記(住居跡)

- 1層 暗褐色土 10YR2/4 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を小ブロック状じりて含む。
- 2層 暗色土 10YR4/4 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。
- 3層 濃い黄褐色土 10YR5/3 やや粘土質 河原山火山灰層。
- 4層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。
- 5層 濃い黄褐色土 10YR5/4 やや粘土質 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土のブロック主体。(昭和)



0 5m

図41 第218号住居跡・出土遺物

表51 第218号住居跡出土土器観察表(土師器、須恵器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土層
41-1	土師器	甕	22.8	31.5	6.6	WS	E	B	70	床 面	砂底、マメツ	-
41-2	土師器	壺	13.3	10.9	8.0	W計	H	B	80	床 面	砂底	-
41-3	土師器	甕	(16.6)	(12.6)	-	WRS	G	B	30	床 面	-	-
41-4	土師器	壺	-	(6.8)	(11.0)	WRCS	E	B	30	覆 土	砂底	-
41-5	土師器	壺	-	(5.6)	6.8	WS	C	B	60	カマド	右回転	-
41-6	須恵器	壺	-	(4.6)	6.6	W計	J	B	60	覆 土	右回転	-

第219号住居跡(図42・43、表52)

[位置・確認] CR-77～79、CS-78グリッドに位置する。第VI層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込みを、多量の炭化材とともに確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも方形であるが、遺構の南側は既に削平され残っていない。遺存する北側の壁長は、確認面で6.06m、床面で5.76mである。壁際には、深さ1.8～25.6cmの周溝が巡っている。また、北西隅から南東隅の方向へ、深さ0.6～15.5cmの直線的な溝が走っている。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)のブロックを主体とした厚い貼床がみられる。確認面から床面までの壁高は0.8～47.0cmであるが、北側と東側の一部(斜面上方)を除いて、壁はほとんど残っていない。北壁の北西隅寄りには、壁面に灰黄褐色粘土(第VI層)を貼り付けた箇所がある。床面には凹凸があり、掘り方の底面はさらに凹凸が著しい。

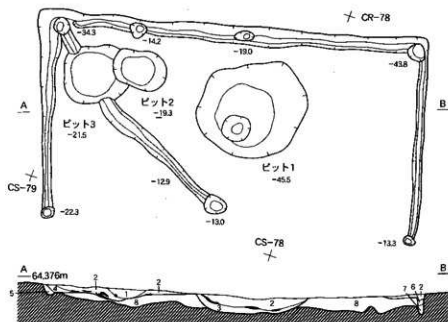
[柱穴等] 浅い掘り込みのピットを、北壁寄りの床面で3個(ピット1～3)検出した。また柱穴状の小ピットを、主に隅及び壁際の床面(周溝内)で8個、南側の遺構外で12個検出した。各隅及び壁際に並ぶ小ピットは壁柱穴とみられ、遺構外の小ピットのうち、北側の3個も壁柱穴に含まれるかも知れない。

[付属施設] 精査した範囲では、カマド等は検出されなかった。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を含む。床面上及びピット1内に堆積する層(2層ほか)には、多量の炭化材と炭化物が焼土とともに含まれ、本遺構は焼失した住居跡とみなされる。また堆積土中には、埋没過程で降下した白頭山火山灰を含む層(1層)もみられる。堆積土は全体的に水の影響を受け、混入物(第V・VI層)がかなり酸化している。

[出土遺物] ピット1内(2～12)及び堆積土から、平安時代の土師器(坏・甕等)が164片(2,590g)出土した。このほか、出土した炭化材の大半は板材であるが、北壁中央部寄りの床面(ピット1の上部)では、角材(C-1)の上に板材が載ったようになっている。板材は互いに折り重なった状態で出土し、ピット1内に落ち込んだ様子のも(C-2)もみられる。板材の幅は10～12cmほどのものが多く、最も長いものは約150cm、最も厚いものは約6cmである。

(工藤 大)

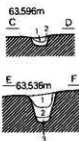


第219号住居跡
土層注記(住居跡)

- | | | | | |
|----|------|---------|-------|--|
| 1層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 2層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | シルト質 | 白旗山火山灰を層状ないしブロック状に含む。明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。炭化材、炭化物を下部に多く含む。 |
| 3層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | シルト質 | 灰黄褐色粘土を含む。炭化物を少量含む。 |
| 4層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を含む。 |
| 5層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | シルト質 | 炭化物を少量含む。 |
| 6層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 7層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 8層 | 褐色土 | 10YR4/4 | やや粘上質 | 明黄褐色軽石、灰黄褐色粘土をブロック状になりで少量に含む。(埋戻) |



CT-78



南ピット
土層注記

- | | | | | |
|----|------|---------|-------|--------------|
| 1層 | 灰褐色土 | 10YR3/1 | やや粘上質 | 灰黄褐色粘土を少量含む。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 10YR2/1 | やや粘上質 | 灰黄褐色粘土を含む。 |
| 3層 | 黒褐色土 | 10YR2/1 | やや粘上質 | 灰黄褐色粘土を少量含む。 |



図42 第219号住居跡(1)

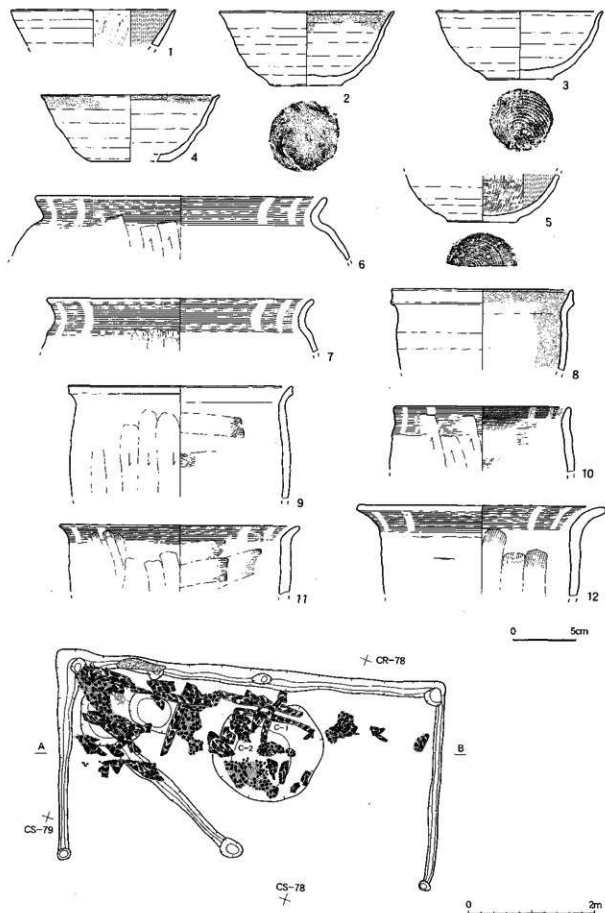


図43 第219号住居跡(2)・出土遺物

表52 第219号住居跡出土土器観察表（土師器）

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
43-1	土師器	坏	(13.0)	(2.9)	—	WR	G B	20	覆土			—
43-2	土師器	坏	13.8	5.9	5.6	WR	G B	70	ビット		右回転、内面口縁スス付着	—
43-3	土師器	坏	(13.2)	5.4	5.2	WRC針	G C	50	ビット		右回転	—
43-4	土師器	坏	(14.0)	5.3	(6.4)	WR針	H B	50	ビット		面欠切、内面口縁スス付着	—
43-5	土師器	坏	—	(3.8)	5.4	W	G B	40	ビット		右回転、黒斑	—
43-6	土師器	甕	(23.0)	(5.0)	—	WRS	E B	10	ビット			—
43-7	土師器	甕	(21.0)	(4.2)	—	WRS	H B	20	ビット		内面スス付着	—
43-8	土師器	甕	(14.2)	(6.4)	—	WRC針	E B	30	ビット			—
43-9	土師器	甕	(17.8)	(8.8)	—	WRS針	E B	20	ビット		内面口縁スス付着	—
43-10	土師器	甕	(13.8)	(5.1)	—	WRS	H B	40	ビット			—
43-11	土師器	甕	(19.0)	(5.3)	—	WRS	C B	10	ビット			—
43-12	土師器	甕	(19.4)	(7.0)	—	WRS	H B	20	ビット			—

第2節 溝跡

第204号溝跡（図44、表53）

〔位置・確認〕 CV-52・53、CW-51～53、CX-53グリッドに位置する。第V～VI層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕 平面形は直線的で、長さは13mほどである。溝の中は確認面で0.08～0.50m、底面で0.06～0.26mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは0.7～30.7cmである。底面には凹凸があり、両端から中央部に向かって傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りから下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、平安時代の土師器（甕等）、須恵器（坏等）が10片（85g）出土した。

表53 第204号溝跡出土土器観察表（土師器、須恵器）

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
44-1	土師器	甕	—	(3.0)	—	S	E B	—	覆土			—
44-2	須恵器	坏	—	(1.8)	(5.6)	W針	F A	30	覆土		面欠切、外面一帯の火傷	—
44-3	須恵器	坏	—	—	—	W	K B	—	覆土			—

第205号溝跡（図44）

〔位置・確認〕 CM-44・45、CN-45・46、CO-46、CP-47、CQ-47・48、CR-48グリッドに位置する。第V～VI層上面で、黒褐色土と黒色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕 平面形は直線的で、長さは28mほどである。溝の中は確認面で0.20～0.62m、底面で0.06～0.30mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは5.1～69.1cmである。底面には凹凸があり、全体としてかなり北東に傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、平安時代の土師器等が2片（30g）出土した。

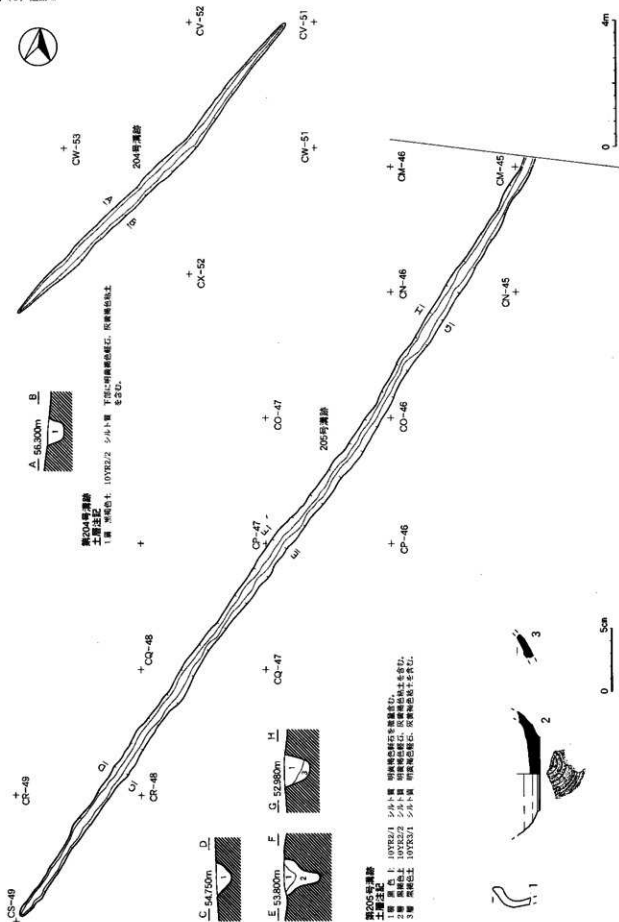


図44 第204・205号溝跡、第204号溝跡出土遺物

第207号溝跡 (図45)

[位置・確認] CR-43、CS-43・44グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 平面形はかなり直線的で、長さは4mほどである。溝の中は確認面で0.42～0.70m、底面で0.14～0.40mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは7.7～28.8cmである。底面には凹凸があり、全体として少し北東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

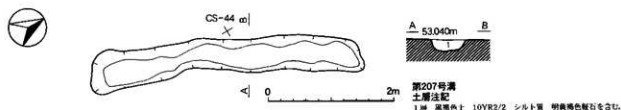


図45 第207号溝跡

第209号溝跡 (図46、表54)

[位置・確認] CK～CN-55、CO～CP-54・55、CQ～CV-54、CW-53・54、CX-53グリッドに位置する。第IV～VI層上面で、黒褐色土と黒色土の落ち込みとして確認したが、掘り込み面は第I層中にある。

[形態・規模] 調査区域を少し蛇行しながら南北に横断しており、両端とも調査区域外に延びている。全体形は分からないが、精査した長さ約55mの部分はかなり直線的である。溝の中は確認面で0.38～1.10m、底面で0.04～0.60mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは10.5～74.4cmである。底面には凹凸があり、中央部（グリッドのCQライン付近）が最も高く、そこから南北に向かってかなり傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と黒色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を下部に多く含む。全体的には自然堆積した状態を示すと考えられるが、遺構南側の堆積土下部には、水の影響がみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器（坏・甕等）が27片（545g）出土した。（工藤 大）

表54 第209号溝跡出土土器観察表（土師器）

図面番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	土分析
46-1	土師器	甕	-	(7.8)	(8.6)	WR針	H	B	70	覆土		-
46-2	土師器	甕	-	(2.5)	-	WC針	E	A	-	覆土		-
46-3	土師器	坏	-	-	-	WR針	G	A	-	覆土	右回転	-

第214号溝跡 (図47、表55)

[位置・確認] CU-73～75、CV・CW-72・73グリッドに位置する。第III～IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第214号土坑の北側を切り、遺構の西側を第213号土坑、南東端部を第216号溝跡によ

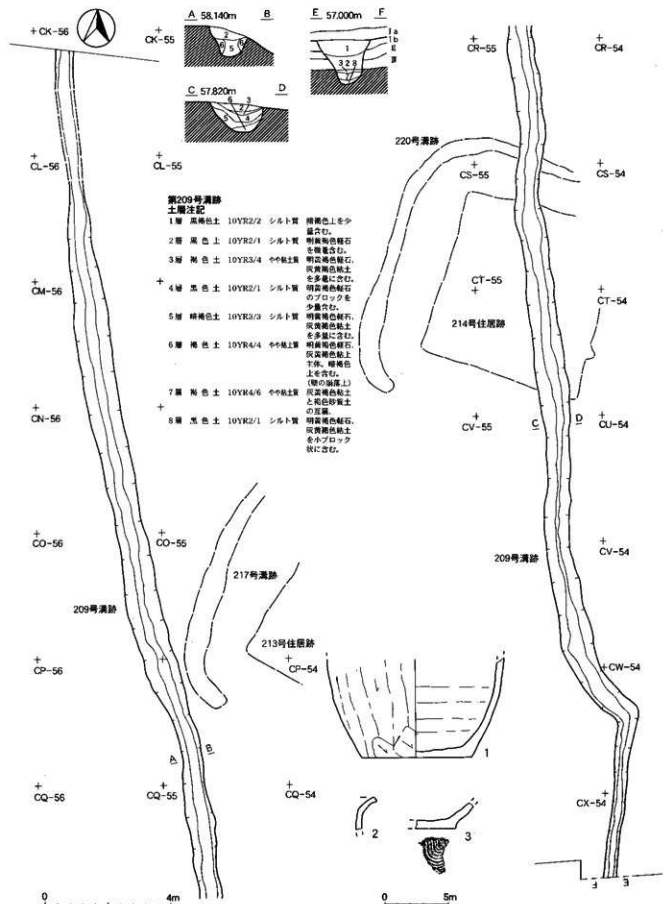


図46 第209号溝跡・出土遺物

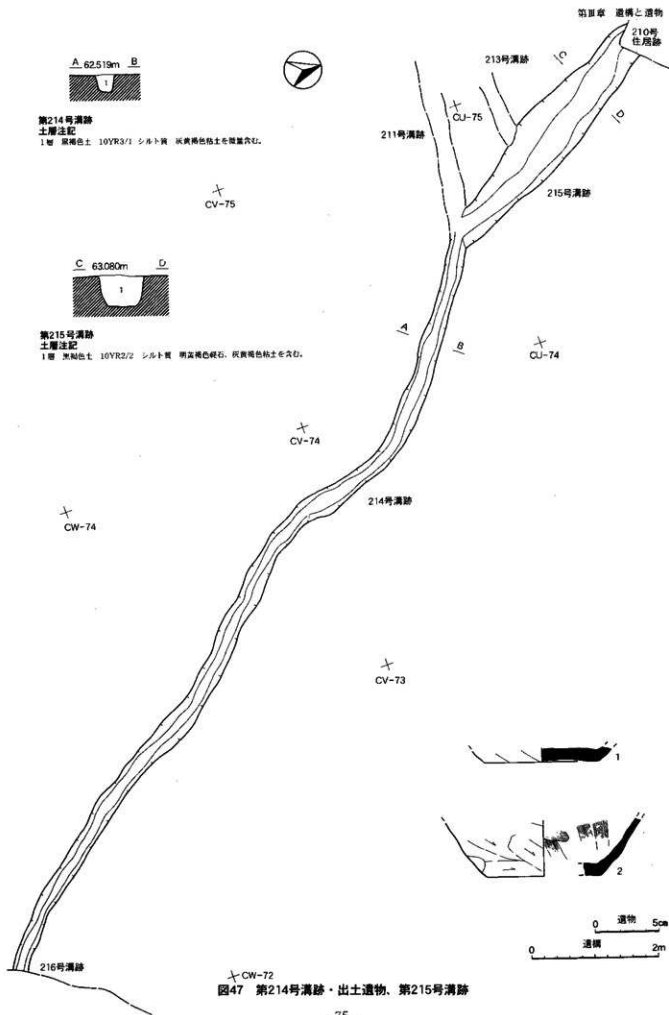


図47 第214号溝跡・出土遺物、第215号溝跡

って切られている。また第215号溝とも重複するが、新旧関係は不明である。

[形態・規模] 北西から南東方向に蛇行する、長さ約16mの部分を精査した。溝の中は確認面で0.20～0.42m、底面で0.06～0.24mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは18.9～31.6cmである。底面には凹凸があり、全体としてかなり南東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)を少量含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の須恵器等が19片(190g)出土した。須恵器(2)は、第211号溝跡出土の同一個体と接合した。

表55 第214号溝跡出土土器観察表(須恵器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土分析
47-1	須恵器	壺	-	(11)	(9.2)	W針	K	A	40	覆土	47-2と同一個体?	-
47-2	須恵器	壺	-	(4.4)	(3.0)	W針	K	A	20	覆土	47-1と同一個体?	-

第215号溝跡(図47)

[位置・確認] CT-74・75、CU-74グリッドに位置する。第Ⅲ～Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複関係] 第213号溝跡の東側を切り、遺構の北西側を第210号住居跡によって切られている。また第214号溝とも重複するが、新旧関係は不明である。

[形態・規模] 残存する長さ約4mの部分を精査したが、全体形は不明である。溝の中は確認面で0.26～0.98m、底面で0.10～0.40mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは20.1～49.1cmである。底面には凹凸があり、全体として少し南東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

(工藤 大)

第219号溝跡(図48、表56・57)

[位置・確認] CN～CP-42グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認したが、掘り込み面は第Ⅳ層より上位にある。

[重複関係] 第212号住居跡の中央部～北側を切っている。

[形態・規模] 西側の長さ約8mの部分を精査したが、遺構の東側は調査区域外に延びている。全体形は分からないが、残存部分から判断して隅丸方形に近い形態になるようである。溝の中は確認面で0.76～0.54m、底面で0.24～0.38mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは8.6～48.0cmで、底面には凹凸がある。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を下部に多く含む。明黄褐色軽石と灰黄褐色粘土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

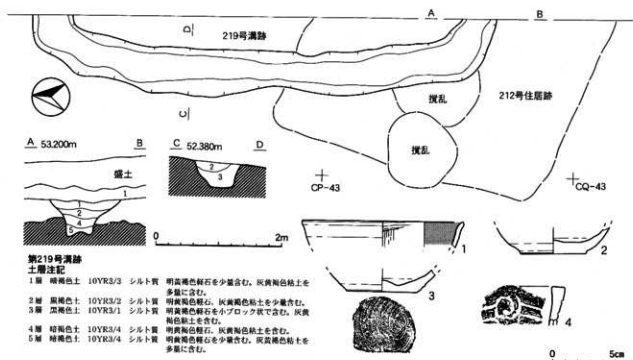


図48 第219号溝跡・出土遺物

〔出土遺物〕 堆積土から、平安時代の土師器（坏等）、縄文時代後期の土器（鉢）が8片（210g）出土した。（上藤 大）

表56 第219号溝跡出土土器観察表（土師器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
48-1	土師器	坏	(12.8)	(2.0)	-	W	H B	B	10	覆土	外濠タール状物質付着	-
48-2	土師器	坏	-	(2.1)	(5.0)	WC針	H B	B	60	覆土	右回転、外濠ス付着	-
48-3	土師器	坏	-	(1.8)	(5.6)	W針	E B	B	50	覆土	右回転	-

表57 第219号溝跡出土土器観察表（縄文）

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	胎土分析
48-4	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 口縁部	沈線文	-	-

第3節 土坑

第201号土坑（図49、表58）

〔位置・確認〕 CV-47・48グリッドに位置する。第VI層上面で、暗褐色土と黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

〔形態・規模〕 遺構の東側は一部攪乱を受けているが、平面形は確認面、底面とも不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.29m、短径2.36m、底面で長径2.92m、短径2.14mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは17.6～54.2cmで、壁はかなり急角度で掘り込まれている。底面には緩い凹凸があり、全体として少し南に傾斜している。

〔堆積土〕 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに灰黄褐色粘土（第VI層）を多く含む。灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、平安時代の土師器（坏・甕等）が39片（760g）出土した。

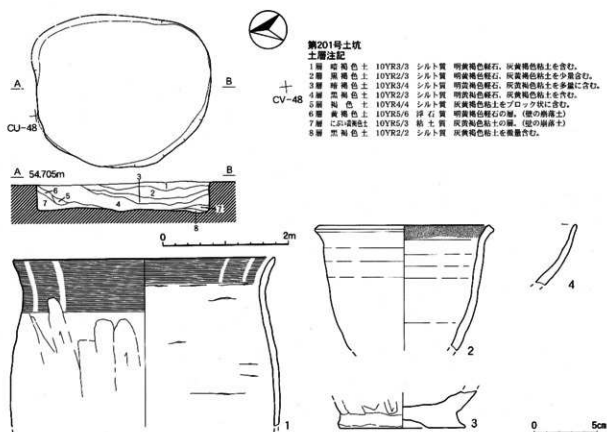


図49 第201号土坑・出土遺物

表58 第201号土坑出土土器観察表(土師器)

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	胎土分析
49-1	土師器	甕	(20.8)	(13.3)	-	RCS	G	B	40	覆土	-	-
49-2	土師器	甕	(13.6)	(9.9)	-	WC	E	B	30	覆土	-	-
49-3	土師器	甕	-	(2.9)	(10.0)	WCS	G	B	50	覆土	砂底	-
49-4	土師器	坏	-	(4.8)	-	S	H	A	-	覆土	内外面黒斑?	-

第202号土坑(図50)

[位置・確認] CV-50, CV-50-51グリッドに位置する。第VI層上面で、暗褐色土の落ち込み(方形)として確認した。

[形態・規模] 遺構の東側は既に削平され残っていないが、平面形は確認面、底面とも不整な方形となっている。遺構全体の大きさは分からないが、精査した西側の壁長は確認面で2.58m、底面で1.4mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面から底面

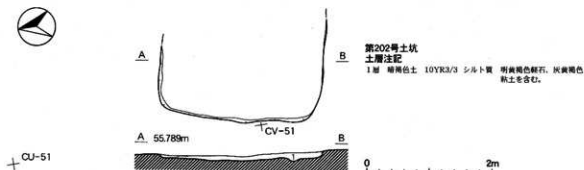


図50 第202号土坑

までの壁高は2.7～26.2cmである。底面には凹凸があり、全体としてやや北東に傾斜している。

【堆積土】暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を含む。

【出土遺物】堆積土から、平安時代の土師器等が4片（60g）出土した。

第203号土坑（図51、表59）

【位置・確認】CW・CX-45グリッドに位置する。第V層上面で、暗褐色土の落ち込み（不整形円形）として確認したが、掘り込み面は第IV層より上位にある。

【形態・規模】遺構の南側は一部調査区域から外れているが、平面形は確認面、底面とも不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径約1.32m、短径1.14m、底面で長径約1.04m、短径0.92mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは35.5～57.5cmで、全体的に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜も緩くなっている。底面には凹凸があり、全体としてやや西に傾斜している。

【堆積土】全体的には暗褐色土と黒褐色土を主体とする自然堆積とみられるが、明黄褐色軽石（第V層）のほか、下部に焼土と炭化物を少量含む。

【出土遺物】堆積土（1）から、平安時代の土師器（甕等）が14片（105g）出土した。このほか底面の東側2箇所、炭化物の拡がりを検出した。

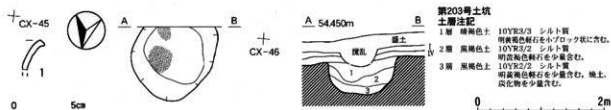


図51 第203号土坑・出土遺物

表59 第203号土坑出土土器観察表（土師器）

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
51-1	土師器	甕	-	-	-	WC計	H	B	-	覆土		-

第204号土坑（図52、表60）

【位置・確認】CV-46・47グリッドに位置する。第V層上面で、褐色土と黒褐色土の落ち込み（不整形円形）として確認した。

【形態・規模】平面形は確認面、底面ともやや不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径3.50m、短径3.18m、底面で長径2.72m、短径2.62mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは3.6～66.3cmで、壁の傾斜はかなり緩くなっている。底面には大きな凹凸があり、全体としてかなり北東に傾斜している。

【堆積土】堆積土の下部は、黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を含む。上部（1・2層）は褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）のほか、炭化物と多量の焼土を含む。したがって自然埋没により凹地となった後で、人為的な起因による堆積があったとみられる。

【出土遺物】堆積土から、平安時代の土師器（坏・甕等）が89片（980g）出土した。このほか底面の南側壁寄り、焼土の拡がりを検出した。

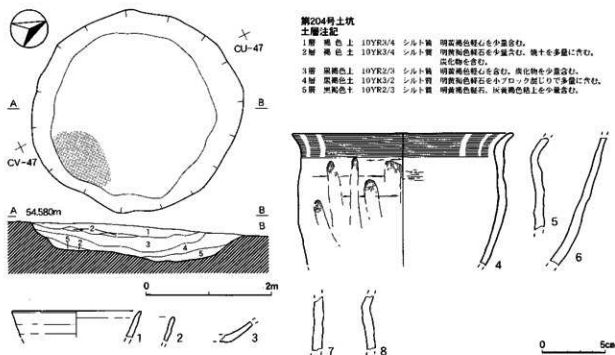


図52 第204号土坑・出土遺物

表60 第204号土坑出土土器観察表(土師器)

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土層
52-1	土師器	杯	(10.2)	(2.1)	-	W針	H B	10	覆土			-
52-2	土師器	杯	-	(1.9)	-	W針	H B	-	覆土			-
52-3	土師器	杯	-	(1.6)	-	WC	E B	-	覆土	跡未切		-
52-4	土師器	壺	17.4	(10.5)	-	WS針	H B	80	覆土	内面口縁スス付着。外面粘土付着		-
52-5	土師器	壺	-	-	-	WS	E B	-	覆土	外面粘土付着		-
52-6	土師器	壺	-	-	-	BRS	H B	-	覆土	外面粘土付着		-
52-7	土師器	壺	-	-	-	RS	H B	-	覆土			-
52-8	土師器	壺	-	-	-	RCS	H B	-	覆土	外面粘土付着		-

第205号土坑(図53、表61)

[位置・確認] CW・CX-46・47グリッドに位置する。第V層上面で、暗褐色土と黒褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[形態・規模] 遺構の南側過半部は調査区域から外れているが、平面形はかなり不整形な円形ないし楕円形となるようである。遺構全体の大きさは分からないが、確認面で径2.24m以上、底面で径0.94m以上となっている。遺構は基本十層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは30.3~49.4cmで、全体的に壁面の崩れがみられ、壁の傾斜もかなり緩くなっている。

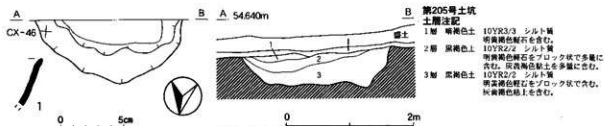


図53 第205号土坑・出土遺物

底面には著しい凹凸がある。

〔堆積土〕 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、平安時代の須恵器（1）が1片（10g）出土した。

表61 第205号土坑出土土器観察表（須恵器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土層
53-1	須恵器	杯	-	(3.7)	-	W針	F	B	-	覆土		-

第206号土坑（図54）

〔位置・確認〕 CV-42グリッドに位置する。第V層上面で黒褐色土の落ち込み（円形）として確認した。

〔重複関係〕 遺構の北側を、第206号住居跡によって切られている。

〔形態・規模〕 残存する南側の過半部を精査したが、平面形は確認面、床面とも円形ないし楕円形になるようである。大きさは長径が確認面で約1.06m、底面で約0.72mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは8.3～24.7cmで、底面には凹凸がある。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とし、少量の明黄褐色軽石（第V層）のほか、多量の炭化物和焼土を含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

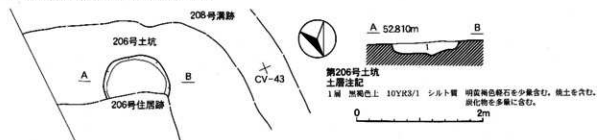


図54 第206号土坑

第207号土坑（図55）

〔位置・確認〕 CS・CT-43グリッドに位置する。第V層上面で、暗褐色土と黒褐色土の落ち込み（方形）として確認した。

〔形態・規模〕 平面形は確認面、底面とも隅丸方形に近い形態となっている。大きさは確認面で長径0.88m、短径0.84m、底面で長径0.70m、短径0.66mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは5.0～19.1cmで、壁の傾斜は緩くなっている。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）のほか、炭化物を含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

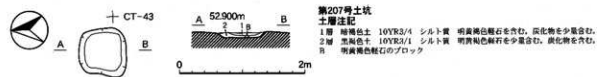


図55 第207号土坑

第208号土坑(図56)

[位置・確認] CP-65グリッドに位置する。第VI層上面で、黒褐色土の落ち込み(円形)として確認した。

[形態・規模] 遺構の北東側は一部攪乱を受けているが、平面形は確認面、底面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.50m、短径1.34m、底面で長径0.86m、短径0.9mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは18.4~44.5cmで、壁の傾斜はかなり緩くなっている。底面は、中央部が凹んだ状態になっている。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)のほか炭化物を含む。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器等が3片(35g)出土した。

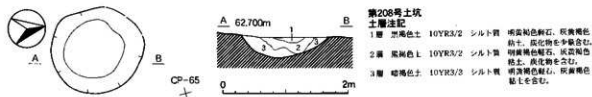


図56 第208号土坑

第209号土坑(図57)

[位置・確認] CP-65・66グリッドに位置する。第VI層上面で、黒褐色土の落ち込み(不整楕円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、底面とも不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径0.90m、短径0.68m、底面で長径0.68m、短径0.14mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは14.0~70.9cmで、壁の傾斜はかなり緩くなっている。底面の東側には、径約0.26cm、深さ70.9cmの小ピットがみられる。

[堆積土] 黒褐色土と褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器等が4片(65g)出土した。

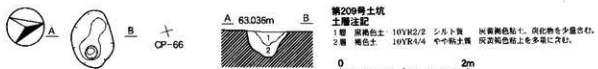


図57 第209号土坑

第210号土坑(図58、表62)

[位置・確認] CQ-63・64グリッドに位置する。第V層上面で、暗褐色土の落ち込み(不整楕円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面で不整楕円形、底面ではほぼ円形となっている。大きさは確認面で長径0.86m、短径0.52m、底面で長径0.42m、短径0.36mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘

り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは32.5～48.0cmで、壁の傾斜はかなり緩くなっている。底面は西に傾斜している。

〔堆積土〕 暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、縄文後期土器等が5片（245g）出土した。縄文土器（1）は大津第7群土器であり、CV-60・64グリッド出土の同一個体と接合した。

表62 第210号土坑出土土器観察表（縄文）

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	出土層
58-1	Ⅳ-2 大津第7群土器	覆土	深鉢 胴部	磨消縄文(RL)・カニのハサミ状文・乙字文	内面に円状の割落痕	70

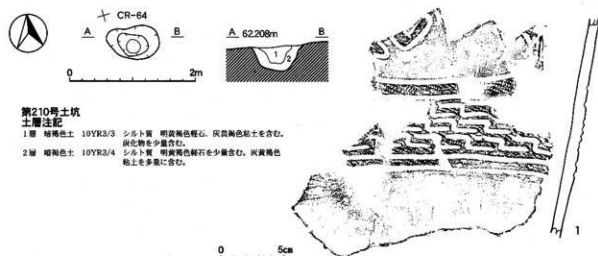


図58 第210号土坑・出土遺物

第211号土坑（図59）

〔位置・確認〕 CR-61グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（不整形）として確認した。

〔形態・規模〕 平面形は確認面、底面ともかなり不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径1.16m、短径1.34m、底面で長径1.28m、短径1.16mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは5.1～26.2cmで、壁の傾斜は南側を除いてかなり緩くなっている。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りから下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

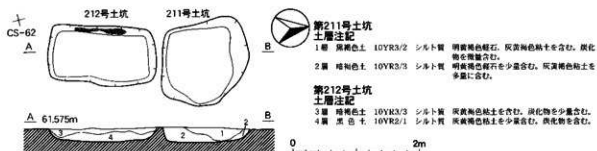


図59 第211、212号土坑

第212号土坑 (図59)

[位置・確認] CR-61グリッドに位置する。第V～VI層上面で、暗褐色土の落ち込み(長方形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、底面ともほぼ長方形となっている。大きさは確認面で長軸1.72m、短軸0.94m、底面で長軸1.52m、短軸0.70mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面とする。確認面からの深さは7.3～21.3cmで、壁の傾斜は全体的に緩くなっている。底面はほぼ平坦である。壁と底面には火熱を受けた痕があり、特に東側の壁面は還元状態で固化している。

[堆積土] 暗褐色土と黒色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)のほか炭化物を含む。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器等が5片(35g)出土した。

第213号土坑 (図60、表63)

[位置・確認] CT・CU-75グリッドに位置する。第III層上面で暗褐色土と黒褐色土の落ち込み(円形)として確認した。

[重複関係] 第214号土坑、第211号溝跡、第213号溝跡の一部を切っている。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも楕円形である。大きさは確認面で長径1.56m、短径1.26m、

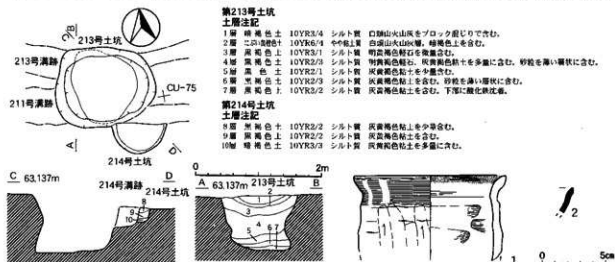


図60 第213、214号土坑・出土遺物

底面で長径1.24m、短径1.00mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは51.9～93.4cmである。全体的に壁面の崩れが目立ち、壁の一部は底面が確認面より外側に張り出すフラスコ形になっている。底面は中央部が少し凹んでいる。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とし、壁面の崩落による灰黄褐色粘土（第VI層）を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられるが、最下部には砂が層状に混入し、酸化鉄が沈着している。また堆積土上部には、埋没過程で降下した白頭山火山灰の層（2層）もみられる。

〔出土遺物〕堆積土から、平安時代の土師器（甕）等が5片（110g）出土した。

表63 第213号土坑出土土器観察表（土師器）

登録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
60-1	土師器	甕	(11.8)	(6.7)	-	WS計	E	B	20	覆土		-

第214号土坑（図60、表64）

〔位置・確認〕CU-75グリッドに位置する。第IV層上面で黒褐色土の落ち込み（半円形）として確認した。

〔重複関係〕遺構の北側を、第213号土坑によって切られている。

〔形態・規模〕平面形は確認面、床面とも円形ないし楕円形である。大きさは確認面で長径約0.88m、底面で短径約0.46mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは17.0～33.3cmで、底面には凹凸がある。

〔堆積土〕黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕堆積土から、平安時代の須恵器（坏）等が1片（5g）出土した。

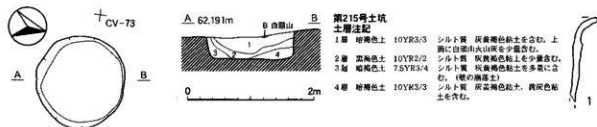
表64 第214号土坑出土土器観察表（須恵器）

登録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	胎土分析
60-2	須恵器	坏	-	-	-	W計	C	B	-	覆土		-

第215号土坑（図61、表65）

〔位置・確認〕CU・CV-72グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土の落ち込み（円形）として確認した。

〔形態・規模〕平面形は確認面、床面ともほぼ円形である。大きさは確認面で長径1.46m、短径1.46m、底面で長径1.30m、短径1.22mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層



を底面としている。確認面からの深さは23.7～44.9cmで、壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。底面には緩い凹凸がある。

[堆積土] 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに灰黄褐色粘土(第VI層)を多く含む。堆積土は自然堆積した状態とみられるが、堆積土上面に埋没過程で降下した白頭山火山灰を含む。

[出土遺物] 堆積土から、平安時代の土師器(甕)等が42片(300g)出土した。

表65 第215号土坑出土土器観察表(土師器)

図番番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土分析
61-1	土師器	甕	-	(6.7)	-	WS針	H	B	-	覆土		-

第217号土坑(図62)

[位置・確認] CX・CY-72グリッドに位置する。第IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。掘り込み面は第IV層より上位にある。

[形態・規模] 遺構の南側は調査区域外に延びているが、平面形は確認面、床面とも楕円形になるようである。大きさは短径が確認面で0.66m、底面で0.52mほどとみられる。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは46.1～55.4cmで、壁はかなり急角度で掘り込まれている。底面には少し凹凸がある。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)と黄灰色粘土(第VII層)を含む。全体的に自然堆積した状態を示すとみられるが、堆積土上部には、埋没過程で降下した白頭山火山灰を含む層(2層)や、第VII層の小ブロックを多量に含む不自然な層(3層)が堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

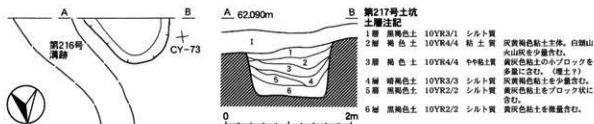


図62 第217号土坑

第218号土坑(図63)

[位置・確認] CX・CY-61グリッドに位置する。第IV層上面で、灰黄褐色土と暗褐色土の落ち込み(円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともやや不整な円形である。大きさは確認面で長径1.36m、短径1.20m、底面で長径0.50m、短径0.42mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは49.3～60.6cmで、壁面の崩れがみられ、全体的に壁の傾斜も緩くなっている。底面は、中央部が少し凹んだ状態になっている。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられるが、上部には埋没過程で降下した白頭山火山灰の層

(1層)が堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



図63 第218号土坑

第219号土坑 (図64)

[位置・確認] CX・CY-61グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み(円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも不整な円形である。大きさは確認面で長径1.54m、短径1.44m、底面で長径1.30m、短径1.06mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは10.9～29.3cmで、全体的に壁の傾斜が緩くなっている。底面にはかなり凹凸がある。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)の小ブロックを多量に含む。堆積土は人為的な起因による埋土とみられ、底面直上には薄い黒色土が堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

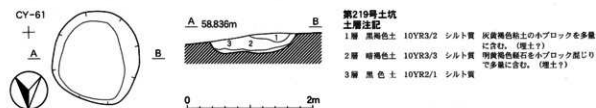


図64 第219号土坑

第220号土坑 (図65)

[位置・確認] CR-71・72グリッドに位置する。第V層上面で、暗褐色土の落ち込み(円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.84m、短径1.76m、底面で長径1.60m、短径1.42mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは29.6～70.2cmで、全体的に壁面の崩れがみられ、北側を除いて壁の傾斜は緩くなっている。底面には凹凸があり、全体として少し北に傾斜している。

[堆積土] 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)を下部に多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

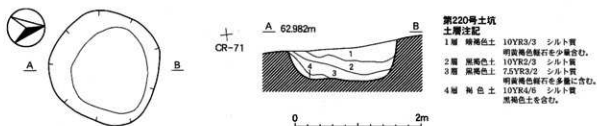


図65 第220号土坑

第221号土坑 (図66)

〔位置・確認〕 CR-70グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土の落ち込み（方形）として確認した。

〔形態・規模〕 遺構の南側（斜面下方）は削平され残っていないが、平面形は確認面、底面とも隅丸方形に近い形態となるようである。大きさは確認面で0.94m、底面で0.26mほどである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは7.5～11.7cmで、底面は南に傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）のほか、焼土と多量の炭化物を含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

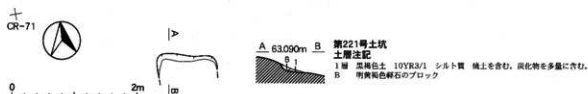


図66 第221号土坑

第222号土坑 (図67、表66)

〔位置・確認〕 CX・CY-62グリッドに位置する。第V層上面で暗褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

〔重複関係〕 第216号住居跡の北東壁を、一部切っている。

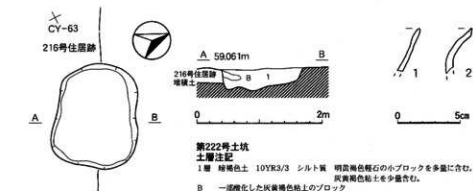


図67 第222号土坑・出土遺物

〔形態・規模〕平面形は確認面、床面とも不整楕円形である。大きさは長径が確認面で1.86m、底面で1.73m、短径が確認面で1.39m、底面で1.19mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは7.8～29.8cmである。底面には凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）のブロックを多量に含む。堆積土は、人為的に埋めたものとみられる。

〔出土遺物〕堆積土から、平安時代の土師器（甕）等が5片（50g）出土した。

表66 第222号土坑出土土師器観察表（土師器）

図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備 考	出土所
67-1	土師器	杯	—	(3.4)	—	W針	L	B	—	覆 土	内外面黒化処理、37-11と同一個体?	—
67-2	土師器	甕	—	—	—	WRS針	E	B	—	覆 土	—	—

第224号土坑（図68）

〔位置・確認〕CN・CO-70グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土の落ち込み（長方形）として確認した。

〔形態・規模〕平面形は確認面、底面ともほぼ長方形となっている。大きさは確認面で長軸2.18m、短軸1.24m、底面で長軸1.94m、短軸1.20mである。遺構は基本土層の第V層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは6.0～18.0cmで、壁の傾斜は全体的に緩くなっている。底面には緩い凹凸があり、全体として南西に傾斜している。壁と底面には火熱を受けた痕があり、特に北西側と南東側の壁面はかなり強く焼けている。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）を壁寄りに多く含む。このほか、全体的に炭化物を少量含む。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

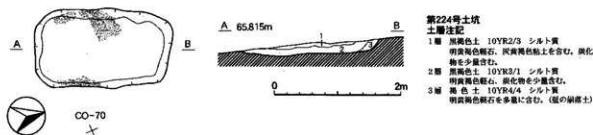


図68 第224号土坑

第225号土坑（図69）

〔位置・確認〕CO・CP-69グリッドに位置する。第V層上面で、黒褐色土の落ち込み（不整楕円形）として確認した。

〔形態・規模〕平面形は確認面、床面ともかなり不整な楕円形となっている。大きさは確認面で長径2.12m、短径1.70m、底面で長径1.80m、短径1.48mである。遺構は基本土層の第V～VI層まで掘り込んで作られ、第V・VI層を底面としている。確認面からの深さは10.0～36.0cmで、全体的に壁

面の崩れがみられ、壁の傾斜も緩い。底面には極端な凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)のほか炭化物を含む。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

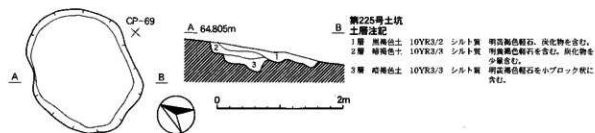


図69 第225号土坑

第226号土坑(図70)

[位置・確認] CI-70グリッドに位置する。第VI層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径1.56m、短径1.42m、底面で長径1.44m、短径1.42mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは10.7~47.9cmである。遺構の南壁側では一部底面が確認面より外側に張り出すフラスコ形になっているが、他の部分では壁の上部が開く形態となっている。底面には少し凹凸があり、全体としてやや東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を壁寄りに多く含む。明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)の混入は壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

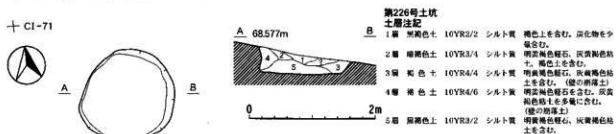


図70 第226号土坑

第227号土坑(図71)

[位置・確認] CL-68グリッドに位置する。第VI層上面で暗褐色土の落ち込み(半円形)として確認した。

[重複関係] 遺構の北東側を、第217号住居跡によって切られている。

[形態・規模] 残存する部分の平面形は、不整形円形となっている。大きさは確認面で径0.71mほどである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは

29.5～60.4cmである。

【堆積土】暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

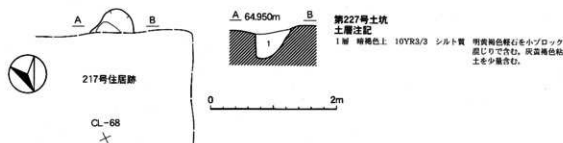


図71 第227号土坑

第228号土坑（図72）

【位置・確認】CI-80・81グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土の落ち込み（長方形）として確認した。

【形態・規模】平面形は確認面、底面ともほぼ長方形となっているが、西側の隅はかなり円みをもっている。大きさは確認面で長軸2.04m、短軸1.20m、底面で長軸1.88m、短軸1.12mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは1.3～34.0cmで、壁はかなり急な角度で掘り込まれている。底面には著しい凹凸があり、全体としてやや南東に傾斜している。壁と底面には火熱を受けた痕があり、特に南西側の底面は焼け方が顕著である。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）のほか、焼土と多量の炭化物を含む。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

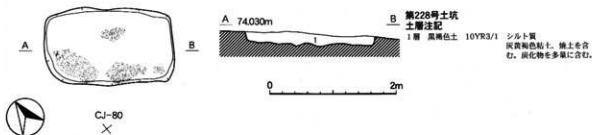


図72 第228号土坑

第229号土坑（図73・74、表67）

【位置・確認】CL-83・84グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土と褐色土の落ち込み（不整円形）として確認した。

【形態・規模】平面形は確認面、床面ともやや不整な円形となっている。大きさは確認面で長径1.90m、短径1.84m、底面で長径2.04m、短径1.84mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは117.3～164.3cmである。全体的に底面が確認

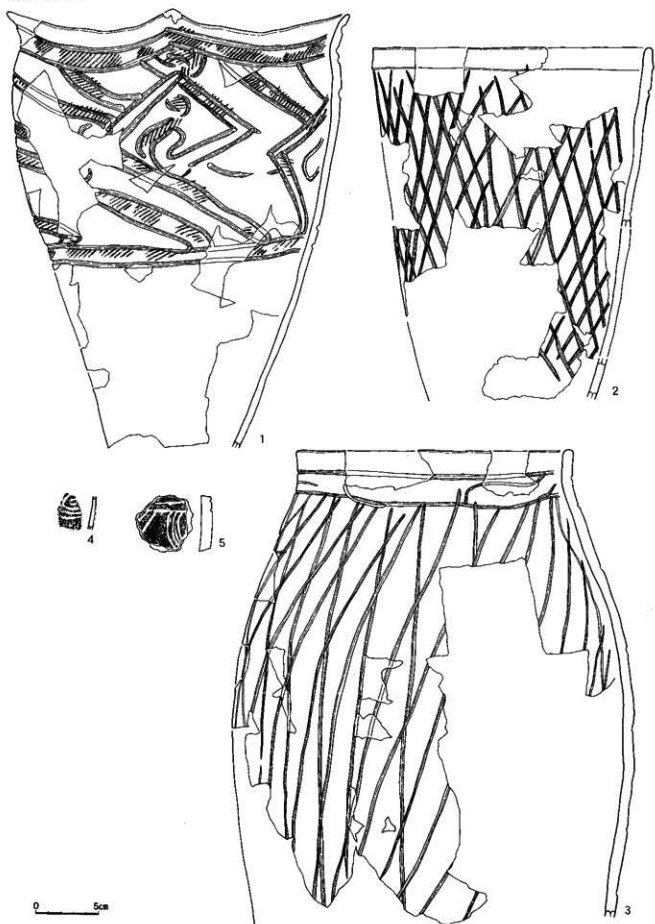


図73 第229号土坑出土遺物

面より外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形を呈す。底面は、中央部がかなり凹んだ状態になっている。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)を壁寄りから下部に多く含む。灰黄褐色粘土(第VI層)の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、復元土器3個体を含む縄文時代後期の土器(深鉢等)が109片(2,280g)出土した。

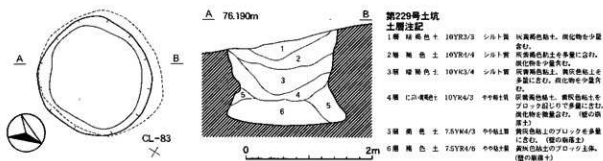


図74 第229号土坑

表67 第229号土坑出土土器観察表(縄文)

図版番号	分類	層位	器形	文様	備考	数量(片)
73-1	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 口縁~胴部	磨消縄文(点)	内外面に黒色物質の付着と円形の割痕	31
73-2	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 口縁~胴部	沈線文・網目状文	外面に黒色物質の付着 内面に円形の割痕	28
73-3	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 口縁~胴部	沈線文・網目状文	外面に黒色物質付着	26
73-4	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	沈線文	—	—
73-5	IV-1 十層内1式	覆土	深鉢 胴部	沈線文	外面に黒色物質付着	—

第230号土坑 (図75)

[位置・確認] CI-85・86グリッドに位置する。第VI層上面で、暗褐色土の落ち込み(不整形円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともほぼ円形になっている。大きさは確認面で長径1.62m、短径1.56m、底面で長径1.62m、短径1.56mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは125.0~159.0cmである。全体的に壁は垂直に近い角度で掘り込まれているが、底面が確認面より少し外側に張り出して、断面がフラスコ形になる部分もある。底面はほぼ平坦であるが、全体としてやや北東に傾斜している。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)を壁寄りから下部に多く含む。灰

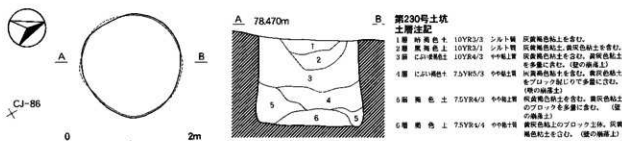


図75 第230号土坑

黄褐色粘土(第VI層)の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第231号土坑(図76)

[位置・確認] CL・CM-80・81グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径2.68m、短径2.50m、底面で長径2.44m、短径2.28mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは132.8~208.5cmである。西側の一部を除いて、底面が確認面より外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。底面には緩い凹凸があり、中央部に径約50cm、深さ7cmの小ピットが付いている。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第VI層)を壁寄りから下部に多く含む。灰黄褐色粘土(第VI層)の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、縄文土器等が10片(135g)出土した。このほか、底面に散在するような状態で礫が7個出土した。

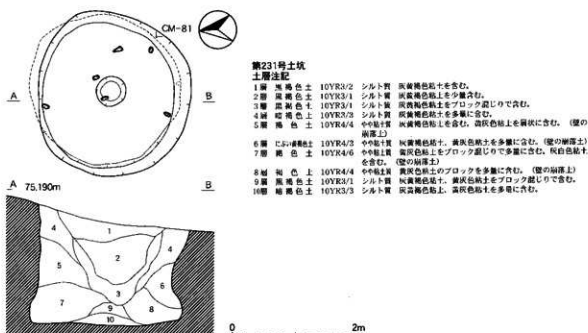


図76 第231号土坑

第232号土坑(図77)

[位置・確認] CH・CI-87・88グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土と褐色土の落ち込み(不整形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともやや不整形な円形となっている。大きさは確認面で長径1.60

m、短径1.54m、底面で長径1.58m、短径1.46mである。遺構は基本土層の第VII層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは101.1～141.6cmである。北西側の一部を除いて、底面が確認面より少し外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。底面には緩い凹凸がある。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りから下部に多く含む。灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、縄文土器等が10片（50g）出土した。



図77 第232号土坑

第233号土坑（図78）

[位置・確認] CG・CH-87グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み（長方形）として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、底面とも基本的には長方形であるが、北西隅寄りの壁は円く張り出す形態となっている。大きさは（張り出し部分を除き）確認面で長軸2.34m、短軸1.18m、底面で長軸2.16m、短軸1.12mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは12.0～20.0cmで、全体的に壁はかなり急な角度で掘り込まれている。底面には凹凸があり、全体としてやや北に傾斜している。壁と底面には火熱を受けた痕があり、特に

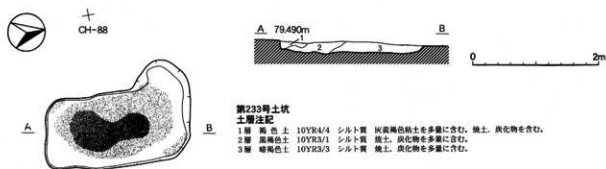


図78 第233号土坑

底面の中央部は広範囲に強く焼け、還元状態で固化した部分もある。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第Ⅵ層)のほか、焼土と炭化物を多量に含む。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第234号土坑(図79)

[位置・確認] CK-85グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で、暗褐色土とぶい黄褐色土の落ち込み(不整形円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも不整形円形となっている。大きさは確認面で長径1.88m、短径1.72m、底面で長径1.86m、短径1.80mである。遺構は基本土層の第Ⅶ層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは100.0～120.0cmである。遺構の南側を除いて、底面が確認面より外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。南側の壁は、上部が開く形態である。底面は、中央部が凹んだ状態になっている。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土(第Ⅵ層)を全体的に多く含む。灰黄褐色粘土(第Ⅵ層)の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積上から、縄文土器が1片(30g)出土した。

第235号土坑(図80)

[位置・確認] CJ-86・87グリッドに位置する。第Ⅳ層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込み(不整形円形)として確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面ともかなり不整形円形となっている。大きさは確認面で長径1.70m、短径1.48m、底面で長径1.72m、短径1.68mである。遺構は基本土層の第Ⅶ層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは52.5～109.4cmである。遺構の南西側を除いて、底面が確認面より外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。南西側の壁は、上部が開く形態である。底面は、中央部が凹んだ状態になっている。

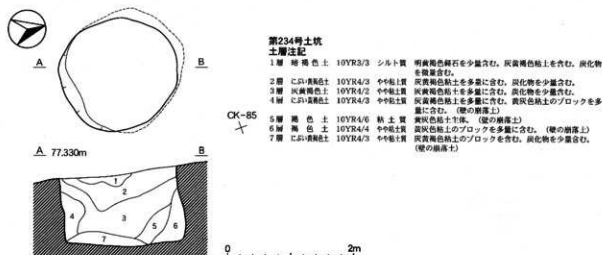


図79 第234号土坑

〔堆積土〕 暗褐色土と褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りから下部に多く含む。灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、縄文土器が1片（15g）出土した。

（工藤 大）

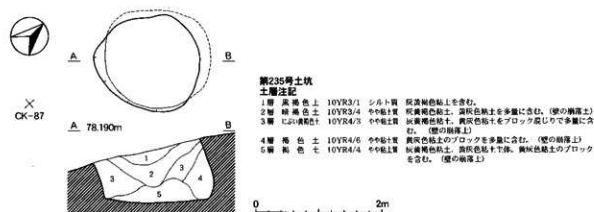


図80 第235号土坑

第4節 溝状土坑

第201号溝状土坑 (図81)

〔位置・確認〕 CP-60・61グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕 平面形は確認面、床面とも短い溝状の形態となっており、底面の両端部は少し膨らんでいる。大きさは確認面で長さ3.34m、幅0.68m、底面で長さ4.00m、幅0.36mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは78.7～111.8cmである。遺構の両端部では、底面が確認面より大きく外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。その他の側壁は、上部が開く形態である。底面には著しい凹凸があり、全体として中央部が凹んだ状態になっている。

〔堆積土〕 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りと下部に多く含む。灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみ

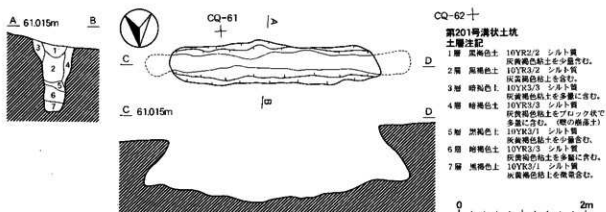


図81 第201号溝状土坑

られる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第202号溝状土坑 (図82、表68)

[位置・確認] CO・CP-60・61グリッドに位置する。第IV層上面で、黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

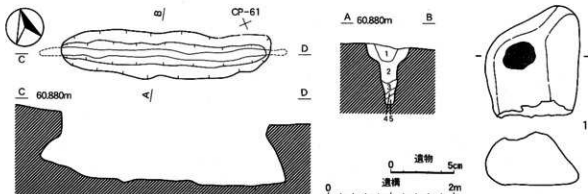
[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも短い溝状の形態となっている。大きさは確認面で長さ3.34m、幅0.74m、底面で長さ3.90m、幅0.14mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは95.0～100.4cmである。遺構の両端部では、底面が確認面より大きく外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。その他の側壁は、上部が開く形態である。底面には凹凸があり、全体としてかなり南東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)を下層に多く含む。明黄褐色軽石(第V層)と灰黄褐色粘土(第VI層)の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、凹石が1点出土した。

表68 第202号溝状土坑出土石器観察表

図録番号	分類	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	備考
82-1	凹石	覆土	8.9×7.6×4.2	3915	流紋岩	



第202号溝状土坑

土層表記

- | | | |
|-----------------|------|------------------------------|
| 1層 黒色土 10YR2/1 | シルト質 | 明黄褐色軽石を微量含む。 |
| 2層 黒褐色土 10YR2/2 | シルト質 | 明黄褐色軽石を少量含む。 |
| 3層 暗褐色土 10YR3/3 | シルト質 | 灰黄褐色粘土を少許含む。 |
| 4層 褐色土 10YR4/4 | 粘土質 | 灰黄褐色粘土のブロック状。黒褐色土を含む。(壁の崩落土) |
| 5層 暗褐色土 10YR3/3 | シルト質 | 灰黄褐色粘土を含む。 |

図82 第202号溝状土坑・出土遺物

第203号溝状土坑 (図83)

[位置・確認] CQ・CR-59・60グリッドに位置する。第IV層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも短い溝状の形態となっており、両端部は少し膨らんでいる。大きさは確認面で長さ3.00m、幅0.56m、底面で長さ2.70m、幅0.36mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは76.0～81.3cmである。

全体的に壁はかなり急な角度で掘り込まれ、少し上部が開く形態となっている。底面には緩い凹凸があり、全体として南東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）を壁寄りと下部に多く含む。明黄褐色軽石（第V層）と灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

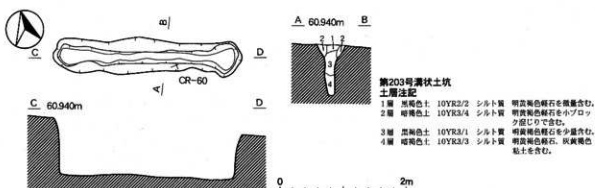


図83 第203号溝状土坑

第204号溝状土坑（図84）

[位置・確認] CI-77・78グリッドに位置する。第VI層上面で、黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] 平面形は確認面、床面とも短い溝状の形態で、底面の東端部は少し膨らんでいる。大きさは確認面で長さ2.54m、幅0.60m、底面で長さ3.14m、幅0.26mである。遺構は基本土層の第VI層まで掘り込んで作られ、同層を底面としている。確認面からの深さは77.0～108.5cmである。遺構の両端部では、底面が確認面より大きく外側に張り出すため、壁の断面はフラスコ形になっている。その他の側壁は、上部が開く形態である。底面には大きな凹凸があり、全体的にかなり東に傾斜している。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、灰黄褐色粘土（第VI層）を全体的に多く含む。灰黄褐色粘土（第VI層）の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

[出土遺物] 堆積土から、縄文土器等が8片（80g）出土した。

（工藤 大）

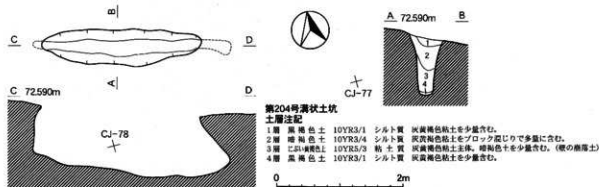


図84 第204号溝状土坑

第5節 屋外炉

第201号屋外炉（図85、表69）

〔位置・確認〕 CR-62グリッドに位置する。第IV層上面で、暗褐色土の落ち込みと炉内に埋設した土器を確認した。

〔形態・規模〕 遺構の北側は既に削平されていたが、不整な楕円形に浅く掘り込んだ底面の東壁寄り

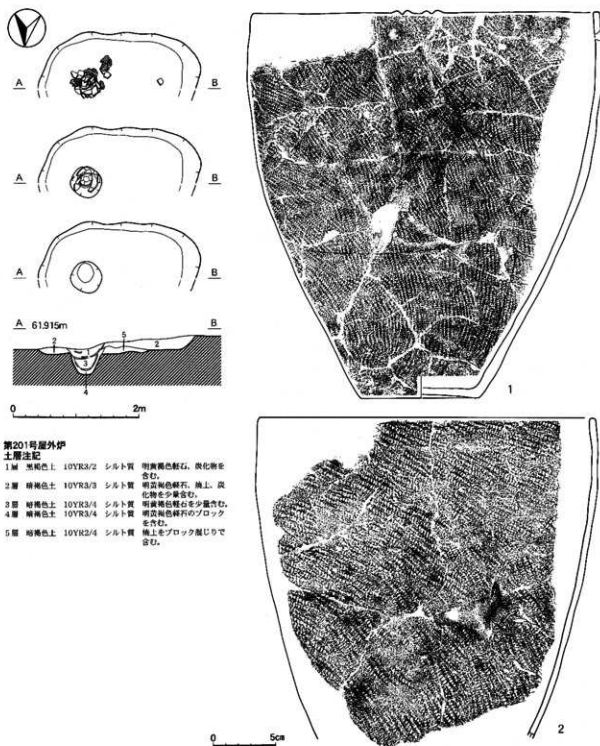


図85 第201号屋外炉・出土遺物

に、深鉢形土器を正立状態で埋設している。掘り込みの大きさは、長径が確認面で0.52 m、底面で0.34 mほどである。埋設した土器の上部からは、別個体の深鉢形土器が横転したような状態で出土した。

〔堆積土〕埋設した土器内の堆積土は、暗褐色土を主体とし明黄褐色軽石（第V層）を含む。土器周囲にみられる掘り込みの堆積土は、暗褐色土と黒褐色土を主体とし、明黄褐色軽石（第V層）のほか焼土と炭化物を含む。

〔出土遺物〕埋設土器（1）1個体と掘り込みの堆積土から、計128片（1,510g）の縄文時代晩期の土器が出土した。（工藤 大）

表69 第201号屋外炉出土土器観察表（縄文）

図録番号	分類	層位	器形	文様	備考	出土所
85-1	V	埋設炉	深鉢 口縁~底部	B突起・縄文(凡)	焼成後の穿孔	83
85-2	V	埋設炉	深鉢 口縁~胴部	縄文(凡)		82

第6節 焼土

第201号焼土（図86）

〔位置・確認〕CR-59・60グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

〔形態・規模〕第IV層で2箇所に分かれて広がるが、平面形はいずれも不整な楕円形である。西側の焼土は長径1.16 m、短径0.68 mの範囲に、最厚約8 cmで分布する。東側の焼土は長径0.54 m、短径0.34 mの範囲に、薄く分布している。どちらの焼土にも、はっきりした掘り込みは認められなかった。

〔出土遺物〕焼土中から、平安時代の土師器等が2片（210g）出土した。

第202号焼土（図86）

〔位置・確認〕CR-64グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

〔形態・規模〕不整円形の暗褐色土混じりの焼土が、長径0.60 m、短径0.50 mの範囲に広がっている。第IV層に最厚約10 cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

第203号焼土（図86、表70）

〔位置・確認〕CR-70グリッドに位置する。第I層中で確認した。

〔形態・規模〕不整楕円形の暗褐色土混じりの焼土が、長径0.90 m、短径0.50 mの範囲に広がっている。第I層中に最厚約16 cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。

〔出土遺物〕焼土中から、平安時代の土師器等が9片（200g）出土した。

表70 第203号焼土出土土器観察表（土師器）

図録番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	層位	備考	出土所
86-1	土師器	杯	-	(3.8)	5.4	WC針	E	B	60	覆土	右回転、内面黒斑	-

第204号焼土（図86）

〔位置・確認〕CW-64グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の焼土が、長径1.04m、短径0.82mの範囲に拡がっている。第IV層に薄く分布しており、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第205号焼土 (図86)

[位置・確認] CU-57グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の焼土が、長径0.46m、短径0.44mの範囲に拡がっている。第IV層に薄く分布しており、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第206号焼土 (図86)

[位置・確認] CX-65グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の焼土が、長径0.50m、短径2.60mの範囲に拡がっている。第IV層に薄く分布しており、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第207号焼土 (図86)

[位置・確認] CL-66グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の炭化物を含む焼土が、長径0.70m、短径0.42mの範囲に、最厚約4cmで分布している。焼土の下には、不整形円の掘り込みは認められた。掘り込みの大きさは長径0.4m、短径0.24m、深さ10cmで、基本土層の第IV層を底面としている。底面には凹凸があり、やや南東に傾斜している。

[堆積土] 掘り込み内の堆積土は、灰黄褐色粘土(第VI層)を主体とし、暗褐色土を含む。

[出土遺物] 焼土中から、平安時代の土師器等が6片(430g)出土した。

第208号焼土 (図86)

[位置・確認] CX-54グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の焼土が、長径0.79m、短径0.60mの範囲に拡がっている。第IV層に最厚約8cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第209号焼土 (図86)

[位置・確認] CP-71グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

[形態・規模] 不整形円の焼土が、長径0.38m、短径0.22mの範囲に拡がっている。第IV層に薄く分布しており、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第210号焼土 (図86)

[位置・確認] CT-78グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認した。

[形態・規模] 不整楕円形の黒褐色土混じりの焼土が、長径1.00m、短径0.64mの範囲に拡がっている。第Ⅲ層に最厚約6cmで分布しているが、はっきりした掘り込みは認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

(工藤 大)

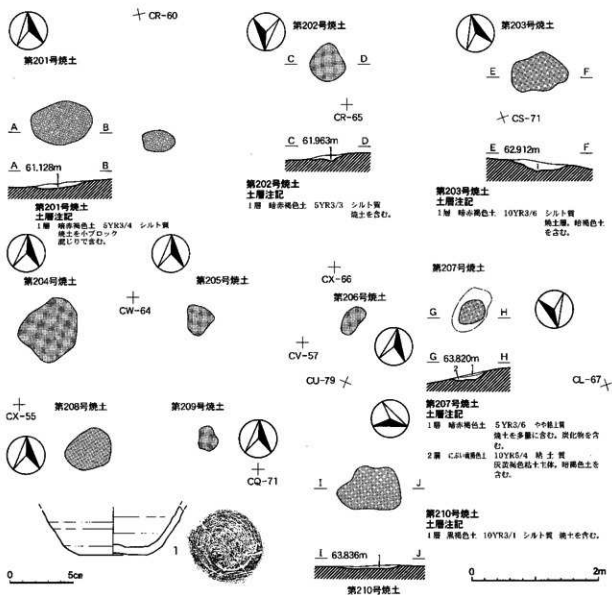


図86 第201～210号焼土、第203号焼土出土遺物

第IV章 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文・弥生・平安時代の土器、土製品、石器が出土した。大まかな傾向として、縄文時代の遺物が調査区西側に多いのに対し、平安時代の遺物はこの時期の遺構と重なるように調査区東側に多く、遺構外からの出土は極端に少ない。

第1節 縄文時代の土器・土製品

本遺跡においては、縄文時代の遺物の殆どが斜面上である55ライン以西に集中しており、比較的平坦な55ライン以東には少ない状況にある。これは、前年度に遺跡東側を調査した際に、縄文時代の遺物が僅かであったことから、縄文時代の主たる活動領域が調査区西側の傾斜面(中位段丘面上)であったことを裏付けるものと思われる。この時期の遺物は、後に平安時代の集落が形成されたことなどから全般的に遺存状態が悪く、数十m離れた地点同士の接合も多い。土器は、早期、前期、中期、後期、晩期のⅠ～Ⅴ期にわたって、6群7類に細別が可能であり、各時期とも既存の土器型式名に置き換えると一定のまとまりをみせることから、当遺跡における人間の活動時期が、それぞれ限定されていたことを窺わせる。

(1) 縄文土器(図87～96、表71)

I群土器 早期に比定されるもの(1・2)

1は、CT-61グリッド付近を中心に出土した。本来の器形は定かではないが、小波状口縁を有し尖底をなす深鉢形と思われ、口縁部はやや肥厚気味に作ることで、屈曲を意識した作りとなっている。胎土には、目立った繊維の混入は見当たらず、器面調整についても指頭圧痕が認められる他は、特徴的なものは観察されない。文様に関しては、施文を二枚貝の貝殻腹縁部分を用いて底部方向から刺突を加えていることから、基本的には土器を逆さに伏せた状態で行われたものと推定される。文様帯は上下二段に分割され、上段の口縁部文様帯は口縁波頂部から2本1組の貝殻腹縁文を垂下させることによって更に区分し、この間を3本の横位の貝殻腹縁文によって埋めている。口縁部は、文様帯の区画と呼応するように、粘土がやや厚く肥厚気味になることが特徴である。その他、口唇部にも連続する刺突を加えている。また、胴部文様帯は下端を3本の貝殻腹縁文で区切っており、その内部を5本1組の貝殻腹縁文をもって、鋸歯状のモチーフを描き出している。

2は、軟質で明瞭さに欠けるが、貝殻腹縁によると思われる条痕の他、筋が非常に細かい縄文が観察されるが、原体は判然としない。

II群1類土器 前期の円筒下層a式に比定されるもの(3・4)

2個体分出土した。胎土には繊維を多く含み、底面にも縄文が施されるものである。

II群2類土器 前期の円筒下層d式に比定されるもの(5～13)

口縁部に縄の側面圧痕が、胴部には単軸及び多軸絡条体の回転施文を行うものが多い。内面は平滑に仕上げられており、胎土への繊維の混入は少ない。

III群土器 中期に比定されるもの(14～18)

出土量はわずかであり、残存状態も良くないが、円筒上層d式に比定されるものが多い。

IV群1類土器 後期の上層内1式に比定されるもの(19～63)

本遺跡における縄文土器としては、数量が比較的多くまとまっているが、破片資料が多い。特徴としては、折り返し状口縁のもの（19～21）、無文地に沈線で文様を描くもの（22～47）、櫛状工具を使用したもの（48～50）、磨消縄文のもの（51～55）などに大きく分かれる。

これらの出土地点はほぼ二分され、一方は60～65ライン、もう一方は80～85ラインに集中する。傾向としては、前者が磨消縄文や櫛状工具を用いたものを含み沈線の幅が4～5ミリと太いものが多いのに対し、後者は無文地に幅2～3ミリの沈線で文様を施したものが多くみられるようである。また、前者は後述する大津第7群土器の分布範囲とほぼ一致する点が注目される。尚、十腰内1式と大津第7群土器との間には共通要素が多くみられることから、両者の区別が難しいものも存在しており、中には大津第7群土器としたほうがよいものが含まれている可能性がある。従って、両者の分類が完全なものではないことをお断りしておきたい。

IV群2類土器 後期の北海道系大津第7群土器に比定されるもの（64～74）

確認し得たもので11個体を数えたが、本来的には北海道南部に分布の中心が認められるもので、本県の十腰内1b式に併行するとされている。以下、各個体ごとに記載するが、本類の大きな特徴は、口縁部内外面の粘土紐の貼付及び弧状文、文様モチーフには乙字文や稲妻状文、櫛状工具による条線文や磨消縄文などがみられ、とりわけ製作過程においては、磨消縄文によるモチーフの下書きとして、事前に櫛状工具や半截竹管状工具による割付を行うことが極めて特徴的といえる（写真32）。この他、プロローションにおいても、口縁部の幅が広く外反し、肩部がやや張り、内面は丁寧なナデやミガキによって平滑に仕上げられているものが多い。尚、この他の詳細については考察を参照されたい。

64は、口縁の一部に櫛状工具で連続した刻み目を加えており、頸部にはこれに対応させるかの如く4本の短い沈線をあしらう。文様は櫛状工具でモチーフを描いた後、太い沈線で縁取りされる。外面には黒色物質の付着が認められた。

65は、幅狭な口縁部の直下に、櫛状工具で施文した後、太い沈線で縁取りを加えるものだが、その上に、断面方形の施文具で2段に連続した刺突を行うものである。

66は、細片のため本類に含めて良いのか躊躇するが、波状口縁の波頂部内外面を中心に粘土紐の貼付によって装飾されるものである。

67は、ゆるい波状口縁をなすもので、幅の狭い口縁部の内外面には粘土紐を貼り付ける。全体の文様は櫛状工具で施文した後、太い沈線で縁取りを加える。肩部文様帯には大柄な鎌の手が、胴部文様帯は破損の為よく判らないが、渦巻文にカニのハサミ状文が伴うものと思われる。尚、内面に円状の剥落痕が、外面には黒色物質の付着が観察される。

68は、ゆるい波状口縁の波頂部を中心に、内外面を沈線によって縁取りされた粘土紐をあしらうもので縄文が伴う。口縁部文様帯の間隔は狭く、肩部文様帯は地上上に乙字文を2段に配している。胴部は、基本的に櫛状工具に太い沈線をもって縁取りされるが、左右対称に配されたカニのハサミ状文部分のみは、縁取り内部に沈線を1本加えて3本としている。いずれも外面に、黒色物質の付着及び円状の剥落痕が認められる。

69は、幅狭な波状口縁の内外面に、太い沈線による縁取りを施した粘土紐を貼り付けるもので、肩部文様帯と胴部文様帯は櫛状工具で下書きされた縄文帯によって分割される。肩部文様帯は、縄文

を地文として乙字文を2段に配す。胴部文様帯には渦巻文を描き、下半の無文帯との間に1段の乙字文を施した文様帯を形成することで区画している。尚、外面には黒色物質が付着する。

70は、波状を呈する幅の広い口縁の波頂部内外面に、弧状の文様を描き縄文を施すもので、口唇部の断面形状は角形を呈する。肩部文様帯には縄文施文後、4段にわたる乙字文を配す。胴部文様帯は不明だが、図示したものが同一個体かと思われる。内面に円状の剥落痕が、口縁部外面に微量ではあるが黒色物質の付着が観察される。

71は、幅広い波状口縁を有し、波頂部を中心に縄文を施した3単位の弧状文をもつと推察される。肩部から胴部にかけて大柄な渦巻文が描かれるが、事前に半截竹管状工具での文様の割付を行う。

72は、左から右へと施文された、弧状文様の連なりによって飾られた波状口縁を呈す。口唇部断面は角形を呈し、頸部には2段の乙字文が配すが、他のものとは異って文様帯としての区画が明確ではない。胴部には、特徴的な花卉状のモチーフが描き出され、左右の花弁にカニのハサミ状文が付随するものと考えられる。内外面に黒色物質の付着がみられる。

73は胴部で、体部下端の文様帯に連続する稲妻状文が施文される。この上部に位置する文様帯のモチーフは破損のため不明であるが、両者とも磨消縄文部分には事前に櫛状工具による下書きが行われる。この他、内面に円状の剥落痕が、外面には黒色物質の付着が観察される。

74は小型品である。櫛状工具で文様を描いた後に、太い沈線で縁取る。内外面には黒色物質の付着が認められる。

V群 晩期の大洞C₁式に比定されるもの(75~89)

出土量は少ないが、雲形文や口縁部に連続する刺突を加えたものがみられ、一部に赤色顔料が塗布されたものも見受けられる。

VI群 型式不明のもの(90~97)

帰属する型式名は明らかではないが、90~95は後期、96は晩期に属すかと思われる。97は肩部と推定されるが、判断としない。

(2) 土製品(図96、表72)

鐔形土製品?が1点出土した。98は文様は特に施されておらず、表面が平滑に仕上げられている。

第2節 弥生時代の土器(図96、表73)

土器1点のみの出土で後期のものと思われる(99)。口唇部及び口縁部に縦方向のRL縄文を施す。

第3節 平安時代の土器・土製品(図97、表74、75)

本遺跡では、平安時代の遺物は基本的に遺構内から出土し、遺構外から出土することは少ない上に残存状態は悪い。このことは、当時の人々の生活様式をある程度反映しているものと思われ、興味深い。以下、種類別に述べる。

(1) 土師器・須恵器(図97、表74)

坏(100~105、110)

100は内面が黒化処理された土師器で、101~105は須恵器である。須恵器は焼成不良のためか、軟質で黄褐色を呈するものが多い。ロクロの回転方向は土師器・須恵器ともに右回転のもので占めら

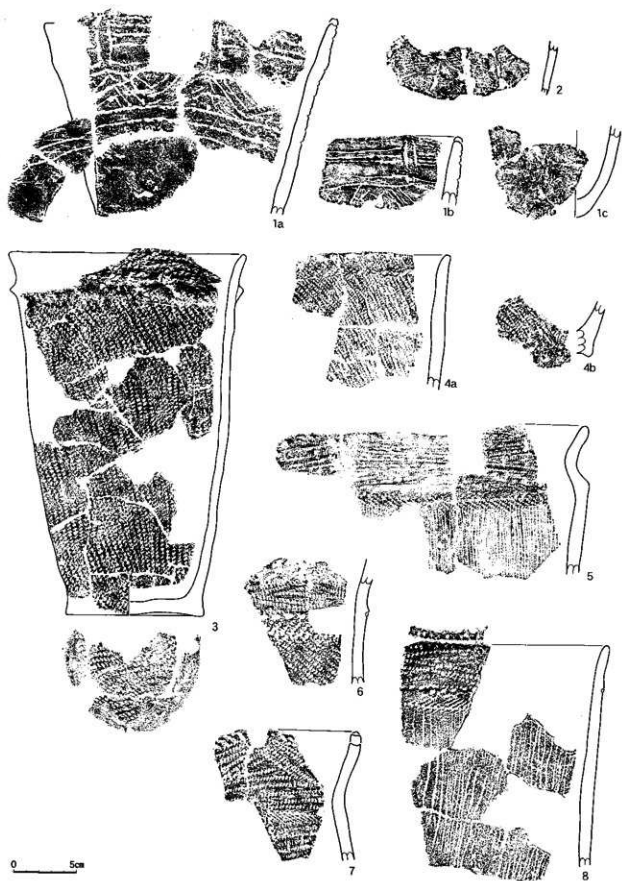


圖87 遺構外出土遺物(1)

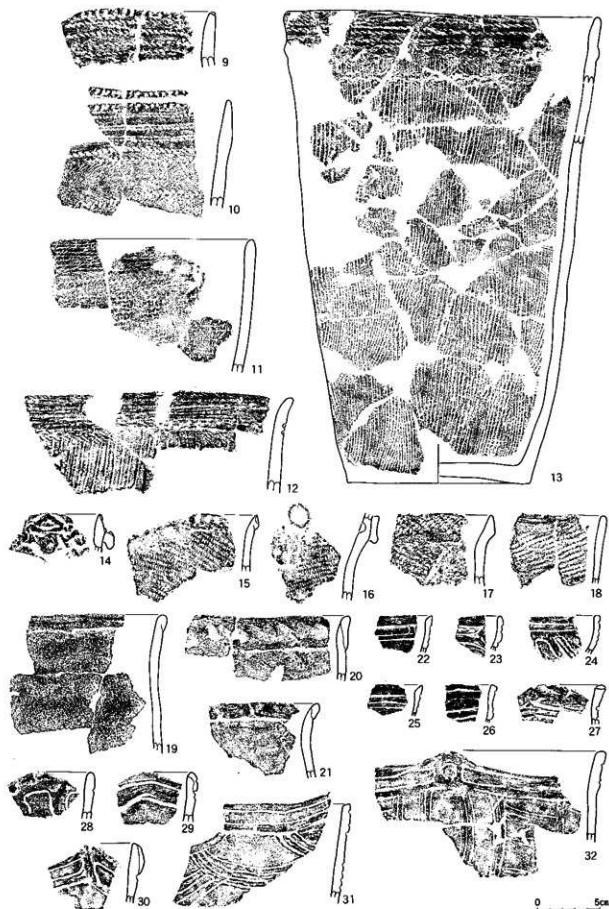


图88 遺構外出土遺物(2)

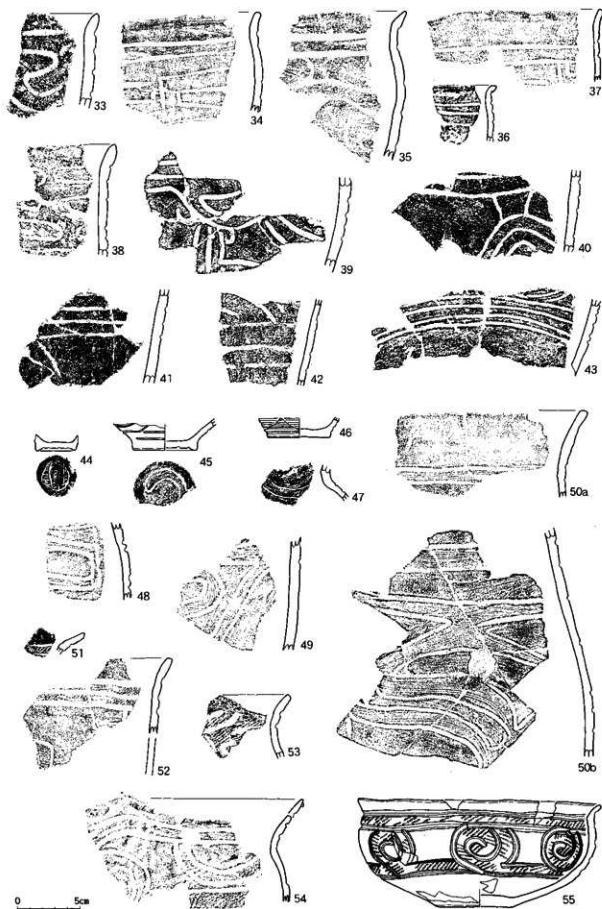


圖89 遺構外出土遺物(3)

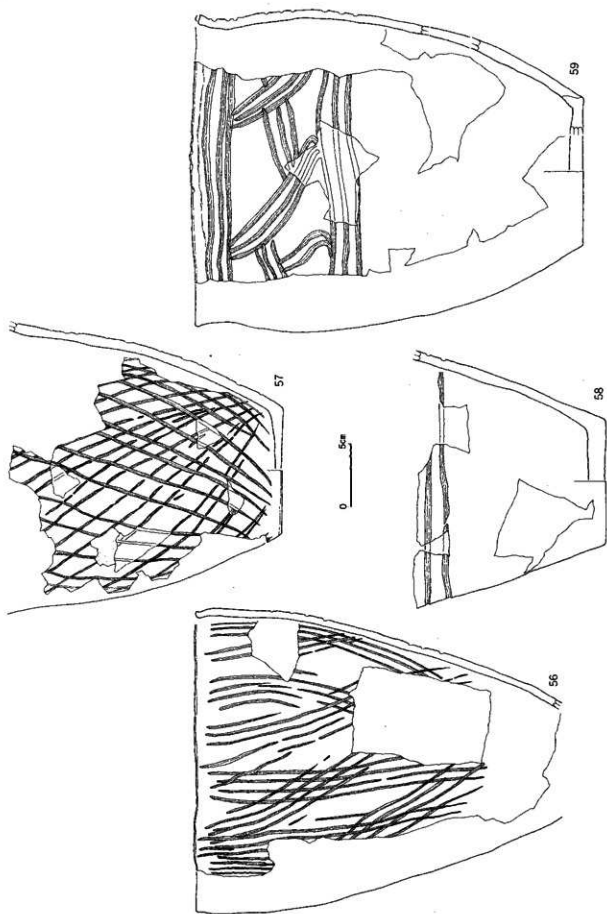


図90 遺跡外出土遺物(4)

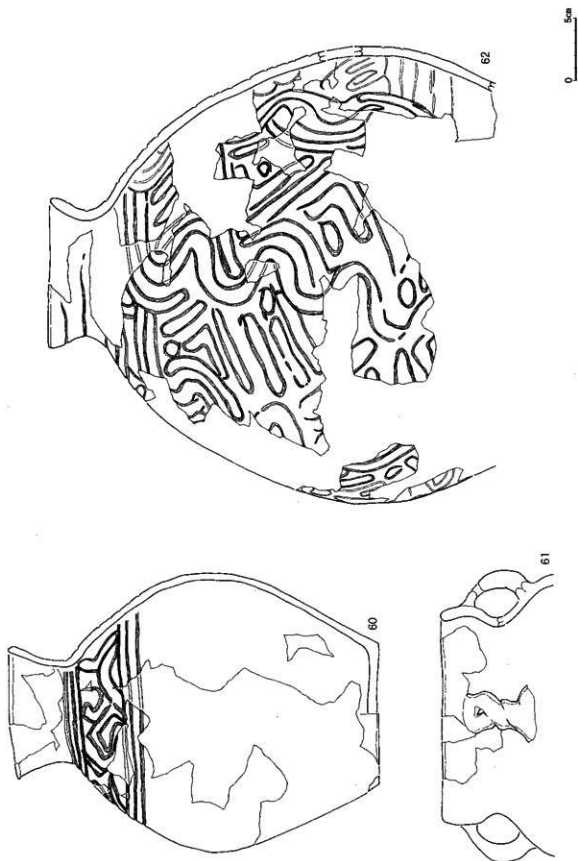


圖91 遺構外出土遺物(5)

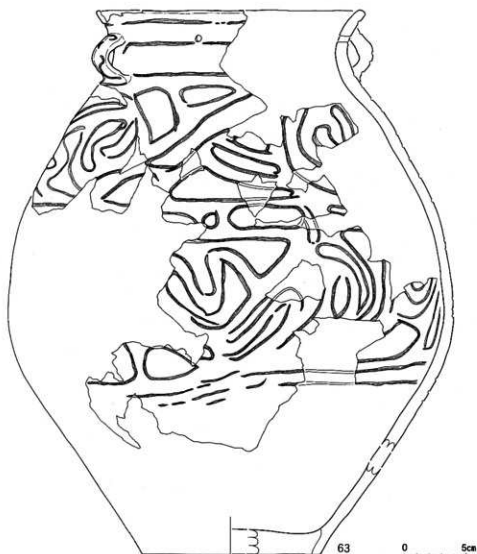


図92 遺構外出土遺物(6)

れ、底面に回転糸切痕を残す。1点のみ静止糸切痕をとどめるものがあるが(102)、底面は非常にいびつで不安定である。この他に110は小型のものであるが、底面に右方向の回転糸切痕を明瞭に残す。柱状高台のものがあるが詳細は不明であり、或いは他の類に含めたほうが良いかも知れない。

甕(106~109、111、112)

いずれも土師器で、外面はケズリ、内面は指または木口状工具によると思われるナデが施される。111は底面にモミや植物と推定される圧痕が観察される。112は外面に叩き目、内面に木口状工具によるナデが認められるもので、同様のものが第205号住居跡から出土している。外来的な要素が強いが、胎土分析の結果から在地において製作された可能性がある。

把手付土器(113)

把手部分のみが1点出土した。表面にはケズリやナデの痕跡が観察される。

(2) 土製品(図97、表75)

羽口が1点、用途不明のものが3点確認された。用途不明のものは縄文時代に属す可能性も考えら

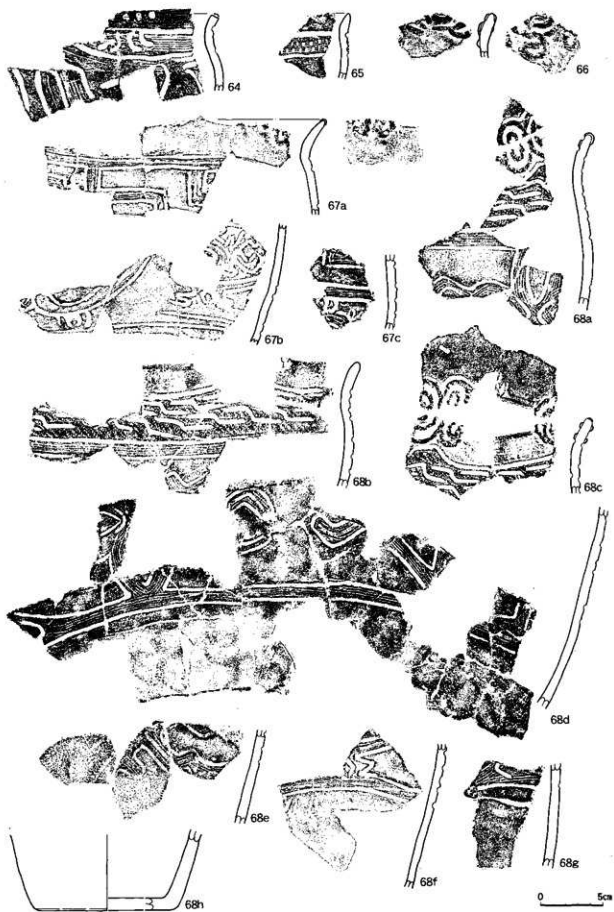


圖93 遺構外出土遺物(7)

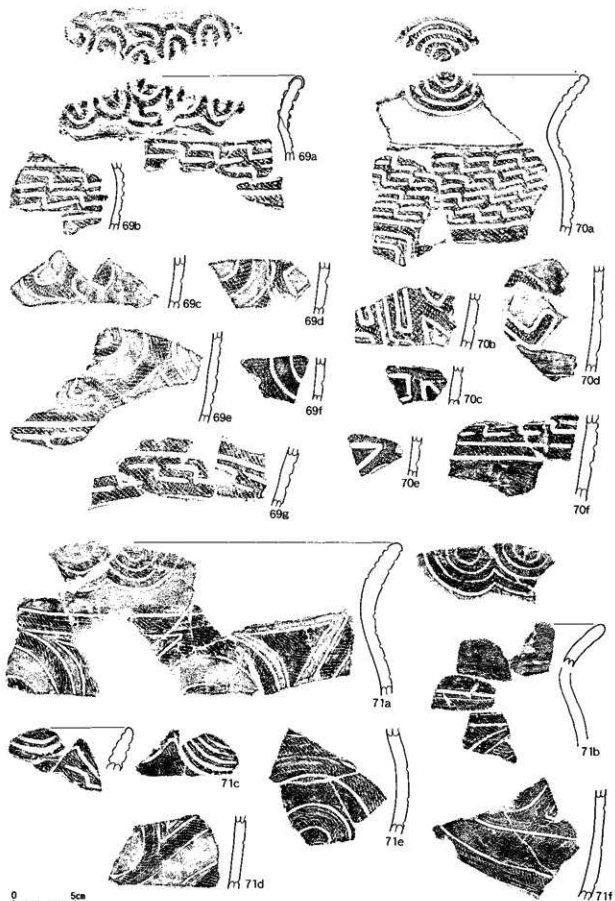


图94 遺構外出土遺物8)

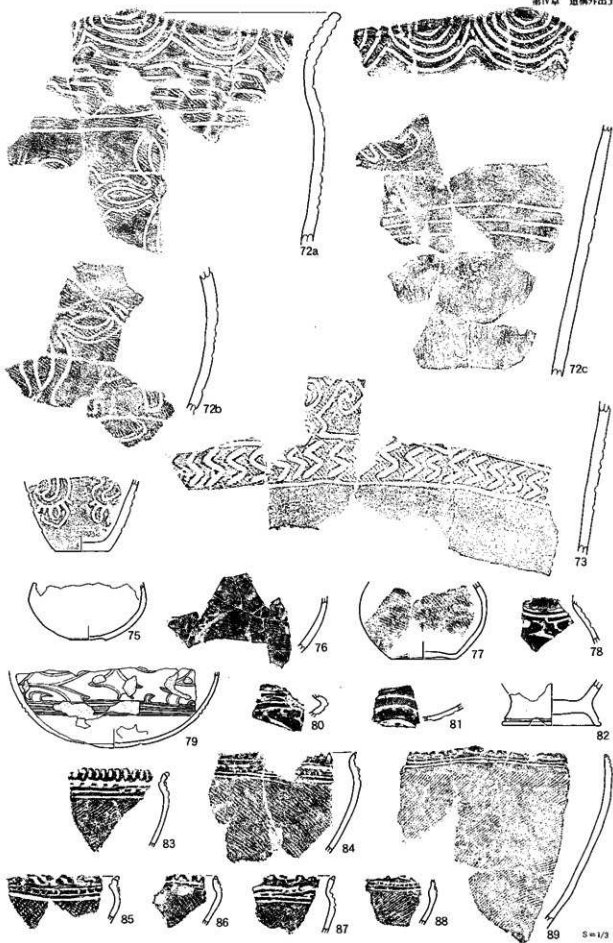


图95 遺構外出土遺物(9)

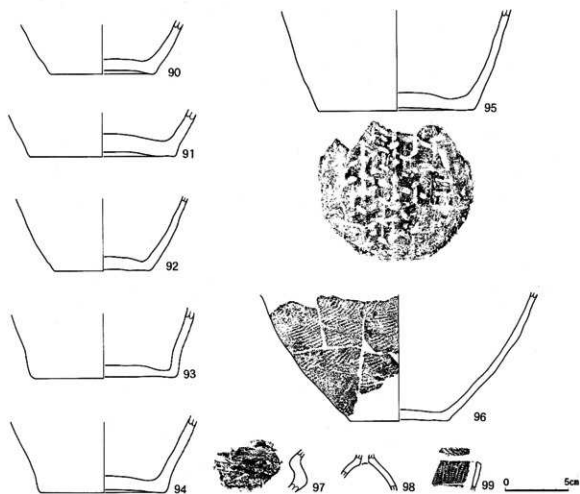


図96 遺構外出土遺物(90)

れるが、胎土と色調などにより平安時代のもものと推定されることから本類に含めた。

羽口（114）は所謂蒲鉾形と称されるものの一部とみられ、胎土に草などを混入しているようである。部分的に溶着物の付着や赤化現象がみられる。

用途不明のものうち、115は紐状で、116は草の圧痕がみられるが、カマド起源のものとは異なり焼成は良好、117はヒビ割れが著しい。

第4節 石器（図98、表76）

遺構外からは118点の石器及び剥片などが出土したが、ここでは図示可能な104点について述べる。

I類 縄文時代のもの

I-1類 石鎌（1・2） 1は凸基、2は凹基で先端が欠損している。

I-2類 石錐（3） 珪質頁岩製のものが1点出土している。

I-3類 石匙（4～6） 縦型のもものが3点出土した。4・6は縦長の剥片を素材としている。

I-4類 石篋（7） 1点のみの出土であり、珪質頁岩製である。

I-5類 異形石器（8） 黒曜石製で両側に抉りがみられるが両端を欠く。図示はしていないが、両面に火熱を受けた痕跡が認められる。藁科哲男氏の分析では、産地が北海道置戸産と判明し、水和

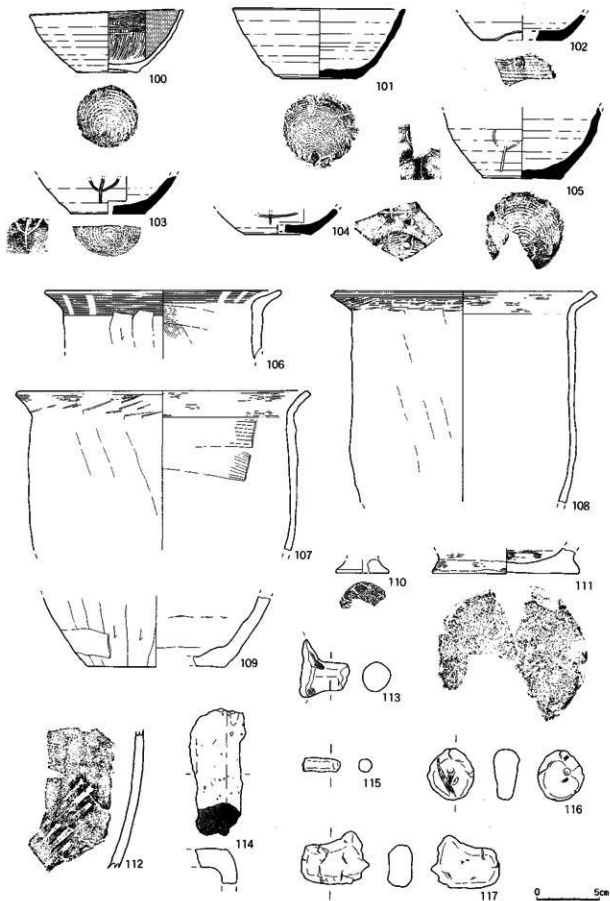


图97 遺構外出土遺物(1)

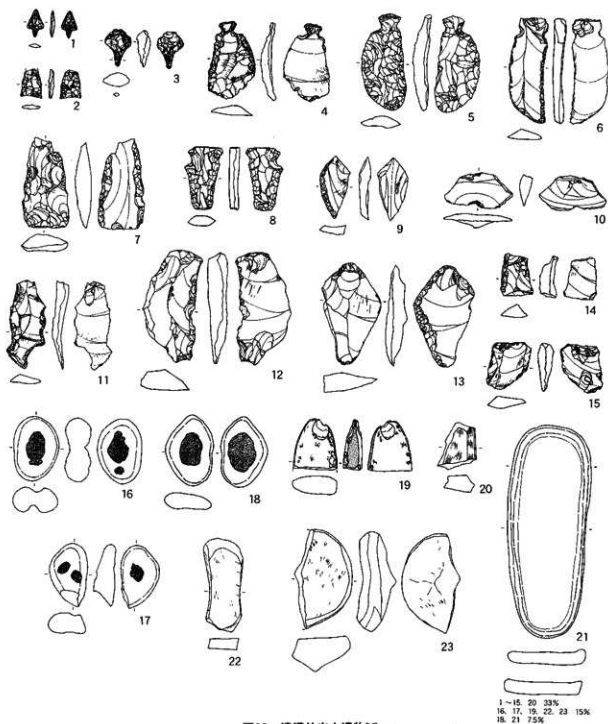


図98 遺構外出土遺物の2

層測定による推定換算経過年代の結果では4,900 ± 103年と4,515 ± 118年前の数値が得られている。
 I-6類 不定形剥片石器 (9~15) 縦長の剥片を素材としたものが多く、わずかに横長のものを含む。いずれも珪質頁岩製である。

I-7類 凹石 (16・17) 2点出土した。いずれも両面に凹痕がみられる。

I-8類 台石 (18) 両面に敲打痕が認められるものが1点出土している。

I-9類 磨製石斧 (20) 1点のみの出土で緑色細粒凝灰岩製の欠損品である。原材から切り離した際の擦り切り痕が観察される。

表71 遺構外出土土器観察表 (續文)

図番番号	分類	出土区	層位	器形	文 様	備 考	出土箇所
87-1	I 物見台式	CT-61	I~II	深鉢 胴部	小波状口縁・貝殻刻突文 (口縁、外面)	突底、内面に円状の割落痕	1
87-2	I	CY-78	I~II	深鉢 胴部	貝殻条線文・縄文?		—
87-3	I-1 円筒下駄式	CO-55	I~II	深鉢 口部	縄網面正交 (R,R)・隆帯、縄文 (R,R) 横位、底面縄文施文	粘土に縦線を含む、外面に黒色物質付着	3
87-4	I-1 円筒下駄式	CS-56 CO-55	I~II	深鉢 口部	正交 (R,R)・縄文 (R,R) 横位 (外面、底面)	粘土に縦線を含む、内面に黒色物質付着	14
87-5	I-2 円筒下駄式	CO-56 CO-55	I~II	深鉢 口部	口縁部に正交 (R,R) 横位、多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位、多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位	粘土に縦線を含む、外面に黒色物質付着	6
87-6	I-2 円筒下駄式	表 探	I~II	深鉢 口部	多輪縁条体正交 (L)・口縁部刻突文 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位	粘土に縦線を含む	4
87-7	I-2 円筒下駄式	CO-76 CO-75	I~II	深鉢 口部	波状口縁・貝殻・多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位	粘土に縦線を含む	8
87-8	I-2 円筒下駄式	CO-77	I~II	深鉢 口部	貝殻・多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位	粘土に縦線を含む	5
88-9	I-2 円筒下駄式	CJ-76 CO-75	I~II	深鉢 口部	刻目・縄網面正交 (L)	粘土に縦線を含む	11
88-10	I-2 円筒下駄式	CJ-76 CO-75	I~II	深鉢 口部	口縁部に正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位、多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯	粘土に縦線を含む	10
88-11	I-2 円筒下駄式	CP-94	I~II	深鉢 口部	縄網面正交 (R)・隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位、多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯	粘土に縦線を含む	13
88-12	I-2 円筒下駄式	CO-76	I~II	深鉢 口部	刻目・多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位	粘土に縦線を含む	7
88-13	I-2 円筒下駄式	CH-77	I~II	深鉢 口部	口縁部に正交 (R,R) 隆帯、多輪縁条体正交 (R,R) 横位、多輪縁条体正交 (R,R) 隆帯	粘土に縦線を含む、外面に黒色物質付着	2
88-14	II 円筒上層式	CV-56	I~II	深鉢 口部	粘土貼貼付		—
88-15	II 円筒上層式	CS-56	I~II	深鉢 口部	刻目 (口縁部部)、縄文 (R,L) 横位	折返し状口縁、内面に円状の割落痕	—
88-16	II 円筒上層式	CS-56	I~II	深鉢 口部	刻目 (口縁部部)、ボタン状貼付、縄文 (R,L) 横位	折返し状口縁	15
88-17	II 円筒上層式	表 探	I~II	深鉢 口部	縄文 (R,L)	折返し状口縁	16
88-18	II 円筒上層式	CW-42	I~II	深鉢 口部	縄文 (L,R)		—
88-19	II-1 十層内1式	CJ-82	I~II	深鉢 口部	無文	折返し状口縁、内面に円状の割落痕	20
88-20	II-1 十層内1式	CJ-81	I~II	深鉢 口部	無文	折返し状口縁	—
88-21	II-1 十層内1式	CJ-82	I~II	深鉢 口部	無文	折返し状口縁、外面に黒色物質付着	21
88-22	II-1 十層内1式	CN-88	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-23	II-1 十層内1式	表 探	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-24	II-1 十層内1式	CN-82	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-25	II-1 十層内1式	CO-80	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-26	II-1 十層内1式	CJ-82	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-27	II-1 十層内1式	CT-64	I~II	深鉢 口部	波状口縁・波頂部に刻目 (3単位)		46
88-28	II-1 十層内1式	CK-77	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-29	II-1 十層内1式	CO-80	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-30	II-1 十層内1式	CJ-80	I~II	深鉢 口部	沈線文	口縁部肥厚、外面に円状の割落痕	—
88-31	II-1 十層内1式	CO-80 CO-80	I~II	深鉢 口部	沈線文	口縁部肥厚、外面に黒色物質付着	—
88-32	II-1 十層内1式	CO-81	I~II	深鉢 口部	沈線文	口縁部肥厚	19
88-33	II-1 十層内1式	CW-61	I~II	深鉢 口部	沈線文	内面に円状の割落痕	—
88-34	II-1 十層内1式	CT-58	I~II	深鉢 口部	沈線文	外面に黒色物質付着	38
88-35	II-1 十層内1式	CV-62	I~II	深鉢 口部	沈線文		43
88-36	II-1 十層内1式	CW-60	I~II	深鉢 口部	沈線文	外面に黒色物質付着	—
88-37	II-1 十層内1式	OP-58	I~II	深鉢 口部	沈線文	外面に黒色物質付着	45
88-38	II-1 十層内1式	CW-44	I~II	深鉢 口部	沈線文		—
88-39	II-1 十層内1式	CV-62	I~II	深鉢 胴部	沈線文	外面に黒色物質付着、内面に円状の割落痕	30
88-40	II-1 十層内1式	CP-63	I~II	深鉢 胴部	沈線文		40
88-41	II-1 十層内1式	CW-58	I~II	深鉢 胴部	沈線文	外面に黒色物質付着	—
88-42	II-1 十層内1式	CJ-81	I~II	深鉢 胴部	沈線文		41
88-43	II-1 十層内1式	CO-80 CO-81	I~II	深鉢 胴部	沈線文 (半取竹管状工具)		—
88-44	II-1 十層内1式	CJ-76	I~II	鉢部? 底部	沈線文		—
88-45	II-1 十層内1式	CK-82	I~II	鉢部? 底部	沈線文		—
88-46	II-1 十層内1式	CO-81	I~II	鉢部? 底部	沈線文		—
88-47	II-1 十層内1式	CJ-82	I~II	燈罩部	沈線文		—
88-48	II-1 十層内1式	CR-65	I~II	深鉢 胴部	帯状工具による条線文・沈線文	内外面に黒色物質付着	—
88-49	II-1 十層内1式	CR-60	I~II	深鉢 胴部	帯状工具による条線文・沈線文		48
88-50	II-1 十層内1式	CT-64 CT-64	I~II	深鉢 口部	帯状工具による条線文・沈線文	外面に黒色物質付着	17
88-51	II-1 十層内1式	CJ-81	I~II	鉢部? 底部	磨滑縄文 (L,R)		—
88-52	II-1 十層内1式	CT-65	I~II	深鉢 口部	磨滑縄文 (L,R) 充填	外面に黒色物質付着	55
88-53	II-1 十層内1式	CL-87	I~II	深鉢 口部	波状口縁・刻目 (波頂部)、磨滑縄文 (L,R) 充填		—
88-54	II-1 十層内1式	CT-64	I~II	深鉢 口部	波状口縁・粘土貼貼付、磨滑縄文 (L) 充填		35
88-55	II-1 十層内1式	CV-60	I~II	深鉢 口部	磨滑縄文 (L) 充填	内面に円状の割落痕	24
90-56	II-1 十層内1式	CO-81	I~II	深鉢 口部	網目状文 (沈線)	外面に黒色物質付着、内面に円状の割落痕	25
90-57	II-1 十層内1式	CN-82	I~II	深鉢 口部	網目状文 (沈線)		29

図版番号	分類	出土区	層位	器形	文様	備考	出土分析
90-58	Ⅱ-1 十層内1式	CT-67	I~II	深鉢 胴部	沈線文	片取に黒色物質付着。内外面に内層の剥離痕	—
90-59	Ⅱ-1 十層内1式	QQ-60	I~II	深鉢 胴部	口縁部に刻目(4単位)・沈線文	—	32
91-60	Ⅱ-1 十層内1式	CW-60	I~III	釜口・底部	沈線文	内外面に内層の剥離痕	23
91-61	Ⅱ-1 十層内1式	CN-86	I~III	釜口・底部	無文・横状把手	外面に黒色物質付着	22
91-62	Ⅱ-1 十層内1式	CK-83	I~III	釜口・底部	—	—	33
92-63	Ⅱ-1 十層内1式	CJ-82	I~III	釜口・底部	—	—	34
93-64	Ⅱ-2 大塚第7層土器	OP-62-63	I~III	深鉢 口部	口唇部に刻目・柳状工具による条線文・沈線文	—	62
93-65	Ⅱ-2 大塚第7層土器	OP-62	I~III	深鉢 口部	口唇部に刻目・柳状工具による条線文・刺突(方形)	—	60
93-66	Ⅱ-2 大塚第7層土器	CW-58	I~III	深鉢 口部	波状口縁・粘土拵貼付(口縁部内外面)	—	—
93-67	Ⅱ-2 大塚第7層土器	CJ-63	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・粘土拵貼付・柳状工具による条線文・沈線文・カニのハサミ状文	—	61
93-68	Ⅱ-2 大塚第7層土器	CV-60	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・粘土拵貼付・乙字文・カニのハサミ状文・墨洩縄文(凡)	—	71, 72, 73
94-69	Ⅱ-2 大塚第7層土器	伊-62(伊-61) 伊-62(伊-61)	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・粘土拵貼付(口縁部内外面)・乙字文・墨洩縄文・墨洩縄文(凡)	文様の割付(柳状工具)	63, 64
94-70	Ⅱ-2 大塚第7層土器	CT-V-60	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・口縁部頂部に弧状文(内外面)・乙字文・墨洩縄文(凡)	文様の割付(柳状工具)	68, 69
94-71	Ⅱ-2 大塚第7層土器	伊-62(伊-61) 伊-62(伊-61)	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・口縁部頂部に弧状文(内外面)・墨洩縄文・墨洩縄文(凡)	文様の割付(半脱付管状工具)	65
95-72	Ⅱ-2 大塚第7層土器	伊-62(伊-61) 伊-62(伊-61)	I~III	深鉢 口・底部	波状口縁・口縁部頂部に弧状文(内外面)・乙字文・墨洩縄文(凡)	—	66
95-73	Ⅱ-2 大塚第7層土器	伊-62(伊-61) 伊-62(伊-61)	I~III	深鉢 胴部	指環状文・墨洩縄文(凡)	文様の割付(柳状工具)	67
95-74	Ⅱ-2 大塚第7層土器	伊-62(伊-61) 伊-62(伊-61)	I~III	深鉢 胴部	柳状工具による条線文・沈線文	—	74
95-75	V-2 大塚C式	QQ-64	I~III	深鉢 胴部	無文・赤塗	内外面に炭化物付着	78
95-76	V-2 大塚C式	CI-73	I~III	深鉢 胴部	無文・赤塗	—	77
95-77	V-2 大塚C式	CI-77	I~III	深鉢 胴部	縄文(凡)	—	76
95-78	V-2 大塚C式	CJ-70	I~III	深鉢 胴部	雲形文	—	—
95-79	V-2 大塚C式	CI-70	I~III	深鉢 胴部	雲形文・平行沈線	—	75
95-80	V-2 大塚C式	CW-78	I~III	注口 胴部	雲形文	—	—
95-81	V-2 大塚C式	CJ-71	I~III	鉢形 底部	墨洩縄文(LR)	—	81
95-82	V-2 大塚C式	CJ-64	I~III	鉢土器 底部	沈線文	—	—
95-83	V-2 大塚C式	CJ-72	I~III	深鉢 口縁部	連続突起・羊歯状文?・平行沈線・縄文(LR)横位・内面に沈線	内外面に炭化物付着	80
95-84	V-2 大塚C式	CI-73	I~III	深鉢 口縁部	B突起・連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	口縁外面に炭化物付着	—
95-85	V-2 大塚C式	CR-65	I~III	深鉢 口縁部	B突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位・内面に沈線	内外面に炭化物付着	—
95-86	V-2 大塚C式	CV-68	I~III	深鉢 口縁部	連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	—	—
95-87	V-2 大塚C式	OK-72	I~III	深鉢 口縁部	B突起・羊歯状文・平行沈線・縄文(LR)横位	—	—
95-88	V-2 大塚C式	CT-64	I~III	深鉢 口縁部	連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	—	—
95-89	V-2 大塚C式	CJ-71	I~III	深鉢 口縁部	B突起・連続突起・連続刻目・平行沈線・縄文(LR)横位	内面に炭化物付着	79
96-90	VI	CS-65	I~III	深鉢 底部	無文	後期か	—
96-91	VI	CV-62	I~III	深鉢 底部	無文	後期か	—
96-92	VI	OK-78	I~III	深鉢 底部	無文	後期か	—
96-93	VI	OP-62	I~III	深鉢 底部	無文	後期か	—
96-94	VI	CT-66	I~III	深鉢 底部	無文	後期か	—
96-95	VI	CV-62	I~III	深鉢 底部	底面に網代風	後期か	—
96-96	VI	CJ-71	I~III	深鉢 底部	縄文(LR)横位~斜位	晩期か	—
96-97	VI	CV-59	I~III	深鉢? 底部?	無文	—	—

I-10類 石皿(21) 凝灰岩製の大型品が1点出土した。器面中央部は擦りによって、平滑になっている。

II類 平安時代のもの

II-1類 砥石(22・23) 流紋岩製のものが2点出土しているが、1点は定かではない。22は一般的なものであるが、23は不定形なもので、自然礫を打ち欠いたものを特に整形することなく利用したものと思われる。割れ口を含め、全体的に擦痕が認められるほか、側面の一部に平坦面がつくり出されている。或いは他の類として捉えた方がよいのかもしれない。

(佐藤 智生)

表72 遺構外出土土製品観察表(縄文)

図版番号	分類	出土区	層位	文	様	備考
96-98	埴形土製品?	C-81	I~Ⅲ			天井部に焼成前の穿孔

表73 遺構外出土土器観察表(弥生)

図版番号	分類	出土区	層位	器形	文	様	備考	出土分析
96-99	弥生土器 後期?	表 探	I~Ⅲ	埴形 口縁部	縄文(RL)			-

表74 遺構外出土土器観察表(土師器・須恵器)

図版番号	種別	器種	出土区	層位	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存	備考	出土分析
97-100	土師器	坏	CJ-43	I~Ⅲ	12.2	5.0	5.0	W針	H	B	70	右回転	-
97-101	須恵器	坏	CX-69	I~Ⅲ	(13.8)	5.6	6.0	W針	H	C	60	内外面十字状火爆。右回転	-
97-102	須恵器	坏	CQ-63	I~Ⅲ	-	(2.0)	(6.4)	W針	F	C	30	静止未切	-
97-103	須恵器	坏	CX-54	I~Ⅲ	-	(2.9)	(6.0)	W	G	C	40	右回転。刻書	120
97-104	須恵器	坏	CX-54	I~Ⅲ	-	(2.0)	(5.4)	W針	G	C	30	右回転。刻書	-
97-105	須恵器	壺	CX-66A3 CV-47	I~Ⅲ	-	(5.7)	(6.2)	W針	H	C	60	右回転。刻書。内外面火爆	-
97-107	土師器	壺	表 探	I~Ⅲ	(23.0)	(12.7)	-	WRS針	E	C	30	外面粘土	-
97-108	土師器	壺	CX-70	I~Ⅲ	(20.6)	(16.8)	-	WRS針	E	C	40	マメツ。黒斑	-
97-109	土師器	壺	CL-66	I~Ⅲ	-	(5.7)	(11.0)	WRS	G	B	20	外面粘土	-
97-111	土師器	壺	CX-65	I~Ⅲ	-	(2.0)	(11.6)	WRCS	H	B	60	モミ産	-
97-112	土師器	壺	CW-45	I~Ⅲ	-	-	-	S	H	B	-	外面タタキメ。10-9と同一個体	104
97-113	土師器	肥子村土器	CW-65	I~Ⅲ	-	-	-	S	H	B	-	肥子部	-

表75 遺構外出土土製品観察表(平安)

図版番号	分類	出土区	層位	文	様	備考
97-114	羽口	CX-70	I~Ⅲ	無文		溶着物付着・部分的に赤変
97-115	土製品	CS-58	I~Ⅲ	無文		
97-116	土製品	CT-42	I~Ⅲ	無文		草の圧痕
97-117	土製品	CX-55	I~Ⅲ	無文		

表76 遺構外出土土器観察表

図版番号	分類	出土区	層位	大きさ(m)	重さ(g)	石質	備考
98-1	石鏃	CJ-62	I~Ⅲ	2.2×1.3×0.4	0.6	玉髄質珪質岩	凸基
98-2	石鏃	CS-58	I~Ⅲ	(2.4)×1.7×0.4	1.5	珪質頁岩	凹基・欠換品
98-3	石鏃	CQ-60	I~Ⅲ	2.9×2.1×1.1	4.3	珪質頁岩	
98-4	石鏃	CT-65	I~Ⅲ	6.2×3.7×0.8	15.9	珪質頁岩	縦形
98-5	石鏃	表 探	I~Ⅲ	7.8×3.4×1.1	26.7	珪質頁岩	縦形
98-6	石鏃	表 探	I~Ⅲ	5.4×2.7×0.9	20.6	珪質頁岩	縦形
98-7	石鏃	CV-55	I~Ⅲ	7.2×3.6×1.4	36.1	珪質頁岩	
98-8	異形石鏃	CJ-66	I~Ⅲ	(5.1)×2.7×0.9	12.9	黒曜石	火跡痕(両面)・欠換品・北海道産
98-9	不定形削片石器	CL-82	I~Ⅲ	5.1×2.3×1.0	8.4	珪質頁岩	
98-10	不定形削片石器	CJ-43	I~Ⅲ	2.8×5.4×1.1	10.9	珪質頁岩	
98-11	不定形削片石器	CP-61	I~Ⅲ	7.1×2.9×1.0	15.2	珪質頁岩	
98-12	不定形削片石器	CO-53	I~Ⅲ	9.0×4.1×1.6	57.9	珪質頁岩	
98-13	不定形削片石器	CQ-57	I~Ⅲ	8.0×4.8×1.6	45.4	珪質頁岩	
98-14	不定形削片石器	CQ-63	I~Ⅲ	3.4×2.6×1.4	9.7	珪質頁岩	
98-15	不定形削片石器	CT-65	I~Ⅲ	3.7×3.1×1.2	12.4	珪質頁岩	
98-16	凹石	CJ-66	I~Ⅲ	10.3×7.2×3.9	305.9	流紋岩	敲打痕(凹)
98-17	凹石	表 探	I~Ⅲ	10.1×6.0×3.4	138.3	凝粒凝灰岩	敲打痕(凹)
98-18	台石	CT-64	I~Ⅲ	22.4×15.3×5.1	1,820.0	凝灰岩	敲打痕
98-19	半円状扁平打製石器	CQ-72	I~Ⅲ	(8.1)×7.1×2.9	246.3	安山岩	すり面・欠換品
98-20	磨製石斧	CR-60	I~Ⅲ	(3.8)×3.1×1.4	22.8	緑色凝粒凝灰岩	磨り切り痕・欠換品
98-21	石鏃	CK-82	I~Ⅲ	67.8×25.9×5.1	10,500.0	凝灰岩	すり面
98-22	砥石	CJ-63	I~Ⅲ	14.8×6.1×4.3	352.4	流紋岩	すり面
98-23	砥石?	CK-84	I~Ⅲ	16.2×9.5×5.1	880.0	流紋岩	すり面

第V章 自然科学的分析

第1節 野尻(1)遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

青森県内には五所川原窯群という須恵器生産工場がある。したがって、青森県内の遺跡出土須恵器の産地問題は五所川原窯群を中心にして進められる。

他方、生産地である遺跡が残っていない土師器、縄文土器などでは直接、産地問題をとり上げる訳にはいかない。一遺跡から出土した多数の土器を分析し、その結果から胎土を分類したり、分類結果を土器形式による分類結果に対応させたりして、胎土分析から考古学的情報を引き出そうとする研究が試みられている。いわば、基礎研究の段階にある。

本報告では野尻(1)遺跡から出土した縄文土器、平安時代の土師器、須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析結果

分析結果は表1にまとめられている。分析値は同時に測定した岩石標準、JG-1による標準化値で表示されている。

はじめに、縄文土器の分析結果から説明する。図1には、今回分析した全縄文土器資料の両分布図を示す。大きく広がって分布しており、このままではデータ解析は進まない。そこで、クラスター分析によって、縄文土器の胎土を分類してみることにした。K、Ca、Rb、Srの4因子を使ってクラスター分析した結果を図2に示す。この樹状図の枝をどこで区切るかについては任意性がある。そこで、両分布図での分布と比較しつつ、区切ってみることにした。その結果、A、B、C群の3群に分けてみるようになった。これらの大枝に結び付かない資料は未分類とした。

図3には、A群の縄文土器の両分布図を示す。全体としてよくまとまっていることがわかる。これらが果たして同一胎土といえるかどうかはFe、Na因子でもまとまるかどうかによる。

図4にはFe因子を、また、図5にはNa因子を比較してあるが、A群としてまとまっていることがわかる。したがって、A群と分類された資料はほとんどが同じ胎土であると考えてもよいことがわかる。

同様に、B群の縄文土器の胎土を調べてみた。図6にはB群の縄文土器の両分布図を示す。A群と同様、B群としてよくまとまって分布していることがわかる。図4、5のNa、Fe因子をみても、全てではないが、大部分の資料はよくまとまっており、同じ胎土をもっていると考えられる。

図1～6を比較すると、A群の胎土にはB群に比べて、Ca、Sr量が多く、Fe量は少なく、Na量は多い傾向があることがわかる。したがって、A群胎土とB群胎土は全く別物であることがわかる。

図7にはC群の縄文土器の両分布図を示す。C群としてまとまって分布しており、A、B、Cの3群の中ではC群の胎土にはCa、Sr量をもっとも少ないことがわかる。

さらに、Fe、Na因子でもまとまっており、A、B、C群の中でC群の胎土にはFe量をもっとも多く、Na量をもっとも少ないことがわかる。したがって、C群の胎土はA群、B群の胎土とは全く異なる別物であることがわかる。

このようにして、図2に示したクラスター分析の樹状図の区切り方は一応、妥当であることがわかる。野尻(1)遺跡から出土した縄文土器の胎土は3種類に分類できることがわかった訳である。他に未分類の資料が10点だが、ここではこれらの胎土についてはこれ以上触れないことにする。

さて、ここで元素分析による胎土分類の結果を考古学側の情報と重ねてみよう。

まず、土器の推定年代との関連である。表1をみると、縄文早期、前期の土器にはC群型の胎土が圧倒的に多く、14点中の12点がC群であることがわかる。

逆に、縄文時代後期の土器にはC群型胎土は全く含まれていない点が注目される。58点中の34点がA群、18点がB群、6点が未分類であった。

そして、縄文晩期の土器には再びC群型胎土が多くなり、9点中の5点がC群、1点がA群、3点が未分類であった。

この結果は縄文土器の胎土は年代によって明らかに異なることを示している。つまり、特定の時代には、特定のところで作られた縄文土器が野尻(1)遺跡では使用されており、また別の時代には別の特定の場所で作られた土器を使用していることを示している。特定の時代に特定のところで作られた縄文土器を使用していることは特定の時代に特定の胎土をもつ縄文土器がまとめて出土していることからわかる訳である。

次に、器種と胎土分類の結果を重ねてみよう。今回分析した資料には深鉢が多いが、未分類となった10点の資料のうち5点は器種が異なる。すなわち、No.24は浅鉢、No.33、34は壺、No.75は浅鉢、No.77は壺類である。このことはこれら特定の器種は別のところで作られたものであることを示している。

A、B、C群の縄文土器を作った産地は目下のところ不明である。しかし、一遺跡から出土した縄文土器の胎土が時代によってまとめており、特定の時代には特定のところで製作された縄文土器が野尻(1)遺跡にまとめて供給されており、また、別の時代には別のところで製作された縄文土器がまとめて供給されていたというデータは注目されよう。縄文土器としてははじめてのデータである。

次に、土師器の分析結果について説明する。まず、両分布図を図8に示す。ばらついて分布しているので、クラスター分析を試みた。図9にクラスター分析の結果を示す。No.10からNo.3(いずれも、クラスター分析登録番号)までをD群、No.5からNo.21までをE群と分類し、No.8、15、20を未分類資料として切り捨てた。D群、E群の資料はそれぞれ、まとめて分布しており、同じ胎土であるとみられる。ここで注目されるのは土師器のD群、E群の分布位置がそれぞれ、縄文土器のC群、B群に対応するという点である。Fe、Na因子もびったりとは一致しないが、類似していることは図4、5からわかる。D、E群とC、B群の胎土がにているといっても、びたりと一致しないのは時代が異なる土器であるから当然であろう。しかし、胎土が類似しているということは同じ地域で作った可能性を示す。縄文土器、A群の胎土に対応する土師器胎土がない点が不思議であろう。ここで、未分類資料、No.103をみてみよう。図8ではK-Ca、Rb-Srの両分布図でほぼA群領域に対応する位置に分布しており、図4、5のFe、Na因子でA群領域に対応することがわかる。つまり、土師器、No.103は縄文土器、A群型の胎土をもっており、A群の縄文土器と同じ地域で作られた土師器である可能性が出て来た。こうして、縄文土器、A群、B群、C群の胎土に対応する胎土をもつ土師器が同じ野尻(1)遺跡から出土している点は興味深い。ここでは急いで結論を出さず、今後の胎

表1 野尻(1)遺跡出土土器の分析データ

時期	分析番号	器種	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	25分	図説番号	備 考	
縄・早	1	10-6854	深鉢	I~Ⅱ	0.252	0.267	2.20	0.347	0.409	0.225	C	87-1	物見台式
縄・前	2	10-6855	深鉢	フク土	0.199	0.306	3.69	0.224	0.406	0.177	C	88-13	円筒下層a式
縄・前	3	10-6856	深鉢	I~Ⅲ	0.217	0.374	2.13	0.213	0.535	0.223	B	87-3	円筒下層a式
縄・前	4	10-6857	深鉢	I~Ⅲ?	0.282	0.252	2.94	0.435	0.402	0.157	C	87-6	円筒下層a式
縄・前	5	10-6858	深鉢	I~Ⅲ	0.195	0.217	3.26	0.152	0.337	0.112	C	87-8	円筒下層a式
縄・前	6	10-6859	深鉢	I~Ⅲ	0.199	0.179	3.05	0.195	0.298	0.103	C	87-5	円筒下層a式
縄・前	7	10-6860	深鉢	I~Ⅲ	0.171	0.188	2.97	0.137	0.288	0.093	C	88-12	円筒下層a式
縄・前	8	10-6861	深鉢	I~Ⅲ	0.401	0.442	2.23	0.319	0.660	0.286	A	87-7	円筒下層a式
縄・前	9	10-6862	深鉢	I~Ⅲ	0.225	0.251	2.84	0.288	0.407	0.155	C	掲載外	円筒下層a式
縄・前	10	10-6863	深鉢	I~Ⅲ	0.319	0.223	2.93	0.380	0.366	0.170	C	88-10	円筒下層a式
縄・前	11	10-6864	深鉢	I~Ⅲ	0.216	0.244	3.16	0.164	0.371	0.137	C	88-9	円筒下層a式
縄・前	12	10-6865	深鉢	I~Ⅲ	0.196	0.165	3.10	0.186	0.235	0.111	C	掲載外	円筒下層a式
縄・前	13	10-6866	深鉢	I~Ⅲ	0.173	0.334	3.94	0.166	0.440	0.144	C	88-11	円筒下層a式
縄・前	14	10-6867	深鉢	I~Ⅲ	0.206	0.318	3.25	0.189	0.444	0.180	C	87-4	円筒下層a式
縄・中	15	10-6868	深鉢	I~Ⅲ	0.380	0.577	1.85	0.380	0.700	0.269	A	88-16	円筒下層a式
縄・中	16	10-6869	深鉢	フク土	0.339	0.608	4.27	0.308	0.459	0.260	未分類	88-17	円筒下層a式
縄・後	17	10-6870	深鉢	I~Ⅲ	0.307	0.384	1.99	0.382	0.678	0.277	A	89-50	十層内1式
縄・後	18	10-6871	鉢類	I~Ⅲ	0.191	0.501	2.38	0.205	0.570	0.205	B	37-18	十層内1式
縄・後	19	10-6872	深鉢	I~Ⅲ	0.270	0.519	2.52	0.289	0.630	0.237	B	88-32	十層内1式
縄・後	20	10-6873	深鉢	I~Ⅲ	0.363	0.660	1.93	0.492	0.770	0.312	A	88-19	十層内1式
縄・後	21	10-6874	深鉢	I~Ⅲ	0.322	0.691	2.31	0.386	0.971	0.381	A	88-21	十層内1式
縄・後	22	10-6875	壺	I~Ⅲ	0.343	0.582	2.83	0.382	0.713	0.344	A	91-61	十層内1式
縄・後	23	10-6876	壺	I~Ⅲ	0.275	0.376	2.38	0.336	0.546	0.257	B	91-60	十層内1式
縄・後	24	10-6877	浅鉢	I~Ⅲ	0.364	0.365	1.89	0.409	0.602	0.266	未分類	89-55	十層内1式
縄・後	25	10-6878	深鉢	I~Ⅲ	0.303	0.406	3.11	0.320	0.518	0.257	B	90-56	十層内1式
縄・後	26	10-6879	深鉢	フク土	0.309	0.402	3.16	0.341	0.549	0.250	B	73-3	十層内1式
縄・後	27	10-6880	深鉢	I~Ⅲ	0.352	0.576	1.81	0.582	0.793	0.329	A	掲載外	十層内1式・網目状文
縄・後	28	10-6881	深鉢	I~Ⅲ	0.363	0.495	1.92	0.453	0.728	0.292	A	73-2	十層内1式
縄・後	29	10-6882	深鉢	I~Ⅲ	0.390	0.469	1.97	0.447	0.717	0.362	A	90-57	十層内1式
縄・後	30	10-6883	深鉢	I~Ⅲ	0.338	0.490	1.97	0.347	0.700	0.294	A	89-39	十層内1式
縄・後	31	10-6884	深鉢	フク土	0.308	0.543	1.90	0.235	0.730	0.294	A	73-1	十層内1式
縄・後	32	10-6885	深鉢	I~Ⅲ	0.302	0.438	2.11	0.281	0.584	0.289	B	90-59	十層内1式
縄・後	33	10-6886	壺	I~Ⅲ	0.383	0.452	2.46	0.464	0.615	0.300	未分類	91-62	十層内1式
縄・後	34	10-6887	壺	I~Ⅲ	0.348	0.448	2.23	0.563	0.579	0.225	未分類	92-63	十層内1式
縄・後	35	10-6888	深鉢	フク土	0.289	0.586	1.76	0.322	0.729	0.340	A	89-54	十層内1式
縄・後	36	10-6889	深鉢	I~Ⅲ	0.275	0.353	2.45	0.258	0.501	0.188	B	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	37	10-6890	深鉢	I~Ⅲ	0.213	0.480	2.38	0.309	0.571	0.219	B	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	38	10-6891	深鉢	I~Ⅲ	0.265	0.624	1.98	0.254	0.792	0.298	A	89-34	十層内1式
縄・後	39	10-6892	深鉢	フク土	0.276	0.363	1.43	0.301	0.632	0.270	B	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	40	10-6893	深鉢	I~Ⅲ	0.301	0.347	2.57	0.299	0.502	0.212	B	89-40	十層内1式
縄・後	41	10-6894	深鉢	I~Ⅲ	0.264	0.409	2.45	0.254	0.552	0.246	B	89-42	十層内1式
縄・後	42	10-6895	深鉢	I~Ⅲ	0.307	0.575	1.67	0.307	0.841	0.332	A	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	43	10-6896	深鉢	I~Ⅲ	0.344	0.547	1.44	0.438	0.696	0.327	A	89-35	十層内1式
縄・後	44	10-6897	深鉢	I~Ⅲ	0.289	0.307	1.43	0.317	0.583	0.252	B	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	45	10-6898	深鉢	I~Ⅲ	0.319	0.513	1.75	0.348	0.717	0.315	A	89-37	十層内1式
縄・後	46	10-6899	深鉢	I~Ⅲ	0.521	0.501	1.96	0.385	0.695	0.288	A	88-27	十層内1式
縄・後	47	10-6900	深鉢	フク土	0.357	0.513	1.68	0.427	0.715	0.297	A	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	48	10-6901	深鉢	I~Ⅲ	0.352	0.487	2.13	0.294	0.725	0.287	A	89-49	十層内1式
縄・後	49	10-6902	深鉢	I~Ⅲ	0.373	0.346	2.09	0.409	0.566	0.294	未分類	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	50	10-6903	深鉢	フク土	0.297	0.601	1.63	0.275	0.770	0.334	A	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	51	10-6904	深鉢	I~Ⅲ	0.475	0.314	1.97	0.553	0.575	0.366	未分類	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	52	10-6905	深鉢	I~Ⅲ	0.273	0.340	2.60	0.350	0.482	0.223	B	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	53	10-6906	深鉢	I~Ⅲ	0.236	0.543	2.56	0.190	0.639	0.287	B	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	54	10-6907	深鉢	I~Ⅲ	0.289	0.351	2.32	0.367	0.581	0.263	B	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	55	10-6908	深鉢	I~Ⅲ	0.370	0.540	1.86	0.373	0.729	0.328	A	89-52	十層内1式
縄・後	56	10-6909	深鉢	I~Ⅲ	0.202	0.456	2.08	0.248	0.530	0.199	B	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	57	10-6910	深鉢	I~Ⅲ	0.203	0.420	2.16	0.224	0.533	0.188	B	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	58	10-6911	深鉢	I~Ⅲ	0.457	0.168	1.94	0.459	0.482	0.264	未分類	掲載外	十層内1式・帯埴文
縄・後	59	10-6912	深鉢	I~Ⅲ	0.251	0.727	2.23	0.237	0.835	0.331	A	掲載外	十層内1式・沈線文
縄・後	60	10-6913	深鉢	I~Ⅲ	0.279	0.555	2.14	0.415	0.668	0.307	A	89-65	大津第1群

時期	分析番号	酸種	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類	図版番号	備考		
縄・後	61	10-6914	深鉢	I~III	0.260	0.441	1.52	0.290	0.713	0.280	A	93-67a	大津第7群	
縄・後	62	10-6915	深鉢	I~III	0.313	0.581	1.75	0.342	0.755	0.340	A	93-64	大津第7群	
縄・後	63	10-6916	深鉢	I~III	0.280	0.447	1.82	0.292	0.715	0.269	A	94-69a	大津第7群	
縄・後	64	10-6917	深鉢	I~III	0.277	0.520	1.76	0.292	0.702	0.317	A	94-69b	大津第7群	
縄・後	65	10-6918	深鉢	I~III	0.290	0.450	2.04	0.269	0.692	0.267	A	94-71a	大津第7群	
縄・後	66	10-6919	深鉢	I~III	0.314	0.527	2.04	0.273	0.717	0.295	A	95-72a	大津第7群	
縄・後	67	10-6920	深鉢	I~III	0.270	0.523	2.14	0.315	0.626	0.269	B	95-73	大津第7群	
縄・後	68	10-6921	深鉢	I~III	0.290	0.490	1.97	0.309	0.694	0.291	A	94-70a	大津第7群	
縄・後	69	10-6922	深鉢	I~III	0.305	0.544	1.90	0.358	0.717	0.320	A	94-69c	大津第7群	
縄・後	70	10-6923	深鉢	I~III	0.305	0.494	1.94	0.340	0.687	0.309	A	58-1	大津第7群	
縄・後	71	10-6924	深鉢	I~III	0.282	0.637	2.04	0.244	0.850	0.295	A	93-68b	大津第7群	
縄・後	72	10-6925	深鉢	I~III	0.333	0.646	1.99	0.310	0.861	0.322	A	93-68a	大津第7群	
縄・後	73	10-6926	深鉢	I~III	0.323	0.647	2.02	0.308	0.859	0.313	A	93-68d	大津第7群	
縄・後	74	10-6927	深鉢	I~III	0.357	0.729	1.76	0.406	0.858	0.384	A	95-74	大津第7群	
縄・晩	75	10-6928	浅鉢	I~III	0.449	0.165	2.57	0.488	0.333	0.218	未分類	95-79	大淵C式	
縄・晩	76	10-6929	巻類	I~III	0.303	0.264	3.80	0.250	0.343	0.177	C	95-77	大淵C式	
縄・晩	77	10-6930	巻類	I~III	0.417	0.317	2.05	0.510	0.554	0.281	C	95-76	大淵C式	
縄・晩	78	10-6931	巻類	I~III	0.222	0.192	2.02	0.742	0.326	0.236	C	95-75	大淵C式	
縄・晩	79	10-6932	深鉢	I~III	0.318	0.192	2.38	0.284	0.364	0.180	C	95-89	大淵C式	
縄・晩	80	10-6933	深鉢	I~III	0.193	0.300	2.52	0.225	0.417	0.180	C	95-83	大淵C式	
縄・晩	81	10-6934	鉢形	I~III	0.402	0.368	1.84	0.449	0.655	0.253	未分類	95-81	大淵C式	
縄・晩	82	10-6935	深鉢	フク土	0.351	0.509	2.78	0.276	0.652	0.242	A	85-2	大淵C式	
縄・晩	83	10-6936	深鉢	フク土	0.352	0.212	2.53	0.221	0.369	0.137	C	85-1	大淵C式	
平安	84	10-6937	土師器 杯	I~III	0.307	0.240	2.42	0.373	0.414	0.196	D	掲載外		
平安	85	10-6938	土師器 杯	I~III	0.331	0.251	2.11	0.396	0.459	0.196	D	掲載外		
平安	86	10-6939	土師器 杯	I~III	0.281	0.156	2.39	0.421	0.345	0.170	D	掲載外		
平安	87	10-6940	土師器 杯	I~III	0.197	0.233	3.06	0.289	0.334	0.149	D	掲載外		
平安	88	10-6941	土師器 杯	I~III	0.229	0.313	2.04	0.314	0.509	0.207	E	掲載外		
平安	89	10-6942	土師器 杯	I~III	0.207	0.318	2.38	0.258	0.434	0.174	D	掲載外		
平安	90	10-6943	土師器 杯	I~III	0.261	0.329	1.84	0.336	0.561	0.239	E	掲載外		
平安	91	10-6944	土師器 杯	I~III	0.179	0.106	2.99	0.202	0.235	0.127	未分類	掲載外		
平安	92	10-6945	土師器 杯	I~III	0.276	0.277	2.37	0.344	0.407	0.178	D	掲載外		
平安	93	10-6946	土師器 杯	I~III	0.230	0.286	2.63	0.306	0.386	0.170	D	掲載外		
平安	94	10-6947	土師器 壺	I~III	0.297	0.278	3.23	0.323	0.407	0.207	D	掲載外		
平安	95	10-6948	土師器 壺	I~III	0.270	0.252	3.49	0.257	0.376	0.163	D	掲載外		
平安	96	10-6949	土師器 壺	I~III	0.309	0.293	2.42	0.427	0.432	0.203	D	掲載外		
平安	97	10-6950	土師器 壺	I~III	0.236	0.291	3.53	0.281	0.387	0.196	D	掲載外		
平安	98	10-6951	土師器 壺	I~III	0.418	0.390	2.17	0.512	0.630	0.326	未分類	掲載外		
平安	99	10-6952	土師器 壺	I~III	0.258	0.391	2.25	0.217	0.520	0.219	E	掲載外		
平安	100	10-6953	土師器 壺	I~III	0.298	0.263	2.04	0.429	0.433	0.218	D	掲載外		
平安	101	10-6954	土師器 壺	I~III	0.274	0.305	3.36	0.225	0.388	0.241	D	掲載外		
平安	102	10-6955	土師器 壺	I~III	0.229	0.374	3.32	0.257	0.428	0.243	D	掲載外		
平安	103	10-6956	土師器 壺	I~III	0.274	0.744	2.29	0.239	0.775	0.357	未分類	掲載外		
平安	104	10-6957	土師器 壺	I~III	0.283	0.447	2.63	0.342	0.575	0.278	E	97-112		
平安	105	10-6958	須恵器 鉢	フク土	0.477	0.331	3.23	0.611	0.463	0.281	4.7	53.0	五所川原	34-15
平安	106	10-6959	須恵器 杯	フク土	0.431	0.295	3.24	0.562	0.444	0.263	1.8	34.8	五所川原	33-3
平安	107	10-6960	須恵器 杯	フク土	0.404	0.247	3.00	0.534	0.398	0.174	2.2	26.6	五所川原	33-4
平安	108	10-6961	須恵器 杯	フク土	0.369	0.239	2.51	0.475	0.397	0.175	5.5	17.5	不明	33-2
平安	109	10-6962	須恵器 杯	フク土	0.351	0.260	2.81	0.410	0.392	0.206	10.5	19.0	不明	16-1
平安	110	10-6963	須恵器 杯	フク土	0.348	0.322	3.27	0.421	0.408	0.244	2.3	39.8	五所川原	23-8
平安	111	10-6964	須恵器 小壺	I~III	0.287	0.327	3.24	0.346	0.370	0.195	4.7	58.7	五所川原	掲載外
平安	112	10-6965	須恵器 長頸	フク土	0.400	0.226	2.46	0.530	0.399	0.183	4.4	19.7	不明	34-17
平安	113	10-6966	須恵器 中壺	フク土	0.338	0.275	2.44	0.455	0.397	0.111	2.6	31.3	不明	19-2
平安	114	10-6967	須恵器 小壺	フク土	0.442	0.220	2.44	0.577	0.501	0.182	24.1	18.1	不明	39-5
平安	115	10-6968	須恵器 長頸	フク土	0.349	0.312	2.83	0.375	0.486	0.235	35.9	8.7	不明	18-45
平安	116	10-6969	須恵器 長頸	フク土	0.350	0.345	1.93	0.417	0.482	0.261	13.0	23.3	不明	27-3
平安	117	10-6970	須恵器 長頸	フク土	0.346	0.317	3.33	0.399	0.371	0.219	3.3	51.9	五所川原	27-2
平安	118	10-6971	須恵器 杯	フク土	0.583	0.315	3.07	0.576	0.393	0.170	39.2	64.3	不明	14-3
平安	119	10-6972	須恵器 長頸	フク土	0.328	0.331	3.47	0.390	0.389	0.218	2.8	51.4	五所川原	16-8
平安	120	10-6973	須恵器 杯	I~III	0.344	0.316	3.25	0.403	0.410	0.209	5.4	34.1	五所川原	97-103

土分析の進展に待とう。

なお、未分類となったNo.91、98の2点はこれに比較対照できる資料はない。もしかしたら、外部地域から搬入された土師器である可能性がある。

最後に、須恵器の分析結果について説明する。図10に須恵器の両分布図を示す。No.118を除いてすべての資料は五所川原領域に分布する。したがって、ほとんどの資料は利別分析でも五所川原群に帰属することは予想される。K、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算した五所川原群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値、 D^2 （五所）の値は表1に示されている。No.114、115、116、118の4点以外の資料は D^2 （五所） ≤ 10 の条件を満足する。しかし、五所川原窯群の製品であるためには、

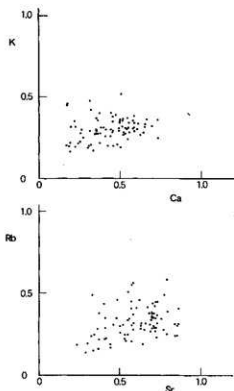


図1 縄文土器の両分布図

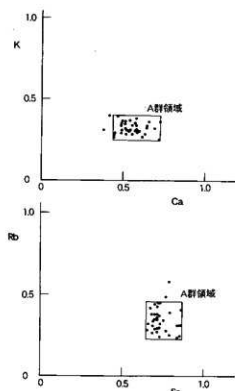


図3 A群の縄文土器の両分布図

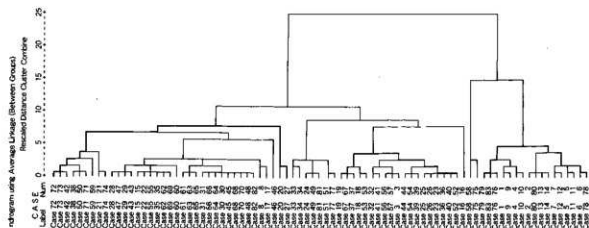


図2 縄文土器のクラスター分析

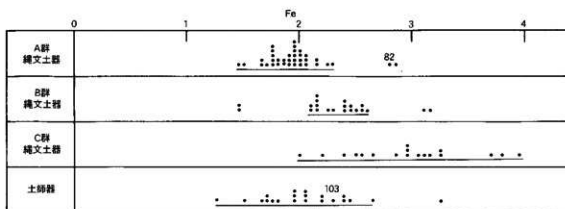


図4 Fe因子の比較

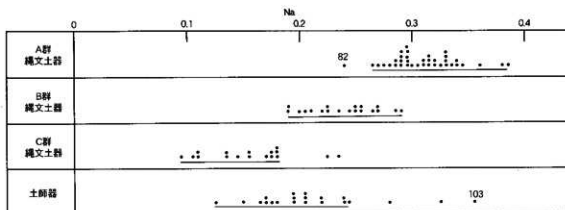


図5 Na因子の比較

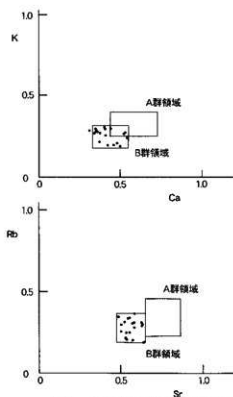


図6 B群の縄文土器の両分布図

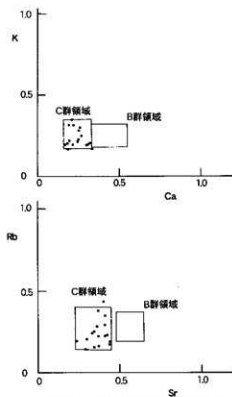


図7 C群の縄文土器の両分布図

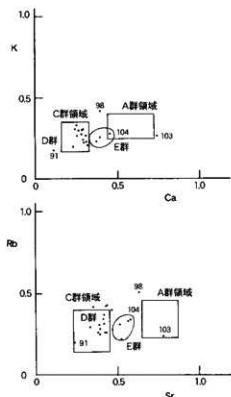


図8 土師器の両分布図

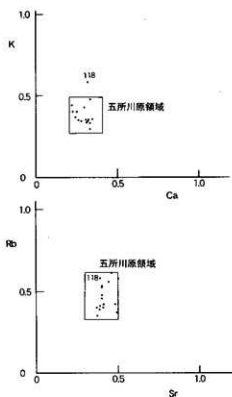


図10 須恵器の両分布図

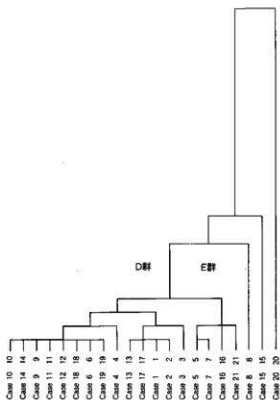


図9 土師器のクラスター分析

もう一つの条件、 $Fe > 3.0$ を満足しなければならない。これらの2つの条件を満足する資料は№105、106、107、110、111、117、119、120の8点である。これらの須恵器は五所川原窯群の製品と考えられる。№108、109、112、113、114、115、116、118の8点は産地不明となった。これらのほとんどの資料には五所川原産と考えられる須恵器よりもK、Rb量が多い点が注目される。このことから、これら産地不明品の須恵器の産地は日本海沿岸側にある可能性が高い。

第2節 野尻（1）遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析および 黒曜石製遺物の非破壊分析による水和層の測定

薬科 哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている^{1) 2) 3)}。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析を行なった試料は南津軽郡浪岡町に位置する野尻（1）遺跡出土の異形石器1個の産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると163個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転搬として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った（旧白滝第2群）、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転搬は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢よりの転搬の中

で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三ノ沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならぬ。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群それぞれ分類された。また、滝川市江部乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北見市志袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。この原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第一群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第二群を作った。これら第一、二群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第一、二群の二群に区別され、豊泉第二群の原石は疵品が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴鳴地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、鷹森山群(旧成田群)、浪岡町民の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第一、二群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鎌が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を

作った。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した野尻(1)遺跡の黒曜石製石器の分析結果を表2に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えて、表2の試料番号60264番の遺物ではRb/Zrの値は0.827で、置戸群の[平均値] ± [標準偏差]は、 0.824 ± 0.034 である。遺物と原石群の差を標準偏差(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.09σ 離れている。ところで置戸原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.09\sigma$ のずれより大きいものが92個ある。すなわち、この遺物が、置戸の原石から作られていたと仮定しても、 0.09σ 以上離れる確率は92%であると言える。だから、置戸群の平均値から 0.09σ しか離れていないときには、この遺物が置戸の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を霧ヶ峰群に比較すると、霧ヶ峰群の平均値からの隔たりは、約 5σ である。これを確率の言葉で表現すると、霧ヶ峰群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 5σ 以上離れている確率は、十万倍分の一であると言える。このように、十万倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、霧ヶ峰産の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は置戸群に92%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから置戸産原石が使用されていると同定され、さらに霧ヶ峰群に対しては千分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから霧ヶ峰産原石でないと同定される」。遺物が1ヶ所の産地(置戸産地)と一致したからと言って、例えば置戸群と霧ヶ峰群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(置戸)に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の163個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて置戸産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならぬ。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行

なうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する¹⁴⁾。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では163個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、これら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、置戸産原石と判定された遺物について、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表3に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地(確率)の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値を記した。この遺物については、記入されたD²の値が原石群の中で最も小さなD²値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては×間違いないと判断されたものである。今回分析した遺物は北海道東部に位置する置戸原産地の原石と同定されたことから、本遺跡の古代人は北海道東部地域におよび原石が伝播したルートの情報を入力していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また、石器の水和層を計る異により交流が行われたと思われる時期に関する情報が得られる。

非破壊分析による黒曜石製遺物の水と層測定

分析は黒曜石の表面に顕微鏡を通して光を照射したときに、黒曜石の表面で反射する光と、水と層で反射する光で生じる干渉波の波長から水と層の厚さを求める方法。光りの反射を利用するため、遺物の表面にできた使用痕および埋土中にできた摩耗傷などが水と層測定の障害になり測定できない場合が多々ある。また、水と層と新鮮面との境界面での反射光が非常に弱いため、境界面が明確に発達した部分を探して測定しなければならない。従って、傷のない場所を顕微鏡下で探して分析を行うため、試料によっては1個に三時間以上かかることもある。今回、分析一試料について3ヶ所以上を分析し、分析値の最大、中間、最小値を選んで表4に記した。

水と層の厚さを経過年代に換算するには、水と層を分析した黒曜石の経過年代を炭素-14法、フィッシュトラック法で求めた絶対年代から、水と層速度を求めて行う。この水と層速度は黒曜石の埋土中に受ける温度によって異なるため、黒曜石が環境から受けた温度を正確に求めなければ、正確な年代の換算はできない。従って、遺物が経過した年代の間に受けた温度が、最終水期を経過した遺物については、約9℃と約10℃を平均効果温度として水と層速度を推定したとき、置戸産原石では1.6(μ²/1000年)と1.73(μ²/1000年)で、計算を行うが推定換算経過年代は、

$$\text{推定換算年代(千年)} = \frac{\text{測定水と層厚}(\mu\text{m}) \times \text{測定水と層厚}(\mu\text{m})}{\text{水と層速度}(\mu^2/1000\text{年})}$$

の計算式から求められる。表4に推定換算経過年代を4,900±103年前と4,515±118年前を示

した。

水和速度を決める重要な要因は黒曜石の化学組成と埋没温度であるため、自然科学者の実験室で水和実験によって水和速度を決定できるが、国内産黒曜石については研究はそこまで進んでいないのが現状である。現在は水和速度の決定については考古学者の協力なしでは決定できない。実験室での水和層生成が困難である限り、水和速度の決定の舞台は遺跡になる。炭素-14年代などで年代の分かる層から出土する黒曜石の水和層から水和速度を決定するため、発掘が重要な鍵を握ることは言うまでもない。石器の組成（原産地）さえ分かれば、考古学者が炭素-14年代と水和層のデータを集積し整理するだけで、正確な水和層年代が得られるようになる。これら考古学的作業により求められた水和速度は、自然科学的に各産地の黒曜石の水和機構（理論）が証明されていないが、考古学的には問題ないと推測できる。したがって、水和層年代は考古学者が企画するだけで実用的な年代が得られるため、将来、水和層年代が石器における土器編年のように身近な存在になると推測できる。

参考文献

- 1) 藤科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)、考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藤科哲男・東村武信・榎本義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)、(IV)、考古学と自然科学、10:1153-81:33-47
- 3) 藤科哲男・東村武信(1983)、石器原料の産地分析、考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法、考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1990)、考古学と物理化学、学生社

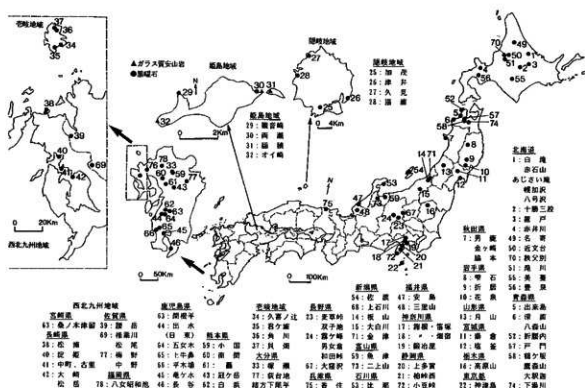


図1 黒曜石原産地

第Ⅵ章 考 察

今回の調査では、縄文時代後期の遺物として、北海道系の大津第7群土器が一定量出土した。この遺物は、県内における類例が少なく、特筆すべきものであるため、若干の考察を加えることとした。野尻(1)遺跡出土の大津第7群土器について

所謂大津第7群土器は、北海道南部を分布の中心とするもので、北海道松前郡松前町に所在する大津遺跡出土の第7群土器を指標とする。大津遺跡の報告書によると「第7群 縄文文化後期前半、大湯、十腰内、入江などに対比できるもの」(p.8)と記され、現在は十腰内1b式に併行するとの見方が一般的である。近年では木古内町新道4遺跡の調査で良好な資料が得られており、遠藤香澄氏によって細分化が試みられている。

さて、この種の土器は、津軽海峡を隔てて隣接する青森県内においても認められるが、ほとんど把握されていないのが現状である。その原因は出土事例の少なさにもあるが、大津・十腰内双方の土器が、複雑な文様構成であることに加え、製作上の共通点として櫛状工具の使用や磨消縄文手法を用いるなど、特に破片資料においては見極めが困難な点にあるからと思われる。そこで、大津第7群土器に特徴的な乙字文や稲妻状文などに着眼し類例を求めると、三厩村中の平、五所川原市観音林、尾上町李平Ⅱ号、青森市四ツ石、六ヶ所村上尾駮(2)など、管見にのぼったものだけでも津軽地方を中心に15前後の遺跡で出土していることがわかった。本遺跡で出土した資料は、これら県内のものと比較してもまとまりがあるうえ、併行する十腰内1式とともに、前後型式や縄文後期に相当するものが見当たらないなど、ほぼ単純に近い様相を示している。従って、両者の関係を研究するうえで興味深いものがあり、本遺跡の大津第7群土器について論じることは無意味ではない。本論は、主として各個体の観察を通して得られた結果に、自然科学分析の結果などを突き合わせることで、当時の文化交流の一端を解明することに努めるものである。

はじめに、考察を行う上で基本となる各個体の特徴を記しておくたい。同じ大津第7群土器の中にもどのような相違点があるのか、単に外来系という一つの枠でくくることなく、観察をととして個々の土器の特徴を捉え、焦点を当ててゆく必要がある。尚、紙数の都合から実測図を呈示する余裕がないため、図は遺構外出土土器の項などを参照されたい。

図93-64は深鉢形で、CP-62・63グリッドで出土している。幅の狭い口縁の一部には刻目が施され、文様は櫛状工具による施文の後、太い沈線で縁取りするように描かれる。外面に黒色物質が付着する。

図93-65は深鉢形で、CP-62グリッドで出土している。櫛状工具で施文した後、断面方形の工具で刺突文を加える。このような刺突文を加えるものは大津第7群土器においてもあまり一般的ではなく、県内においても中の平遺跡で1点みられる程度である。

図93-66は深鉢形で、CW-58グリッドから出土している。口縁部内外面に粘土紐を貼り付けるものであるが、その他は不明なため、やや確実性に欠ける。

図93-67は深鉢形で、CU-63グリッドを中心に出土し、CU-61グリッド出土のものと同接した。幅の狭い口縁部の内外面には部分的に粘土紐が貼り付けられる。文様は、櫛状工具と沈線で大柄なクランク状の文様を描く。内面には、円状の剥落痕が、外面には黒色物質の付着が認められる。

図93-68は深鉢形で、CV-60グリッドを中心に出土し、周辺のCV-61～63やCP-60・62、CR-61グリッド出土のものと接合関係にある。幅の狭い口縁部の内外面は粘土紐が貼り付けられ、文様は櫛状工具によるものが主体となる。ただ、肩部のみはRLの磨消縄文によるもので、内部に乙字文を二段に施す。外面に黒色物質の付着と円状の剥落痕が認められる。

図94-69は深鉢形で、CP-62、CR-61・62グリッドを中心に出土し、CP-60、CV-66グリッド出土のものと接合関係にある。口縁部は粘土紐を貼り付けた幅の狭いもので、全体の文様はRLの磨消縄文を主体とする。肩部文様帯は乙字文が2段に配され、胴部には渦巻文が施されるが、事前に櫛状工具による文様の割付が行われる。内面には円状の剥落痕が、外面には黒色物質の付着がみられる。

図94-70は深鉢形で、CT-60、CU-60、CV-60の各グリッドで出土している。口縁部の幅が比較的広く、波頂部内外面に弧状文が施される。文様はRLの磨消縄文によるものであるが、事前に櫛状工具による文様の割付が行われる（写真32）。肩部の文様帯は4段の乙字文で充填される。この他、同一個体と思われる第210号土坑出土のもの（図58-1）は、乙字文を3段に配した文様帯を有す。この他、カニのハサミ状と思われる文様がみられ、事前に櫛状工具による割付がなされる（写真32）。

図94-71は深鉢形で、CH-68、CP-62、CS-63・66、CU-65、CV-67の各グリッドで出土している。文様は主としてRLの磨消縄文によるもので、幅の広い口縁部の内外面には弧状文を配し、胴部は大柄な渦巻文が描かれる。文様の割付は他のものとは異なり、半截竹管状工具で行われる（写真32）。

図95-72は深鉢形で、CQ-68、CT-66、CU-65、CW-55・65の各グリッドで出土した。幅の広い口縁部には、内外面に弧状文が施される。文様はRLの磨消縄文によるもので、胴部にみられる花卉状のモチーフはあまり類例がなく、櫛状工具による割付も行われぬ。内面に黒色物質が付着する。

図95-73は深鉢形で、CU-60を中心に出土し、一部CT-58出土のものと接合する。文様はRLの磨消縄文によるもので、櫛状工具による割付がみられる（写真32）。本遺跡で稲妻状文が施されるものは、この個体のみである。内面には円状の剥落痕が、外面には黒色物質の付着が認められる。

図95-74は小型の深鉢形で、CR-59、CR-60グリッドで出土した。櫛状工具に沈線を伴う手法で、カニのハサミ状文などを描く。内外面に黒色物質が付着する。

以上が各個体の特徴を簡記したものである。併せて遺構外の記述も参考にして頂きたい。

次に、これに基づいて出土状況、製作、編年、使用、胎土の各分野について述べる。

まず、出土状況については、土器はほとんどが遺構外出土のものと占められており、これに若干の遺構覆土中のものが加わる。位置はCP～CV-60～65グリッドラインに集中し、このあたりが分布の中心となるようである。ただし、同一個体でも接合関係に相当ばらつきがあるものもあり、平安時代の集落が形成されなければ、本来的にはもっとまとまっていたものと思われる。層位については、基本層序Ⅰ～Ⅲ層出土のものが多い。

次に、製作上の特徴について述べる。器形は深鉢形のもので占められ、1点(74)小型のものを除いては、比較的大型である。文様モチーフは、各個体ごとに特徴がみられバラエティーに富むが、全般的に櫛状工具を使用したもの(64、65、67、68、74)とRLの磨消縄文(68、69、70、71、72、73)のものと大別される。とりわけ、櫛状工具は、文様のみならず製作過程においても利用される点に注目しなければならない。なぜなら、最終的に磨消縄文で文様が施されたものについても、

事前に櫛状工具による文様の割付(下書き)がなされるからである。このようなものは、磨消縄文を有す6個体のうち、4個体(69、70、71、73)で認められており、極めて特徴的な技法といえよう。因みに、文様の割付としての櫛状工具の利用は、基本的に十腰内1式の中には存在せず、後述する遠藤氏の編年の盛土2類以降にみられる、大津第7群土器に象徴的な製作技法であることを付け加えておく。これから、この点についても注意することで、特に破片資料などにおける両者の見極めに効果があるものと思われる。

次に、使用痕について述べる。器面に観察される黒色物質の付着(64、67、68、69、70、72、73、74)と円状の剥落痕(67、68、69、73)は各個体に少なからず見受けられるが、これは十腰内1式にもみられることで、土器の性格を考える上において無視できない。今回、黒色物質が何であるかについては断定できなかったが、煮炊きに使用される深鉢形が多い点からも、一般的にみても円状の剥落痕は加熱による焼け弾けの痕跡で、黒色物質は煮炊きによるススやタール状物質が付着したものと思われる。従って、これら外来系の大津第7群土器が、在地の十腰内1式と同様に日常生活のなかで恒常的に使用されたことを示すものと考えられる。このことは、器種分化の未発達なこの時期において、ある意味で当然の結果であるが、逆にいえば、遠隔地の土器だからといって特殊な扱いを受けなかったことを証明する興味深い事実といえよう。

次に、編年の位置づけについて述べるが、説明は層位的発掘に基づくとされた遠藤氏の編年(北海道埋蔵文化財センター 1988)を援用して行うこととする。氏は、この時期の土器を5段階に分類しているが、これによると、本遺跡のものは2類と3類に比定されるものが多いようである。すなわち、2類は、口縁部の幅が狭いもの(64、65、67、68、69)や口縁部に粘土紐の貼り付けられたもの(66~69)、櫛状工具で文様が描かれたもの(64、65、67、68、74)が相当し、3類には、口縁部の幅が広く内外面に弧状文が施されるもの(70~72)や多段化した乙字文(68~72)を有するものが該当する。このほか、2類的な粘土紐を貼り付けた幅の狭い口縁部に、3類的な多段化した乙字文が併存した過渡的なもの(69)も含まれている。このように個別にみた場合、2類と3類、そして両方の要素を持つものとの3種類に分かれることから、編年上における差が認められるが、これらをセットとして捉えた場合はどうであろうか。他の面を含めて考えてみると、まとまりのある出土状況や過渡的なものに代表される時間幅の小さいことに加え、後述する胎土の斉一性などからすると、時間差とするよりはむしろ同時存在とする要素が強いように思われる。従って、現時点では2類から3類への過渡的要素を含んだ同時期の一群として捉えておきたい。

ところで、このような外来系土器の胎土は、在地のものとは比べた場合にどのような差がみられるのであろうか。これを明らかにすることは、この種の土器の性格を解明する上で非常に重要である。ここでは、三辻利一氏に依頼した自然科学的な分析結果をもとに、胎土について考えてみたい。まず、分析試料を提出するにあたり念頭においたことは、土器が遺跡周辺で製作されたものかどうかの判定である。従って、大津第7群土器を、在地の特徴を備えたあらゆる時期の土器と比較することで、相違点が見い出せるのではないかと考えた訳である。そのため、分析の対象として大津第7群土器は勿論のこと、在地の縄文時代早期から平安時代に至るまで、120点の土器を数えるに及んだ。このうち後期のものは、分析を行った58点すべてが十腰内1式と大津第7群土器に比定され、結果は34点がA群、18点がB群、6点が未分類であり、主にA、B両群に分けられ、一定のまとまりがあること

が判明した。中でも大津第7群土器は、分析した10点のうち、稲妻状文が施されたもの(73)を除く9点すべてがA群に属していることから極めて斉一性が高く、また、十腰内1式と群を共有することがわかった。また、ここでみられるA、B両群の胎土は、後期以外にも在地の前期や晩期の土器に少量認められることから、在地的な胎土である可能性はかなり高いものと思われる。よって、これらと胎土を同じくする大津第7群土器は、遺跡周辺で製作されたという結論に達する。このことは、考古学的にみても、遠隔地の土器の移動が小型精製品などに多く、本遺跡のような深鉢形土器に少ないことから裏付けられよう。

以上、これまでの検討から理解できたことを要約すると次のとおりである。

- ・出土範囲は、CP～CV-60～65グリッドラインを中心にまとまる。
- ・文様モチーフなどは異なるものの、器形は深鉢形で統一される。
- ・磨滑縄文のものは、北海道南部同様に事前に櫛状工具による文様の削付(下書き)がなされる。
- ・遠藤編年の2類と3類の特徴を示すものが多いが、全体的には両者の過渡的様相を示す。
- ・十腰内1式同様、円状の剥落痕や黒色物質の付着が認められ、煮炊きに使用された可能性がある。
- ・胎土は在地のものと同じ部類に属することから、遺跡周辺で製作された可能性が高い。

こうしてみると、これらの土器は、器形や文様モチーフなどの差を除いては、出土状況、時期、製作技法、使用痕、胎土に至るまで、様々な部分で共通する要素が多いことがわかる。これをまとめると、土器は北海道と同じ技法により遺跡周辺の土を利用して作られ、煮炊きに使われたのち、最終的に同じ場所に廃棄されたといえようが、ここで注意したいのは、本場の製作技法と在地の胎土といった、通常ではあり得ない事実についてである。では、一体何故このような土器が生み出されることとなったのだろうか。

かつて、林謙作氏は「亀ヶ岡と亀ヶ岡もどき」と題した論文の中で、本場のものとそうでない土器の違いを見分ける上において、本場の製作技法が守られているかどうかを一つの目安とされた。確かに、ただ単に形態や文様の模倣のみを目指すならば、表面的なトレースのみでも十分に事足りる訳で、本場の技術を踏襲する必要性はどこにもない。ましてや、見た目にも良くない下書きの痕跡は、模倣品を製作する過程においては必要ない。しかし、この点が忠実に守られているところに、本遺跡の大津第7群土器が、単なる模倣品に止まらないことを示している。そこには、本場の製作過程を熟知した人物がいたからこそ成し得た、本当の意味での本場との同一性がみられるのである。但し、このことに加え、土器が遺跡周辺で製作されたことも忘れてはならない。ここに至って、この相反する事実を理解するには、本場北海道の土器製作者が、津軽海峡を越え、本遺跡周辺で土器を製作したと考えることがもっとも自然なように思われる。こうして誕生した、野尻(1)遺跡の大津第7群土器は、厳密には搬入品とも模倣品とも言い難い、明らかに本場の作り手の移動を示す、申し子のような存在であるといえよう。

ところで、このような北海道からの製作者を受け入れた背景には何があったのであろうか。これを理解するには、当然、本遺跡のみならず、この時期における本県と北海道との関係について文化的に考えてゆく必要がある。今回はこれに深く触れることができないため、簡略に記すが、冒頭で触れたように、本県における大津第7群土器の分布が津軽地方に偏ることや、金子昭彦氏が津軽地方の十腰内1式後半期の土器について「この地域は、鍔の手文など北海道の大津式の影響を明らかに受け」て

いと指摘(金子 1996 p.57)していることなどを考え合わせると、土器の面からみた場合、両者の関係は密接なものであったと思われる、この中における土器製作者の移動も十分に考えられよう。そして、一般的に言われるように、土器の製作は女性が行ったものとするならば、今後、両地域間における婚姻形態なども考えてゆく必要がある。また、このほかに、土器以外のものの動きについても探らなければならない。その一例として、石材の流通が挙げられるが、本遺跡でも大津第7群土器の分布範囲に程近いCU-66グリッドから、黒曜石製の異形石器が1点出土している。そのため、この方面からの関連性を探るべく、藁科哲雄氏に産地同定と年代測定を依頼した。結果は、産地が92%の確率で北海道置戸産、年代に関しては縄文時代中期前半頃に相当する $4,900 \pm 103$ 年前と $4,515 \pm 118$ 年前の値が得られた。従って、産地は問題ないものの、年代についてはズレが生じた。ただ、この石器は両面に火熱を受けているようで、この場合は年代の判定に誤差を生じる可能性があるらしい。よって、大津第7群土器との関連性は直接的にいえなくても、その可能性は残されたものとしておきたい。

以上、本遺跡で出土した大津第7群土器について、考古学的手法と自然科学的手法を併用することで、本県と北海道の交流の一部について述べてきた。導き出された結果としては、北海道から移動してきた土器製作者が、本遺跡周辺の上で土器を製作したことで、本場の技法と在地の胎土をもつ大津第7群土器が生まれ、それらが在地の十腰内1式と同様に日常生活で利用され、最終的には同じ場所に廃棄されたという点に辿り着いたことで、一応本遺跡なりの解答は出せたものと思われる。但し、この結論は、土器からみた側面であり、あくまでも当時の交流の一端に過ぎない。今後は、石材の移動なども考慮しつつ、社会全般を対象とした研究を積み重ねることで、津軽海峡を挟んだ交流の諸相が明らかになってくるものと思われる。今回、様々な制約からそれに一歩でも近づけたかは疑問であるが、冒頭で触れた県内の資料集成などに関しても、いずれ稿を改めることで責任を果たしたい。最後に、筆者が昨年12月に南北海道情報交換会に出席し、これら大津第7群土器を持参した際に、その場に居合わせた研究者諸氏に多くのコメントを頂いた。それを要約すると、「器形やモチーフ、製作技法は北海道のものに比べて遜色ないが、胎土は北海道のものとは思えない。」とのことであったが、今回、奇しくもそのおりの結果となった。これからは、当時の文化交流を復元する上で、考古学と自然科学を併用した研究が益々必要となってくるし、当然、過去に掘り出された資料に関しても、再度検討することが増えてくるものと思われる。

(佐藤 智生)

Ⅶ章 まとめ

本遺跡は、南津軽郡浪岡町の大釈迦川右岸に位置する。今回の調査は、昨年度の南側部分に引き続いて北側の一部を対象とし、縄文時代早期～晩期、弥生時代、平安時代の遺構や遺物が検出された。

確認された遺構数は、竪穴住居跡19、溝23、土坑35、溝状土坑4、屋外炉1、焼土10で、この中でも主体となるのが平安時代の集落跡である。この時期の住居は、竪穴住居跡を中心に掘立柱建物跡や外周溝が伴うもので、津軽地方に比較的多い。とりわけ、覆土中に白頭山火山灰を含むものは、いずれも底面或いは底面から約10cmの範囲に火山灰が認められ、時間的に近接する一群と考えられるが、遺跡が斜面に位置することや外周溝の有無によって、各々の堆積過程が異なるものと思われ、火山灰の位置のみでその時間差を推定することは難しい。ただ、床面からの差がわずかなことから、それぞれが構築された時期に違いはあっても、ある部分からは同時に存在し、廃絶の時期もほとんど差がなかったものと思われる。ところで、これら同時性の高い住居跡の特徴は、主軸はほとんどが南東方向、すなわち斜面にあわせて八甲田山の方向に向いている。その柱穴は、形状が隅丸方形を呈するものが多く、これが主柱穴や壁柱穴を問わないことから普遍的といえそうだが、形態から考えるに、柱は丸太材ではなく断面が方形のもの、つまり、板材や角材が使用されたと推測される。従って、当時すでに今日のような柱を利用していただみてよい。その配置は、細部に多少の違いがあるものの、1、柱穴のないもの（218住）、2、四隅とその間を等間隔に埋めるもの（213住、214住、219住）、3、2を基本に住居跡内部に大きな主柱穴が付くもの（208住、210住、211住、215住、216住）を基本としている。この違いは、当時の人々が、上屋構造は勿論のこと、家ごとに規模や立地条件にあわせて工夫した部分が遺構の形態差となって表れたものと理解できるが、同じことは、掘立柱建物跡や外周溝についてもいえそうである。特に外周溝は、雨水や雪解け水などの斜面上側からの水よけとして設けられたとされているが（青森県教育委員会1997）、その有無や形態の違いから、一定の設置条件があったものと推測される。恐らく、その有無については、住居跡への水の進入を食い止める必要があるか否かが鍵であり、必要のない箇所には取って作るのはなかったであろう。また、形態差に関しても、食い止めた水を下側に住む住民に対していかに迷惑をかけることなく流すかによって左右されたものと思われ、そこには集落といった共同体を形成している一員としての責任というべきものがあつたのではなからうか。このように、外周溝は水を断つ役割と同時に、管理する役割も兼ね備えていたものと予測されるが、今後はこの点にも注意して集落像を復元する必要がある。

このほかに、特筆されるものとしては、底面に火熱による固化面や還元面がみられる方形の土坑がある。これは調査区西側の斜面を中心に4基、約30～40mの間隔で並ぶもので、覆土に焼土や炭化物を多く含むが、遺物をほとんど伴わないなどの特徴がある。また、還元面こそないものの、このような例は、昨年度の調査（SK31）や青森市朝日山遺跡、新町野遺跡などでも確認されており、いずれも平安時代の集落跡であることから、この種の土坑が平安時代に属することが予想される。その性格については、遺物が伴わないこともあつて判然としないが、底面が火熱をうけている点などからすると、土器焼成遺構に通ずるものがある。ただ、変形土器や破裂剥片などの未製品がみられず物的証拠に欠けるなど、不明な点が多く、今後検討されるべき課題といえよう。

次に、遺物について述べる。この遺跡からは、縄文時代早期から晩期、弥生時代後期、平安時代に

及ぶものが出土しているが、土器型式に連続性がなく、この地の利用が断続的なものであったことを窺わせる。ただ、これが幸いしてか、縄文時代後期については、十腰内1式と大津第7群土器の単純遺跡と化しており、在地と外来といった両者の関係を理解する上で良好な資料を呈示する結果につながった。特に十腰内1式の出土地点は2箇所に別れており、このうちの一方は幅2～3ミリの細い沈線文を主体とするが、もう片方は、大津第7群土器と分布範囲を共有するもので、幅4～5ミリの太めの沈線文、櫛状工具、磨消縄文のもので占められる傾向がある。この差が時期的なものなのか、或いは外来系の大津第7群土器が関係することから、同時期の住み分け論的なものとなるのかは、これからの課題である。続いて、平安時代の焼成粘土塊について触れたい。昨年度は、土器焼成に関わるもの或いはカマドの一部分といった二つの可能性を指摘しておいたが、今回の調査で一応の解答が得られたので述べておきたい。まず、今回これらが検出された主な場所は、カマドかその周辺のピットであり、土器焼成遺構の可能性のある土坑からは全く得られていない。従って、カマドと密接な関係があることがわかるが、特に第208号住居跡出土のもの(図17-15)は、表面が角張っている上にススが付着することから焚口や掛け口などの一部、すなわち、カマドそのものである可能性が高いと思われる。こう考えると、本遺跡のカマドは、草を混入して構築されたものとして理解できるが、こうすることにどのような意味があったのであろうか。推測ではあるが、本遺跡のカマドは芯材が使用されている例が稀なことから、あたかも土壁に草や木を混入するように、所謂つなぎとしての役割を持たせることで、製作時の形状の維持や強度不足を補っていたものと考えられる。いずれにせよ、本遺跡のものは、土器焼成とは無関係であったが、焼成粘土塊が生ずる1つのパターンを呈示できたものと思われる。このほか、第215号住居跡出土の須恵器長須壺(図34-15)についても述べておきたい。これは、一昨年に調査された五所川原市犬走窯の製品によく似るもので、胎土分析の結果も五所川原領域に含まれる。犬走窯との関係で考えると、出土状況は、両者とも覆土に白頭山火山灰を含むことから、時期的には火山灰降下以前ということで一致する。特に、本遺跡のものは火山灰直下であることから、火山灰降下直前に廃棄されたとみて良いだろう。ただ、筆者が双方を実見したところでは、色調は赤褐色を呈し非常に良く似るものの、口縁部の形状と刻書に違いがみられる。すなわち、口縁端部は、本遺跡のものが緩やかなのに対して、犬走窯のものが直立する傾向にあり、刻書も、本遺跡のものが肩部に三角形もしくは女と読めそうなものが施されるのに比べ、犬走窯のものは頸部に異なったものを施している。このような違いから、一応は異なる窯の製品としておくが、時期的にも位置的にも犬走窯に近い窯の製品と思われ、今後の窯跡の調査に期待したい。

このほか自然科学的分析では、胎土分析により基本となる土器の胎土が4種類確認され、これらが時期毎に異なる傾向にあることや、外来系の大津第7群土器が在地産の胎土で製作された可能性が高いことが予測された。因みに、このような、時期ごとに異なる胎土を用いて土器を製作している例はあまり知られていないようである。また、黒曜石の分析では、遺構外出土の異形石器は、水和層の分析による年代測定が行われたほか、北海道置戸産の原石を用いたものであることが判明した。

以上、今回の調査で、当遺跡における人間の活動が縄文時代早期まで遡ることが判明した。縄文時代は北海道との文化交流の一端が垣間みられるが、遺構としてはわずかに土坑などが設けられるに過ぎなかったようである。この遺跡に集落という形で本格的な人々の生活痕跡が残されるのは、平安時代に入ってからのことであった。(佐藤 智生)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1975 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第22集
 青森県教育委員会 1975 『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第25集
 青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』
 青森県埋蔵文化財調査報告書 第33集
 青森県教育委員会 1988 『上尾鞍(2)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第115集
 青森県教育委員会 1995 『朝日山(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第167集
 青森県教育委員会 1998 『野尻(1)遺跡Ⅰ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第234集
 青森県教育委員会 1998 『新町野遺跡・野木遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第239集
 秋田県教育委員会 1993 『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
 秋田県文化財調査報告書 第231集
 新谷雄藏 1986 『五所川原市観音林遺跡出土の十腰内Ⅰ式終末期の土器について』『青森県考古学』3
 磯崎 正彦・今井富士雄 1968 『十腰内遺跡』『岩木山』 岩木山刊行会
 遠藤香澄 1988 『新道4遺跡における大湯系土器の編年について』『木古内町 新道4遺跡』
 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第52集
 尾上町教育委員会 1981 『李平Ⅱ号遺跡発掘調査報告書』 尾上町教育委員会調査報告書第2集
 葛西 勲 1979 『十腰内Ⅰ式土器の編年の細分』『北奥古代文化』11 北奥古代文化研究会
 葛西 勲・高橋潤 1987 『青森市四ツ石遺跡調査報告』 青森山田高等学校考古学研究会
 金子 昭彦 1998 『十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(3)一型式の骨格一』『縄文時代』9
 金子 昭彦 1994 『東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器』『紀要』XIV
 岩手県埋蔵文化財センター
 1995 『十腰内Ⅰ式と大湯式における型式としての諸問題』『岩手考古学』7
 1996a 『十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(1)』『縄文時代』7
 1996b 『十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方』『岩手考古学』9
 1997a 『十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(2)』『縄文土器』8
 1997b 『十腰内Ⅰ式と「大湯式」における壘形土器の変遷』『岩手考古学』9
 窯跡研究会 1997 『古代の上師器生産と焼成遺構』
 久保 泰ほか 1983 『白坂』 松前町教育委員会
 五所川原市教育委員会 1988 『観音林遺跡(第六次発掘調査報告書)』
 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集
 五所川原市教育委員会 1989 『観音林遺跡(第七次発掘調査報告書)』
 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集
 五所川原市教育委員会 1990 『観音林遺跡(第八次発掘調査報告書)』
 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集
 五所川原市教育委員会 1991 『観音林遺跡(第九次発掘調査報告書)』
 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集
 五所川原市教育委員会 1992 『観音林遺跡(第十次発掘調査報告書)』
 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集
 斉藤 傑 1974 『松前町大津遺跡発掘報告書』 松前町教育委員会
 鈴木 克彦 1998 『東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4—十腰内Ⅰ式と直前型
 式の研究—』『縄文時代』9
 名取 武光・峰山 巖 1958 『入江貝塚』『北方文化研究報告』13 北海道大学北方文化研究室
 成田 滋彦 1981 『後期の土器—青森県の土器』『縄文文化の研究』4
 成田 滋彦 1989 『入江・十腰内式土器様式』『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
 林 謙作 1987 『亀ヶ岡と亀ヶ岡もどき—地域性をとらえる指標—』『季刊 考古学』21
 福田 友之 1994 『縄文時代の物と人の移動—津軽海峡をはさむ文化交流』『北日本の考古学』
 北海道埋蔵文化財センター 1988 『木古内町 新道4遺跡』
 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第52集
 本間 宏 1985 『東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態』『よねしろ考古』1
 1987 『縄文時代後期初葉土器群の研究(1)』『よねしろ考古』3
 1988 『縄文時代後期初葉土器群の研究(2)』『よねしろ考古』4



東から



東から



西から



西から



西から



西から



南から(第215号住居跡付近)



北から(第205号住居跡付近)



CH-79西壁



CX-75南壁



CK-60北壁

写真2 基本層序 (セクション)



第201号住居跡



第201号住居跡



第201号住居跡セクション(C-D)



第201号住居跡1号カマド



第203号住居跡



第201号溝跡・第202号溝跡・第203号溝跡



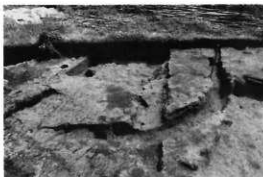
第201号溝跡セクション・第202号溝跡セクション (G-H)



第201号溝跡セクション・第202号溝跡セクション (I-J)



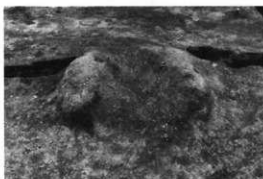
第204号住居跡



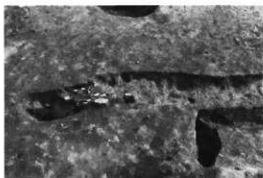
第212号溝跡



第205号住居跡



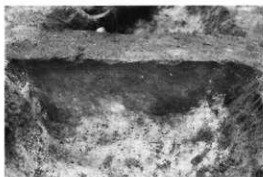
第205号住居跡カマド



第206号溝跡



第206号溝跡出土遺物



第206号溝跡セクション



第206号溝跡セクション



第206号住居跡
第208号溝跡



第206号住居跡セクション



第208号溝跡
セクション



第208号溝跡
セクション
(C-D)



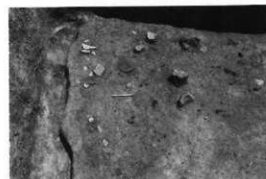
第207号住居跡



第207号住居跡
カマド



第207号住居跡セクション(A-B)



第207号住居跡出土遺物(ビット4)

写真5 住居跡(3)



第208号住居跡



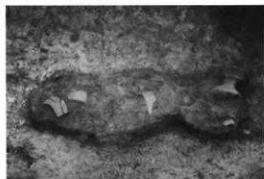
第208号住居跡カマド



第210号溝跡



第210号溝跡セクション(I-J)



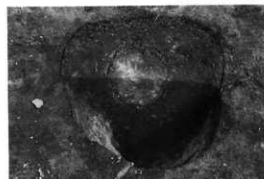
第210号溝跡出土遺物



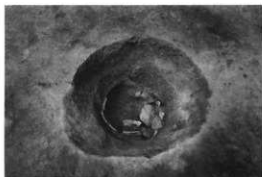
第210号溝跡セクション(G-H)



第208号住居跡付属掘立柱建物跡ビット4



第208号住居跡付属掘立柱建物跡(O-P)



第216号土坑



第216号土坑セクション(Q-R)



第209号住居跡



第209号住居跡セクション(A-B)



第210号住居跡



第210号住居跡セクション(C-D)



第210号住居跡・第211号溝跡



第210号住居跡出土遺物



第210号住居跡カマド



第211号溝跡・第213号溝跡



第211号溝跡セクション(Q-R)



第211号溝跡セクション(M-N)



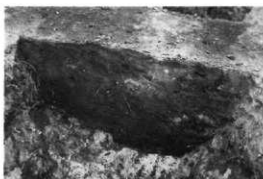
第211号住居跡・第216号溝跡



第211号住居跡セクション(A-B)



第216号溝跡セクション(O-P)



第216号溝跡セクション(K-L)



第216号溝跡セクション(M-N)



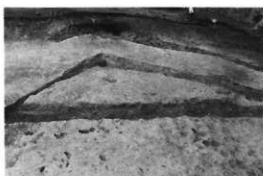
第212号住居跡セクション(A-B)



第212号住居跡・第218号溝跡



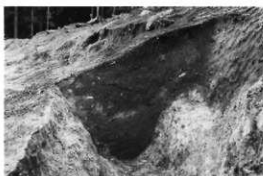
第218号溝跡セクション(E-F)



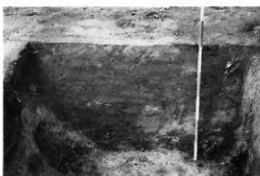
第213号住居跡・第217号溝跡



第213号住居跡セクション(A-B)



第217号溝跡セクション(C-D)



第217号溝跡セクション(E-F)



第214号住居跡・第220号溝跡



第214号住居跡



第214号住居跡セクション(C-D)



第214号住居跡カマド



第214号住居跡カマド



第220号溝跡



第220号溝跡セクション(K-L)



第220号溝跡セクション(I-J)



第215号住居跡



第215号住居跡セクション(C-D)



第215号住居跡1号カマド



第215号住居跡1号カマド



第215号住居跡2号カマド



第215号住居跡出土遺物(33-2・4)



第221号溝跡



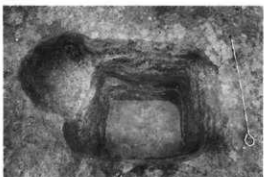
第223号溝跡



第216号住居跡(A-B)



第216号住居跡セクション



第216号住居跡ピット1



第222号溝跡



第217号住居跡



第217号住居跡セクション(C-D)



第217号住居跡張り出部出土遺物



第217号住居跡セクション(A-B)



第218号住居跡



第218号住居跡セクション(A-B)



第219号住居跡



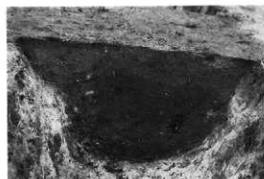
第219号住居跡



第204号溝跡



第205号溝跡



第204号溝跡セクション(A-B)



第205号溝跡セクション(G-H)



第207号溝跡



第207号溝跡セクション(A-B)



第209号溝跡



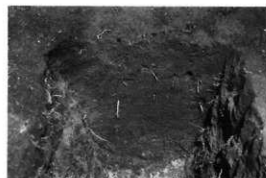
第209号溝跡



第209号溝跡セクション(C-D)



第214号溝跡



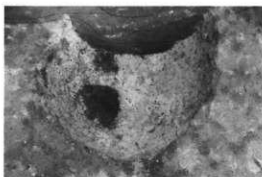
第214号溝跡セクション(C-D)



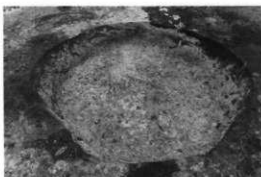
第201号土坑



第202号土坑



第203号土坑



第204号土坑



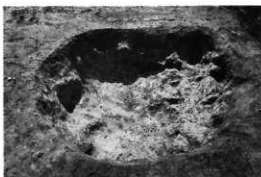
第205号土坑



第206号土坑



第207号土坑



第208号土坑



第209号土坑



第210号土坑



第211号土坑・第212号土坑



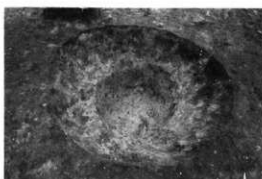
第212号土坑・第213号土坑



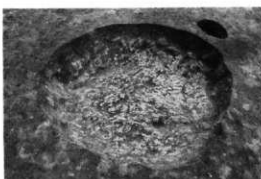
第215号土坑



第217号土坑



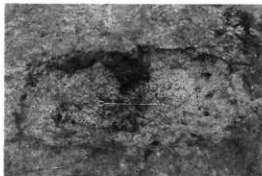
第218号土坑



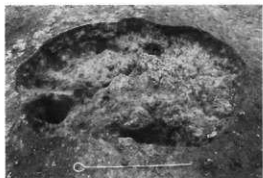
第219号土坑



第220号土坑



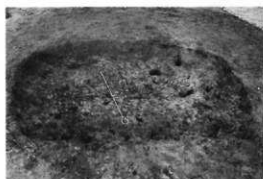
第224号土坑



第225号土坑



第226号土坑



第228号土坑



第229号土坑



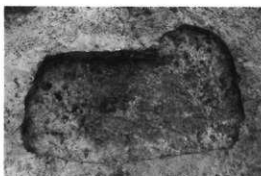
第230号土坑



第231号土坑



第232号土坑



第233号土坑



第234号土坑



第235号土坑



第201号溝状土坑



第201号溝状土坑セクション



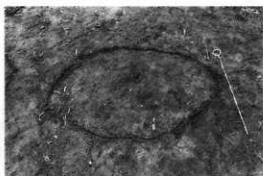
第203号溝状土坑



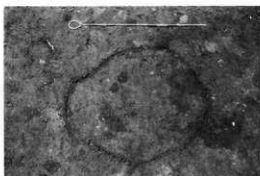
第204号溝状土坑



第201号屋外炉



第201号焼土



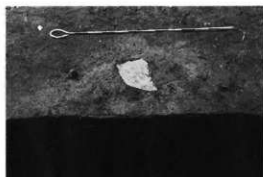
第202号焼土



第203号焼土



第204号焼土



第207号焼土



第208号焼土



CH-77グリッド出土土器(88-13)



CK-82グリッド出土土器

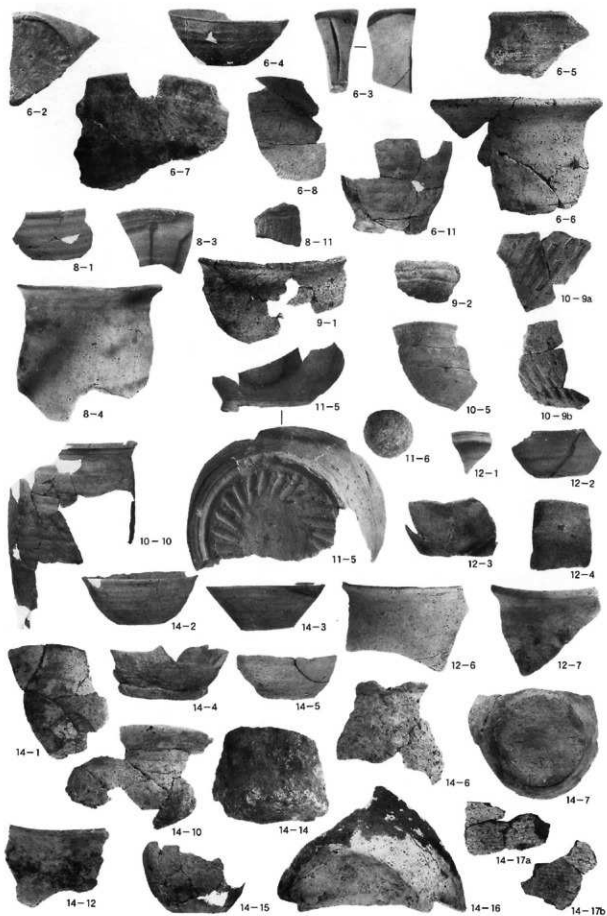


写真20 住居跡出土遺物1)

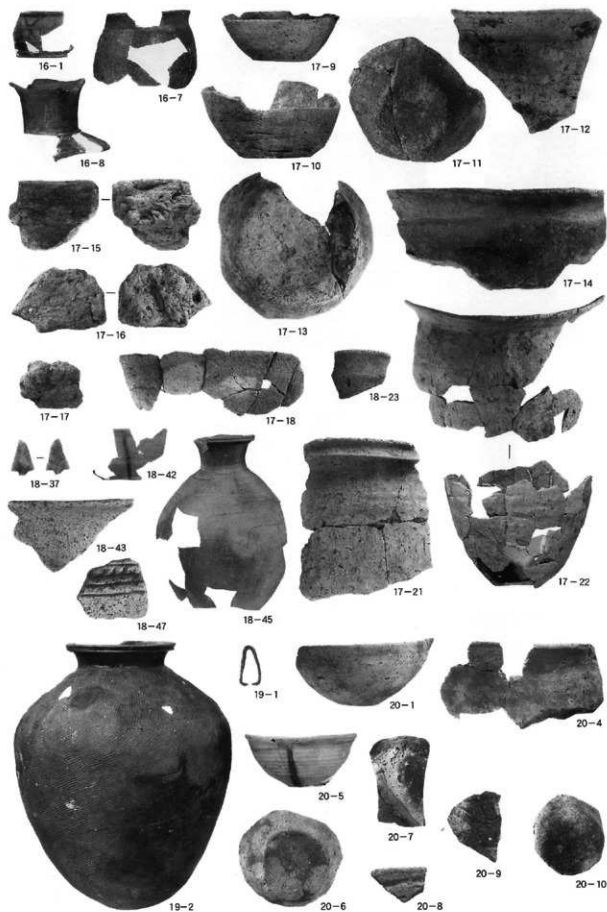


写真21 住居跡出土遺物(2)

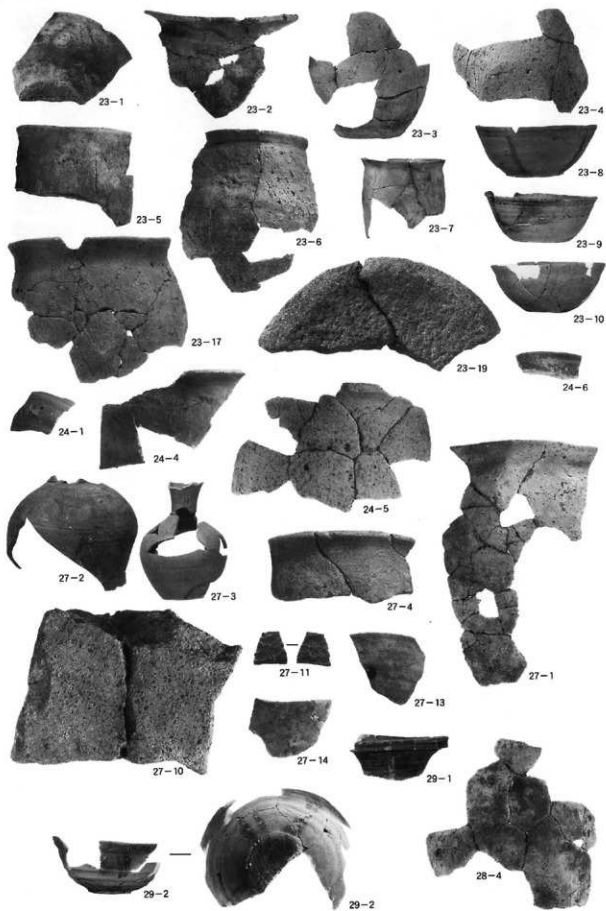


写真22 住居跡出土遺物(3)

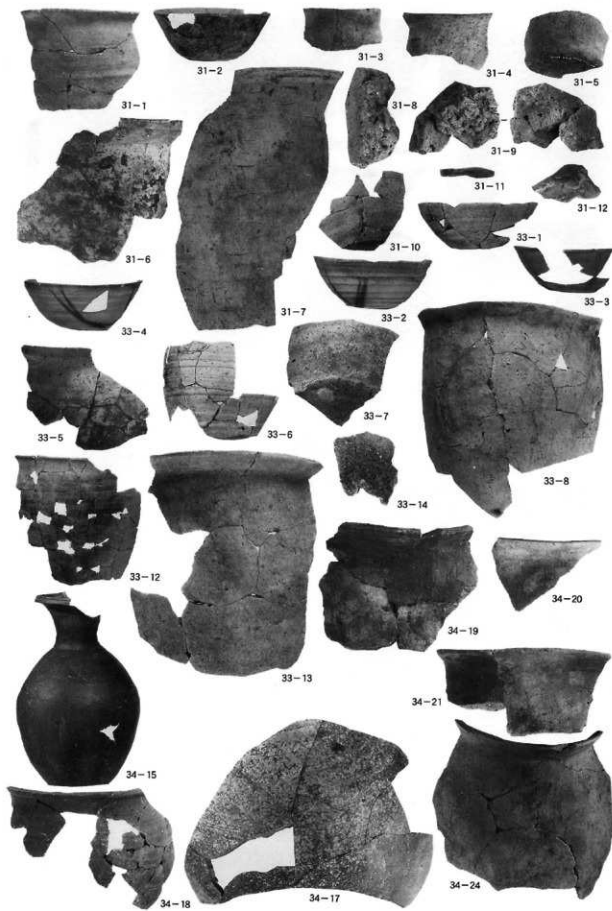


写真23 住居跡出土遺物(4)

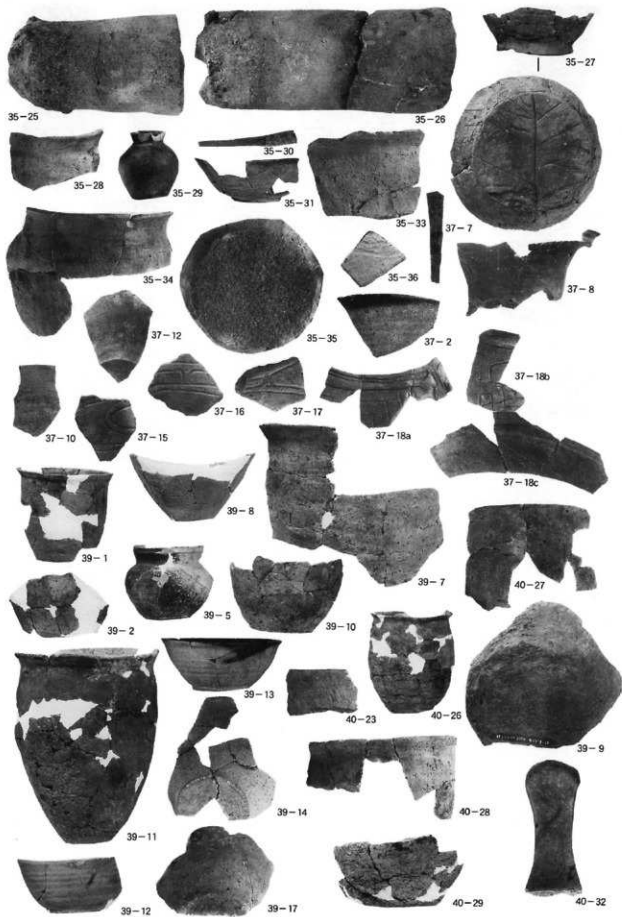


写真24 住居跡出土遺物(5)

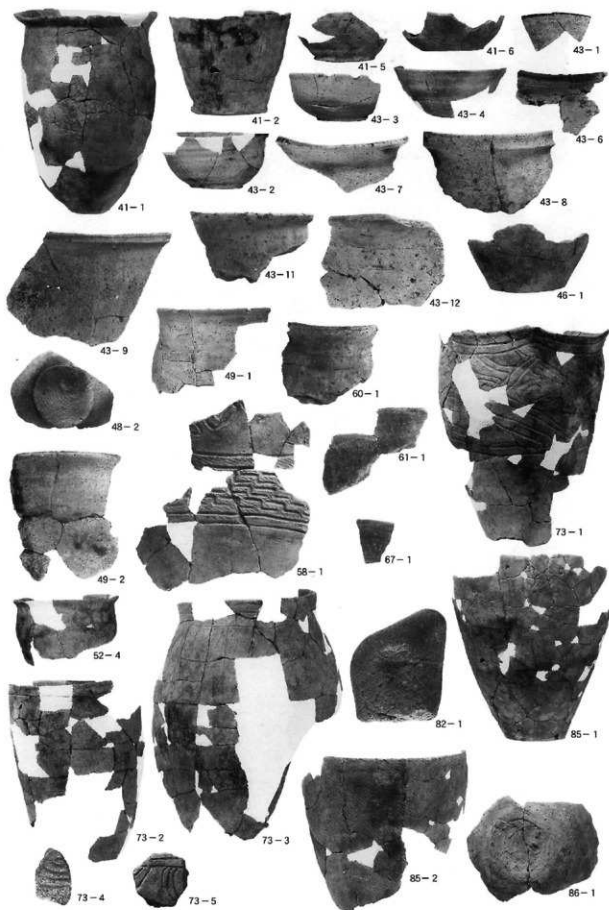


写真25 住居跡(6)・溝跡・土坑等出土遺物

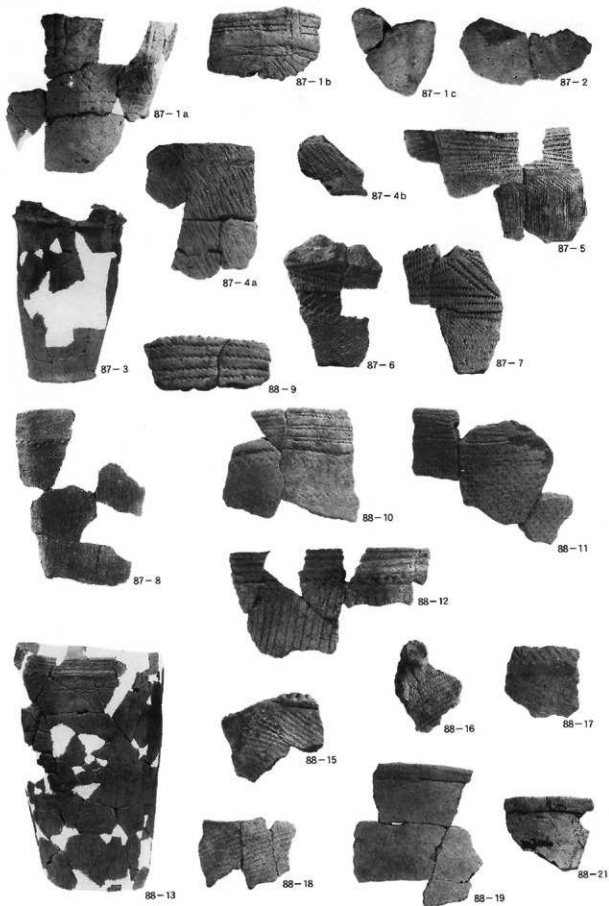


写真26 遺構外出土遺物(1)

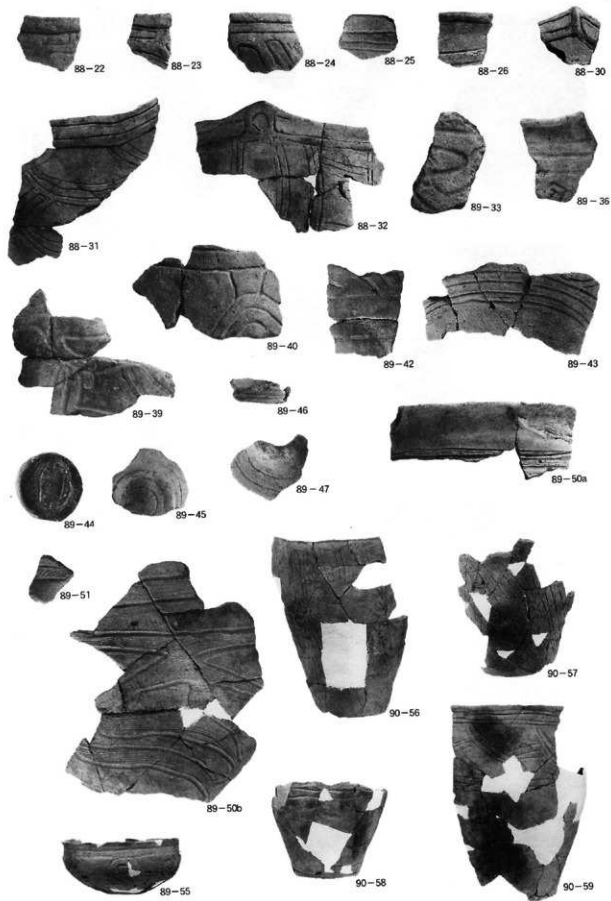


写真27 遺構外出土遺物[2]

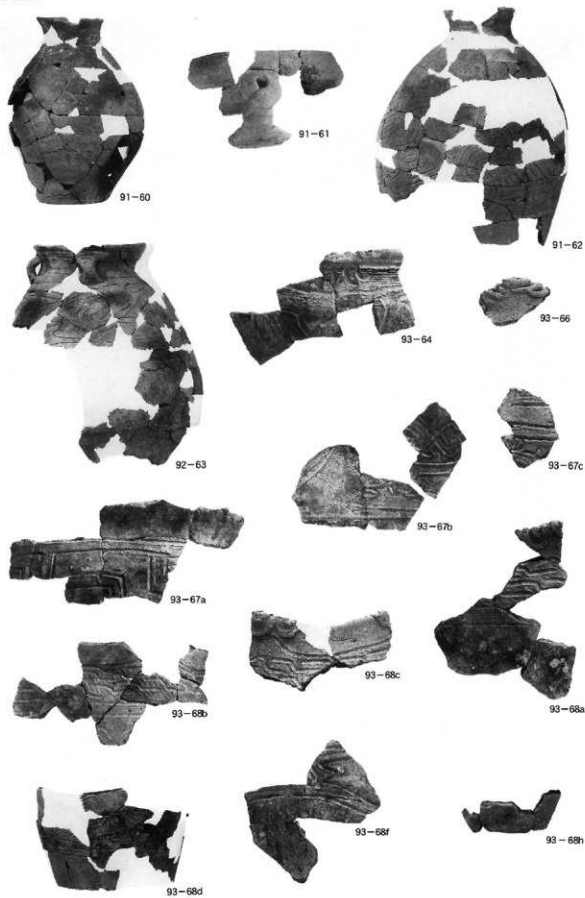


写真28 遺構外出土遺物(3)

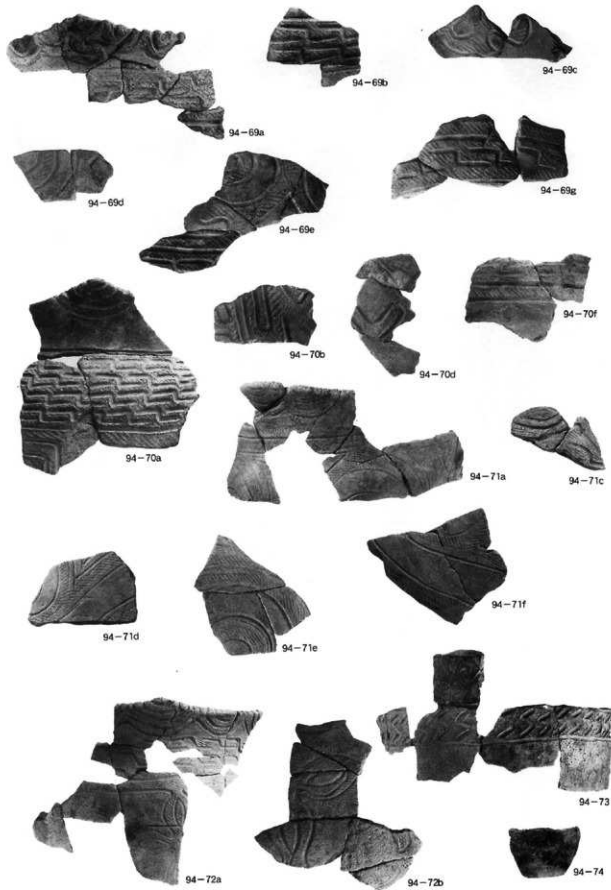


写真29 遺構外出土遺物(4)

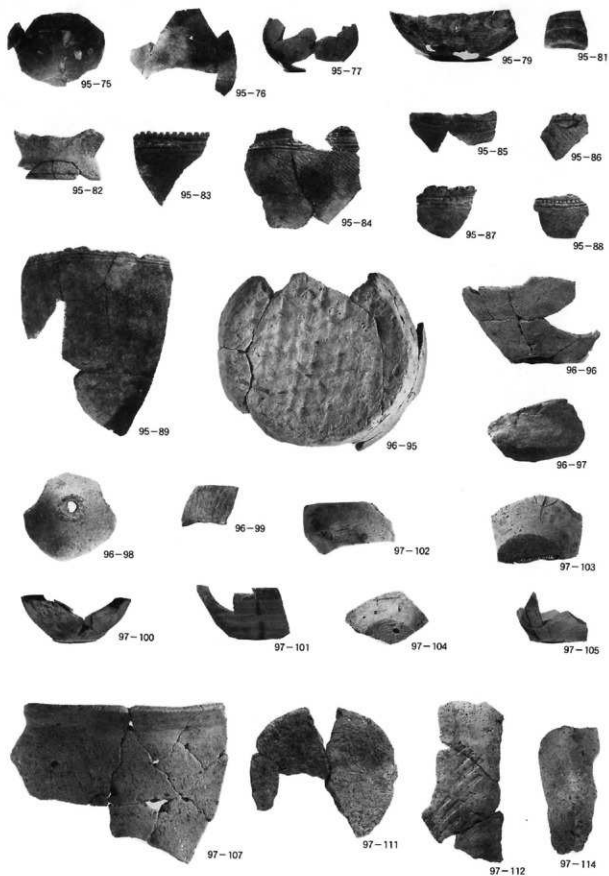


写真30 遺構外出土遺物(5)

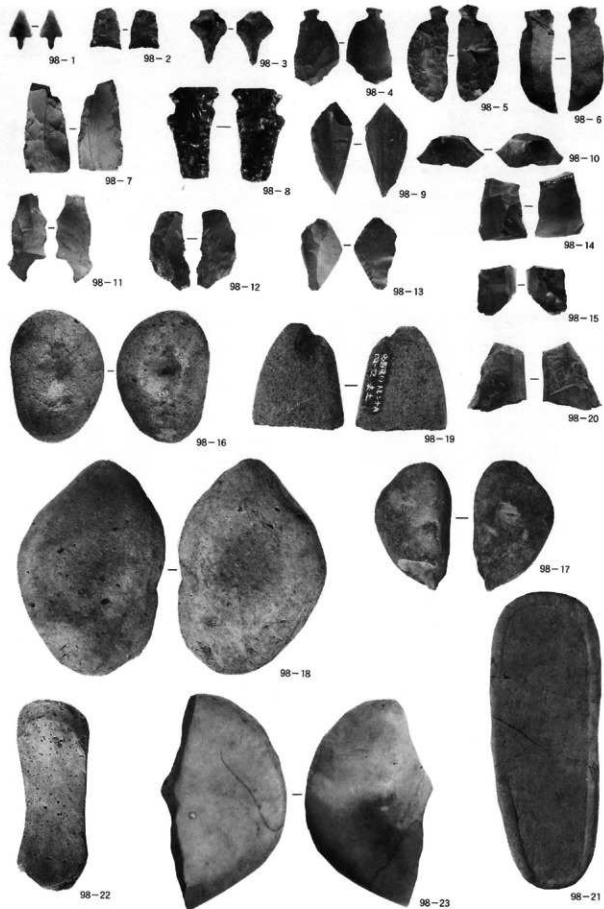
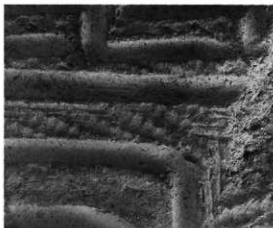


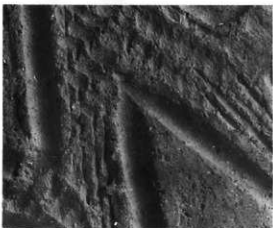
写真31 遺構外出土遺物(6)



58-1 櫛状工具



94-70a 櫛状工具



94-70b 櫛状工具



94-70d 櫛状工具



94-71d 半截竹管状工具



95-73 櫛状工具



19-2



18-45



16-8



27-2



34-15



23-8



14-3



35-29

報 告 書 抄 録

ふりがな	のじり(1)いせき							
書 名	野尻(1)遺跡 II							
副 書 名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻 次	II							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第259集							
編 著 者 名	工藤 大・佐藤 智生							
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒038-0042 青森市大字新城字犬田内152-15 TEL.0177(88)5701 FAX.0177(88)5702							
発行年月日	西暦1999年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のじり 野尻(1)遺跡	青森県南津軽郡浪岡 町大字高屋敷字野尻 154-4外	02364	29060	40° 44' 35"	140° 35' 05"	19970430 ~ 19971029	11.000	国道101号浪 岡五所川原道 路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野尻(1)遺跡	散布地	縄 文	溝状土坑 屋外か 土坑	4基 1基 6基	縄文土器 石器 土製品		早期の土器(物見台式) 後期の土器(十腰内I式・ 大津第7群)	
	集落跡	平 安	住居跡 土坑 溝跡 焼土	19棟 7基 19条 10基	土師器 須恵器 土製品		・集落跡を確認 ・掘立柱建物跡と外周溝が 伴う住居跡を多数検出 ・白頭山-苫小牧火山灰降 下以前の遺構が多い	

青森県埋蔵文化財調査報告書 第259集

野 尻 (1) 遺 跡 II

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 1999年3月25日
 発 行 青森県教育委員会
 編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
 〒038-0042 青森市大字新城字犬田内152-15
 TEL 0177-88-5701 FAX 0177-88-5702
 印 刷 所 株式会社 誠 工 社
 〒030-0112 青森市大字八ツ校字上林78-42
 TEL 0177-29-1611 FAX 0177-29-1188



活彩あomorい
—輝くあomorい新時代—